

い」といふのは、此の道理によるものである。他人の救の爲に戦ふことは、己が救を全うする所以だからである。(二一六)

◎サウルは、ダビデのケイラに居ることを聞いて、「神かれを我が手にわたしたまへり。其はかれ門あり、關ある邑にいりたれば、閉ぢこめらるればなり」といひ、之を圍まんと計つたが、その間にダビデは豫め、それらのことを神から告示され、又ケイラの人々がサウルを待迎へて、彼をその手に付すべき恐のあることを知つた故、乃ちケイラを立出でて、ジフの野にある山に隠れた。これは後にスリアの王が、イスラエルの王と戦ふに當り、イスラエルには預言者エリシヤが居つて、スリア王の寢室にて語る所の言をも、イスラエルの王に告げた爲、屢々計略の裏をかゝれて失敗した(列下六・一二)といふのと、似た話である。己がはかりごとをエホバに深くかくさんとする者は、わざはひなるかな。暗中にありて事をおこなひていふ、誰か我を見んや、たれか我をしらんやと。なんぢらは曲れり。いかで陶工をみて、土塊のごとくおもふ可けんや。造られし者、おのれを作れる者をさして、我をつくれるにあらずといふをえ

んや。形づくられたる器は、かたちづくりし者をさして、智慧なしといふを得んや。(イザ二九・一五、一六)とあり。神の御許なしには、誰も神の僕に、指一本觸るゝことが出來ないのである。(七一四)

◎ヨナタンは、ダビデがジフの野の叢林に居るのを訪ねて、種々懇談する所があつた。そんなことが若しサウルに知れようものなら、ヨナタンの生命は危かつたであらうに、それを押切つて訪ねてくれた、彼の眞實なる友情はたふとい。これは彼等が地上に於ける、最後の面會であつた様に見える。ヨナタンはダビデにとつて、最も實意のある友人であつた。彼は敬虔の人であつた。それ故「神によりてダビデの力を強うせしめ」たのである。彼は無私の人であつた。それ故ダビデに向うて、「汝はイスラエルの王とならん。我は汝の次なるべし」といひ得たのである。耶蘇は仰せられた、「汝等のうち大なる者は若き者のごとく、頭たる者は事ふる者の如くなれ。食事の席に著く者と事ふる者とは、何れか大なる、食事の席に著く者ならずや。然れど我は汝らの中に事ふる者のごとし」(エカ二二・二六、二七)と。私共はヨナタンのやうに、何處までも謙つて、

神と人との爲に奉仕したいものである。(一五一一八)

◎ジフ人は、ダビデがその地方にて、叢林の中なる要害に隠れて居るのを見出し、之をサウルに告げ、彼を手引してダビデを陥れんと試みた。その際ダビデが作つた詩に、「神よ、ねがはくは、汝の御名によりて我をすくひ、なんぢの力をもて我をさばきたまへ。神よ、わが祈をさしたまへ。わが口のことばに耳をかたづけ給へ。そは外人はわれにさからひて起りたち、強暴人はわがたましひを索むるなり。かれらは神をおのが前におかざりき。」(詩五四・一一三)とあり。彼が如何に只管、神の助により頼んだかを察せらるゝ。後にパウロが「われら四方より患難を受くれども窮せず、爲ん方つくれども希望を失はず。責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず。」(コリ後四・八、九)というたのも、亦之と似た體驗であつた。(一九一二三)

◎サウルは、マオンの野にてダビデを追ひ、彼が山の此旁を行けば、ダビデとその從者とは、山の彼旁をゆいたとあるのは、その昔イスラエル人が紅海を濟る時、それまで陣營の前にあつた雲の柱が後に移り、エジプト人とイスラエル人との間に至り、彼がためには雲となり、暗となり、是がためには夜を照した爲に、彼と是と夜の中に相近づかなかつたといふ物語を、思ひ出さしめる。(出一四・一九、二〇)神はその民を憶えて、之を保護し給ふのである。(二四一二六)

◎斯てサウルは、殆どダビデに肉迫せんとする間に、使者が來つて、「ペリシテ人國ををかす。急ぎ來り給へ。」といふのに會ひ、餘儀なくもダビデを追ふことを止めて、歸り去ることゝなつた。そこで人々はその所の名を、セラマレコテ(のがれ岩)と名づけたのである。悪魔がヨブを試みんことを願ひ、神にその許を求めると、はじめには神が「視よ、彼の一切の所有物を汝の手に任す。唯かれの身に汝の手をつくる勿れ。」(ヨブ一・一二)と仰せられ、次には又「彼を汝の手に任す。只かれの生命を害ふ勿れ。」(ヨブ二・六)と宣ひ、悪魔はたゞ神から許された範圍に於てのみ、之を試み得たと記してある。その如く神は見計らうて、その試練と困難との襲ひ來ることを許し給ふ。しかもまさかの場合には、必ずその御手を伸べて、私共を災禍の中から救ひ給ふ故、私共は安んじてその愛の御手に一切を委ぬる以外に、幸福有用又安全なる生活を營むことは

出来ないのである。(二七一・二九)

### 二六 敵を愛す

#### (サムエル前書第二十四章)

一 サウル、メリシテ人を追ふことをやめて還りし時、人々かれにつけていひけるは、視よ、ダビデはエンゲデの野にありと。ニ サウル、イスラエルの中より選みたる三千の人を率ゐ、ゆきて野羊の巖にダビデと其従者を尋ぬ。三 途にて羊の機にいたるに、其處に洞穴あり。サウル其足を掩はんとていりぬ。時にダビデと其従者洞の隅に居たり。四 ダビデの従者これにいひけるは、エホバが汝に告げて、視よ我汝の敵を汝の手にわたし、汝をして善しと見るところを彼になさしめんといひ給ひし日は今なりと。ダビデすなはち起ちて、ひそかにサウルの衣の裾をきりり。

五 ダビデ、サウルの衣の裾をきりしによりて、後その心みづから責む。六 ダビデ其従者にいひけるは、エホバの膏そそぎし者なるわが主に、わが此事をなすをエホバ禁じたまふ。かれはエホバの膏そそぎし者なれば、彼に敵してわが手をのぶるは善からず。七 ダビデ此ことばをもつて其従者を止め、サウルに撃ちかゝる事を容さず。サウルたちて洞を出て其道にゆく。八 ダビデもまた後よりたちて洞をいて、サウルの後に呼はりて、我主王よといふ。サウル後をかへりみる時、ダビデ地にふして拜す。九 ダビデ、サウルにいひけるは、汝なんぞダビデを害せんことをさばき、かつ見てわが詭を理し、我を汝の手よりすくひいだしたまはんことを。一六 ダビデこれらの言をサウルに語りて、サウルいひけるは、わが子ダビデよ、是は汝の聲なるかと。サウル聲をあげて哭きぬ。一七 しかしてダビデにいひけるは、汝は我よりも正し。我は汝に惡をむくゆるに、汝は我に善をむくゆ。一八 汝今日いかに汝が我に善くなすかを明かにせり。エホバ我を爾の手にわたしたまひしに、爾我をころさざりしなり。一九 人もし其敵にあはじ、これを安らかに去らしむべけんや。爾が今日我になしたる事の爲にエホバ爾に善をむくい給ふべし。二〇 視よ、我汝が必ず王とならんことを知り、またイスラエルの王國の爾の手によりて堅くたたんことをしる。二一 今爾エホバをさして、我にわが後にてわが子孫を斷たず、わが名をわが父の家に滅せざらんことを誓へと。二二 ダビデすなはちサウルにちかふ。是においてサウルは家にかへり、ダビ

とを求むといふ人の言を聴くや。二〇 視よ、今日汝の目エホバの汝を洞のうちにて今日わが手にわたしたまひしことを見たり。人々我に汝をころさんことを勧めたれども、我汝を惜しめり。我いひけらく、わが主はエホバの膏そそぎし者なれば、これに敵してわが手をのぶべからずと。二一 わが父よ、視よ、わが手にある汝の衣の裾を見よ。わが汝の衣の裾をきりて汝を殺さざるを見れば、わが手には惡も罪過もなきことを汝見て知るべし。我汝に罪をなかせしことなし。然るに汝わが生命をとらんとせらふ。二二 エホバ我と汝の間を審きたまはん。エホバわがために汝に報いたまふべし。然れどわが手は汝に加へざるべし。二三 古の諺にいふごとく、惡は惡人よりいづ。されど我手は汝に加へざるべし。二四 イスラエルの王は誰を起はんとて出でたるや。汝たれを追ふや。死にたる犬をおひ、一の蚤をおふなり。二五 ねがはくはエホバ、審判者となりて我と汝のあひだ

をさばき、かつ見てわが詭を理し、我を汝の手よりすくひいだしたまはんことを。一六 ダビデこれらの言をサウルに語りて、サウルいひけるは、わが子ダビデよ、是は汝の聲なるかと。サウル聲をあげて哭きぬ。一七 しかしてダビデにいひけるは、汝は我よりも正し。我は汝に惡をむくゆるに、汝は我に善をむくゆ。一八 汝今日いかに汝が我に善くなすかを明かにせり。エホバ我を爾の手にわたしたまひしに、爾我をころさざりしなり。一九 人もし其敵にあはじ、これを安らかに去らしむべけんや。爾が今日我になしたる事の爲にエホバ爾に善をむくい給ふべし。二〇 視よ、我汝が必ず王とならんことを知り、またイスラエルの王國の爾の手によりて堅くたたんことをしる。二一 今爾エホバをさして、我にわが後にてわが子孫を斷たず、わが名をわが父の家に滅せざらんことを誓へと。二二 ダビデすなはちサウルにちかふ。是においてサウルは家にかへり、ダビ

デと其從者は要害にのぼれり。

◎サウルはペリシテ人と戦ひ、之に打勝つて歸り來るや、すぐに三千人の選兵を率ゐ、  
ダビデとその從者とを尋ねる爲に、出で往いた。彼がペリシテ人と戦うたのは、イス  
ラエル人を保護する爲として、極めて必要なことであつた。けれども彼がダビデを追  
廻したのは、たゞその嫉妬心に驅られてのことで、意味もなき盲動に過ぎなかつた。  
彼の精力の一半は、斯して無益なことに費されたのである。その如く私共も、油斷す  
ると、その時間と勞力とを擧げて、多く無益のことに費消し、之を有意義に用ふるこ  
とが、至つて少い恐がある。英國のプリストル市に、救世軍の一下士官にて、角屋敷  
の高い住宅の表窓をつぶし、そこに「たゞ一度しか渡らぬ此の世は、速に過ぎ行く。」  
「たゞ耶蘇の爲になしたることのみ、永久に存す。」といふ二つの標語を掲げ、日毎そ  
の前を通る幾千の人々に、警告して居るのを見たことがある。古人の句に、「見かへれ  
ば、無駄道多し、老の坂。」とあり。私共は氣をつけて、無駄道をしたくないものであ  
る。又無駄骨折をして、その限ある精力を濫用したくないものである。(一、二)

◎ダビデが潜んで居つた洞穴に、サウルがあとから入り來つて、しばし假寢をするの  
を見て、部下の者は此の機をはずさず、サウルを殺さんことを勧めたけれども、ダビ  
デは聽かず、ひそかに往いてサウルの衣の裾をきつた。それさへ直にあとから、「その  
心みづから責め」たといふのは、如何にも彼が鋭敏なる良心の所有主であつたことを  
示すのである。パウロも同じやうに、鋭敏なる良心に従うて歩んだ人であつた。彼が  
議會に立つて、「我は今日に至るまで、事毎に良心に従ひて神に事へたり。」(使二三・一)  
といひ得たのは、その爲である。ルーテルは又、清き良心によつて立つ人物であつた。  
「我良心と共に此處に立てり。他になすべき所を知らず。神我を助けよ、アアメン」  
と、彼がウォルムスの大會に叫び出でたのは、その爲であつた。私共もどうか此等の  
人々に倣うて、嚴に良心的の生活を営みたまきものである。(三一六)  
◎サウルが睡眠より醒めて洞穴を出て行く時、ダビデも之に従うて出で、サウルの後  
に呼はり、之に向うていうた。「今日、神は汝を我が手に付し給ひたれど、我は汝を害  
はず、その他意なき證據を示さんとて、たゞ汝の衣の裾を切り置いたのである」とい

うて、その布片を示した。彼は斯して徳を以て怨に報いたのである。サウルの壓迫に報ゆるに敬愛を以てしたのである。「なんぢの仇もし飢ゑなば之に糧を食はせ、もし渴かば之に水を飲ませよ。なんぢ斯するは、火をかれが首に積むなり。エホバなんぢに報い給ふべし。」(箴二五・二二・二三)とあり。ダビデはさうした寛容と親切とを以て、サウルを遇したのである。(七一・一二)

◎斯て後ダビデはいうた。「イスラエルの王は、誰を趕はんとて出でたるや。汝たれを追ふや。死にたる犬をおひ、一つの蚤をおふなり。ねがはくはエホバ審判者となりて、我と汝のあひだをさばき、かつ見てわが訟を理し、我を汝の手よりすくいいだしたまはんことを」と。古語に、「君、君たらずと雖も、臣、臣たらざるべからず。」といふことがあるのを、ダビデは如實に行ひ、その以上の批判は全く神に委ね奉つたのである。後にソロモンは、「弱き者を弱きがために掠むることなかれ。艱難者を門にて壓しつゝること勿れ。そはエホバその訴を糺し、且かれらを害ふ者の生命をそこなはん。」(箴二二・二三)というて居る。私共は公平なる審判を行ふ神が、天に在すことを知つて、

各々その前に憤む所を知らねばならぬ。(二二・一五)

◎ダビデがそのいふ所を語り了へた時、サウルは聲をあげて泣いた。そのあさましい偏狭な胸の中を、ダビデの敬虔にして寛容なる心に較べて、全く恥入つたからである。彼はその罪を自覺した。然しながら其の罪から轉向して、救を受くる迄には至らなかつた様である。ユダは耶蘇を賣りし後、彼が死に定められたのを見て、甚く悔い且悲しんだ。然しながら彼はその罪から救はれようとはしないで、ゆいて自ら縊れ死んだ。(マタ二七・三一五) そのことに就いて、ウイリアム・ブース大將はいはれた。「ユダが自ら縊れる代に、跪いて耶蘇の恵を求めたならば、彼と雖も恐らくは尙、救はるべき望があつたであらうに」と。それ故罪を悔ゆると共に、大切なるは之を改むることである。又信仰を以て罪の赦を神に求め、新に生れた人となることではなくてはならぬ。(二六一・一九)

◎さすがのサウルも、こゝに至つて、神の攝理に逆ふことの愚なるを悟つたものゝ如く、我を折つて、他日ダビデが志を得て王位に登らん時、サウルの子孫を顧みんこと

を依頼する様になつた。元來弱小なる私共人間が、偉大なる神の攝理に反抗するのは、心得違の最も甚しいものである。傳ふる所によれば、シーザーが群臣を招いて大なる饗宴をもうけた時、合憎雨が降り出したのを見て、シーザーは「天もあまりに無情である。懲罰の爲に之を射よ」と命じ、家來共はいづれも天に向うて矢を放つたが、やがてその矢が落ち來つて、多くの死傷者を出したといふことである。これは神の御支配に逆うて、自ら禍をその身に招く者の譬とも見るべく、記憶しおくべきことである。(二〇—二二)

## 二七 富める愚人

### (サムエル前書第二十五章)

一爰にサムエル死にしかば、イスラエル人皆あつまりて之をかなしみ、ラマにあるその家にてこれを葬むれり。ダビデたちてバランの野にくだる。ニマオ

シに一箇の人あり。其所有はカルメルにあり。其人甚だ大なる者にして、三千の羊と一千の山羊をもちしが、カルメルにて羊の毛を剪り居たり。ニ其人の

名はナバルといひ、其妻の名はアビガルといふ。アビガルは賢く顔美き婦なり。されど其夫は剛愎にして其爲すところ悪しかりき。彼はカレブの人なり。四ダビデ野にありてナバルが其羊の毛を剪りたるを聞き、五ダビデ十人の少者を遣はす。ダビデ其少者にいひけるは、カルメルにのほりナバルにいたり、わが名をもてかれに安否をとひ、六かくの如くいへ、願くは壽ながかれ、爾平安なれ、爾の家やすらかなれ、爾が有つところの物みなやすらかなれ。七我爾が羊毛を剪らせたるを開けり。爾の牧羊者は我らとともにありしが、我らこれを害せざりき。またかれらがカルメルにありしあひだ、かれらの物何も失せたることなし。八爾の少者に問へ、かれら爾につげん。願くは少者をして爾のまへに恩をえせしめよ。我ら吉日に來る。請ふ爾の手にあるところの物を、爾の僕らおよび爾の子ダビデにあたへよ。九ダビデの少者いたり、ダビデの名をもつて是らのことばの

如くナバルに語りてやめり。一〇ナバル、ダビデの僕にこたへていひけるは、ダビデは誰なる、エサイの子は誰なる、此頃は主人をすて遁逃る僕おほし。二我あにわがパンと水およびわが羊毛をきる者のために殺したる肉をとりて、何處よりか知れざるところの人々にあたふべけんや。三ダビデの少者ふりかへりて其道に就き歸りきたりて此等の言のごとくダビデに告ぐ。四是においてダビデ其從者に、爾らおのゝ劍を帯びよと言ひければ、各劍をおぶ。ダビデもまた劍をおぶ。而して四百人ばかりダビデにしたがひて上り、二百人は輜重のところにとりし。一時にひとりの少者ナバルの妻アビガルにつげていひけるは、視よ、ダビデ野より使者をおくりて我らの主人を祝したるに、主人かれらを置れり。一五されどかの人々はわれらに甚だ善くなし、我らは害をかゝむらず。また我ら野にありし時かれらとともに在るあひだは、なにをも失はざりき。

一六我らが羊をかひて彼らとともにありしあひだ、彼らは日夜われらの墟となれり。一七されば爾今しりてなにをなさんかを考ふべし。其はわれらの主人および主人の全家に定めて害きたるべければなり。主人は邪斃なる者にして語ることなえずと。一八アビガルいそぎパン二百、酒の革囊二、既に調へたる羊五、烘麥五セア、乾葡萄百珠、乾無花果の團塊二百を取りて驢馬にのせ、一九其少者にいひけるは、わが先に進め。視よ、我爾らの後にゆくと。然れど其夫ナバルには告げざりき。二〇アビガル驢馬にのりて山の僻處にくだれる時、視よ、ダビデと其従者かれにむかひてくだりければ、彼其人々にあふ。二一ダビデかつていひけるは、誠にわれ徒に此人の野にて有てる物をみな守りて、その物をして何もうせざらしめたり。かれは悪をもてわが善にむくゆ。二二れがはくは神ダビデの敵にかくなし、また重ねてかくなしたまへ。明晨までに我はナバルに屬する總て

の物の中、ひとりの男をものこさざるべし。二三アビガル、ダビデを視しとき、急ぎ驢馬よりおり、ダビデのまへに地に俯して拜し、二四其足もとにふしいひけるは、わが主よ、此谷を我に歸したまへ。但し婢をして爾の耳にいふことを得さしめ、婢のことばを聴き給へ。二五れがはくはわが主この邪なる人ナバル(愚)の事を意に介むなかれ。其はかれは其名のごとくなればなり。かれの名はナバルにして、かれは愚なり。われなんちの婢はわが主のつかはせし少ものを見ざりき。二六さればわが主よ、エホバはいく、またなんちのたましひはいく、エホバなんちのきたりて血をながし、また爾がみづから仇をむくゆるを阻めたまへり。れがはくは爾の敵たるもの、およびわが主に害をくはへんとする者はナバルのごとくなれ。二七さて使女がわが主にもちきたりしこの禮物を、れがはくはわが主の足跡にあゆむ少年にたてまつらしめたまへ。二八請ふ婢の過をゆ

るしたまへ。エホバ必ずわが主のために堅き家を建て給はん。是はわが主エホバの軍に戦ふなり。又世にいててよりこのかた、爾の身に悪しきこと見えざるにふりてなり。二九人たちて爾を追ひ、爾の生命を求むれども、我主の生命は爾の神エホバとともに生命の包囊の中に包みあり。爾の敵の生命は投石器のうちより投げすつることく、エホバこれをなげすてたまはん。三〇エホバその爾につきて語りたまひし諸の善き事を、わが主になして爾をイスラエルの主宰に命じたまはん時にいたりて、三二爾の故なくして血をながしたることも、又わが主のみづから其仇をむくいし事も、爾の憂となることなく、またわが主の心の責となることなかるべし。但しエホバのわが主に善くなしたまふ時にいたらば、れがはくは婢を憶ひたまへ。三三ダビデ、アビガルにいふ、今日汝をつかはして我をむかへしめたまふイスラエルの神エホバは頌美べきかな。三三また汝の智慧は

ほむべきかな。又汝はほむべきかな。汝今日わがきたりて血をながし、自ら仇をむくゆるを止めたり。三四わが汝を害するを阻めたまひしイスラエルの神エホバは生く。誠にもし汝いそぎて我を來り迎へずば、必ず翌朝までにナバルの所にひとりの男ものこらざりしならんと。三五ダビデ、アビガルの携へきたりし物を其手より受けてかれにいひけるは、安かに汝の家にかへりのぼれ。視よ、われ汝の言をき、いれて汝の顔を立てたり。三六かくてアビガル、ナバルに至りて視るに、かれは家に酒宴を設け居たり。わの酒宴の如し。ナバルの心これがために樂しみて甚だしく酔ひたれば、アビガル多少をいはず、何をも翌朝までかれにつげざりき。三七朝にいたりナバルの酒のさめたる時、妻かれに是等の事をつげたるに、彼の心その中に死にて、其身石の如くなりぬ。三八十日ばかりありてエホバ、ナバルを撃ち給ひければ、死れり。三九ダビデ、ナバルの死にたるを聞

きていひけるは、エホバは頌美べきかな、エホバ我  
 蒙むりたる恥辱の訟を理してナバルにむくい、僕  
 を阻めて悪をおこなはざらしめたまふ。其はエホ  
 バ、ナバルの悪を其首に歸し賜へばなりと。爰にダ  
 ビデ、アビガルを妻にめとらんとて人を遣はしてこ  
 れとかたはしむ。四〇ダビデの僕カルメルに在る  
 アビガルの許にいたりて、これにかたりいひけるは、  
 ダビデ汝を妻にめとらんとて我らを汝に遣はすと。

四二アビガルたちて地にふして拜しいひけるは、視  
 ふ、婢はわが主の僕等の足をあらふ仕女なりと。四三  
 アビガルいそぎたちて驢馬に乗り、五人の侍女と  
 もにダビデの使者にしたがひゆきてダビデの妻とな  
 る。四四ダビデまたエズレルのアヒノアムを娶れり。  
 かれら二人ダビデの妻となる。四四但しサウルはダ  
 ビデの妻なりし其女ミカルを、ガリムの人なるライ  
 シの子バルテにあたへたり。

◎こゝにサムエルの死んだことが、極めて簡単に記してある。彼はその信仰篤き母の  
 子として生れ、幼い時から神への奉仕に身を献げた。彼は祈の人、清廉潔白の士、聰  
 慧なる預言者、公平なる士師、又敬虔なる教育家として、多年高貴なる聖徒の生活  
 を営んだ。尤もその晩年に至り、王を立つることについて、多数の人民と意見を異に  
 し、(サム前八・六一九) やがて又、最初の王サウルと相容れざる所あり。ラマの閑地に退  
 きて預言者學校を創立し、育英の業を以て最後のたのしみとしたのである。(サム前一九・

二〇)それと同時に、彼は終生仲保者として、神の前に、その國民の爲に、絶えず執成  
 の祈をつゞけた。我は汝らのために祈ることをやめて、エホバに罪を犯すことは決  
 てせざるべし(サム前一二・二三)と。彼はそのいうた通を、終まで實行したのである。彼  
 が死んだ時、イスラエル人は皆集り來つて、甚く之を悲しんだといふのは、さもある  
 べきことであつた。(一)

◎ナバルは甚だ富める人であつたが、剛愎にして、其の爲すところが悪しかつた。彼  
 はその先祖カレブの財産を受け嗣いだけれども、その人格と精神とを傳へなかつた。  
 ダビデが部下の者と共に、その地方の治安を維持し、彼に屬する者の生命財産を保護  
 した等の故を以て、彼から物質上の援助を請ひ求めると、ナバルは更にダビデのさう  
 した貢献を認めやうとせず、反つて口きたなく之を罵り、斷然その需を拒絶した。ス  
 ポルジョンは久しい以前に、曾ていうた。〇「ロンドンから救世軍を除いたならば、新に  
 五千人の警察官を増しても、今日程にその市の安寧秩序を保ち得ないであらう」と。  
 救世軍が既に斯くロンドンのみならず、世界の各方面に互つて、その人民の福祉に寄



與する所があつて居るなら、したがつて又、一般社會から、その理解ある賛助を求むるに別段の不思議はない。しかも世には往々、古のナバルと同じやうに、己が私慾をみたす爲には千金を惜まないけれども、社會公益の爲には一文半錢を費すことを厭ふ人々も少からず。その軍人は克己週間に、又は感謝祭その他の場合に、往々冷淡な待遇を受け、或は聞き苦しい言をあげせかけらるゝ如きこともある。人情は東西古今を通じて、頗る相似たものと思ひ、忍耐する他はないのである。(二二二)

◎ダビデはナバルからの返事を聞いて憤慨した。幸に一人の若者がナバルの妻アビガルに告ぐるに、彼等が日頃の貢獻を以てし、己の人々はわれらに甚だ善くなし、我らは害をかうむらず。我らが羊をかひて彼らとともにありしあひだ、彼らは日夜われらの墻となれり」というて、注意した爲、アビガルは急ぎ多量の食料品を取揃へ、自ら携へ行きてダビデに面會し、之に詫言を申入るゝこととなつた。これはその昔、ヤコブが多年仲違をして居つた兄のエサウと面會するに當り、先づ夥しい禮物を彼に贈り、然る後彼に面會したのと似て、賢き取計であつた。世にはナバルの如く冷淡無

頓着にして、他人の善を認むるに難き人々も少くない。それと同時に、一方には又、彼の妻アビガルと一人の若者との如く、十分に之を認めて感謝する者もあること故、決して失望するには當らないのである。耶蘇も曾て此の世に彼を理解する者の少いことを語り「されども智慧は己が業によりて正しとせらる」(マター一・一九)と、仰せられたのは、心得おくべきことである。(一三二)

◎アビガルは善良にして、才智すぐれた婦人であつた。彼女はダビデを見るや、急ぎ驢馬よりあり、その前に地に俯して拜し、先づその夫の不都合な行爲を詫びる所からはじめ、その自ら禮物を携へ來つた次第を述べ、ダビデが今日までの生活と行動とに對する深甚の感謝の意を表して、何處までも行届いた挨拶をしたのである。中にも「エホバ必ず、わが主のために堅き家を立て給はん。是はわが主エホバの軍に戦ふに より、又世にいでてよりこのかた、爾の身に惡しきこと見えざるによりてなり。人たちて爾を追ひ、爾の生命を求むれども、我が主の生命は爾の神エホバとともに、生命の包裹の中に包みあり」といふ如き、ダビデの今日までの生活と、神の惠の絶えずそ

の上に在つたことを語つて、その要を盡したものと云ふことが出来よう。ソロモンの箴言に、「機にかなひて語る言は、銀の彫刻物に金の林檎を嵌めたるが如し。智慧をもて譴むる者の、之をさく者の耳におけることは、金の耳環と精金の飾の如し。」(箴二五・二、二二)とあるのは、此の際に於ける、アビガルの言の如きをいふのであらう。(二三三・三五)

◎そんなことゝは知らず、家にて酒宴をもうけ、しかも王の酒宴の如く、豪奢を極めた宴席で、楽しんで居つたナバルは、酔がさめて後、妻からそのありし事どもに就いて聞く所あり、「彼の心その中に死にて、其の身石の如くなりぬ。」十日ばかりありて、エホバ、ナバルを撃ち給ひければ死ねり」とある。彼は耶蘇の譬喩談にある、富める人と同じ様に、己が靈魂に向ひ、「靈魂よ、多年を過すに足る多くの善き物を貯へたれば、安んぜよ、飲食せよ、樂しめよ。」(ルカ二・一九)と、單に己が私の爲を考へて居つた。然るに神は彼に向ひ、「愚なる者よ、今宵なんぢの靈魂とらるべし。然らば汝の備へたる物は、誰がものとなるべしぞ。」(ルカ二・二〇)といひ給うたのである。此の如く己の

ために財を貯へ、神に對して富まぬ者は、みなこのナバルの輩である。いましめねばならないことである。(三六一・三八)

◎ダビデは後にナバルの寡婦アビガルと、エズレルのアヒノアムとの二人を、妻として娶つた。尤も曩にダビデに嫁したサウルの女ミカルは、引戻されて此の時すでに、ガリムの人バルテと婚してゐたのである。ダビデの如く信仰篤く、人格高き人も、その時代の風習にならひ、一夫多妻の家庭を營んだのは遺憾千萬のことである。如何にそれが彼にとりて、不幸なる生活の原因となつたかは、後に追々事實となつて現れるであらう。奥野昌綱の歌に、「人はなど、いもせのなかをへだつらむ、翼ならぶる、鳥もある世に」とあり。眞に幸福なる家庭は、たゞ一夫一婦の行はるゝ所にのみ、之を見出さるゝのである。(三九一・四四)

### 二八 仁者は敵なし

(サムエル前書第二十六章)

一シフ人ギベアにきたり、サウルの許にいたりていひけるは、ダビデは曠野のまへなるハキラの山にかくれるにあらざりと。ニサウル即ち起ちシフの野にダビデを尋ねんと、イスラエルの中より選みたる三千の人をしたがへてシフの野にくる。ニサウルは曠野のまへなるハキラの山において路のほとりに陣を取る。ダビデは曠野に居りてサウルの己をおふて曠野に来るをさとりければ、四ダビデ斥候を出してサウルの誠に來りしをしれり。五こゝにおいてダビデたちてサウルの陣をとれる所に至り、サウルおよび其軍の長ネルの子アブネルの寝れたるところを見たり。即ちサウルは車營の中に寝ぬ。民其まはり陣をはれり。六ダビデ答へて、ヘテ人アヒメレクおよびセルヤの子にしてヨアブの兄弟なるアビシヤイにいひけるは、誰か我とともにサウルの陣にくだらんかと。アビシヤイいふ、我汝とともに下らん。七ダビデとアビシヤイ、すなはち夜にいらりて民の

所にいたるに、視よサウルは車營のうちに寢臥し、其槍地にさして枕邊にあり。アブネルと民は其まはり寝たり。八アビシヤイ、ダビデにいひけるは、神今日爾の敵を爾の手にわたし給ふ。請ふいま我に槍をもてかれを一度地にさしとほさしめよ。再びするにおよばじ。九ダビデ、アビシヤイにいふ、彼をころすなかれ。誰かエホバの膏そそぎし者に敵して、其手をのべて罪なからんや。一〇ダビデまたいひけるは、エホバは生く、エホバかれを撃ち給はん。あるひはその死ぬる日來らん。あるひは戦に下りて死にうせん。二わがエホバのあぶらそそぎしものに敵して、手をのぶることはきはめて善からず。エホバ禁じ給ふ。されどいま請ふ、爾そのまくらもとの槍と水の瓶をとれ。しかして我らさりのゆかんと。一二ダビデ、サウルの枕邊より槍と水の瓶を取りてかれらさりのゆきしが、誰も見ず、誰もしらず、誰も目を醒さざりき。其はかれら皆眠り居たればなり。

即ちエホバかれらなふかく睡らしめたまふ。一三かくてダビデは彼旁にわたりて遙に山の頂にたてり。彼と此とのへだたり大なり。一四ダビデ民とネルの子アブネルによばはりいひけるは、アブネルよ、爾こたへざるか。アブネルこたへていふ、王をよぶ爾は誰なるや。一五ダビデ、アブネルにいひけるは、爾は勇士ならずや。イスラエルの中にて誰か爾に如くものあらん。しかるに爾なんぞ爾の主なる王を守らざるや。民のひとり爾の主なる王を殺さんとていりぬ。一六爾がなせる此事よからず。エホバは生く、なんぢらの罪死にあたり。爾らエホバの膏そそぎし爾らの主をまもらざればなり。今王の槍と王の枕邊にありし水の瓶はいづくにあるかを見よ。一七サウル、ダビデの聲をしりていひけるは、わが子ダビデよ、是は爾の聲なるか。ダビデいひけるは、王わが主よ、わが聲なり。一八ダビデまたいひけるは、わが主なによゑに斯くその僕をおふや。我なにをな

せしや、何の惡しき事わが手にあるや。一九王わが主よ、請ふいま僕の言を聞き給へ。若しエホバ汝を我に敵せしめたまふならば、わがはくはエホバの物をうけたまへ。されど若し人ならばわがはくは其人エホバのまへのるはれよ。其は彼等、爾ゆきて他の神につかへよといひて今日我を追ひ、エホバの産業に連なることをえざらしむるが故なり。三〇わがはくはわが血をしてエホバのまへをなれて地におちしむるなかれ。そは人の山にて鷓鴣をおふがごとく、イスラエルの王一の蚤をたづねにいでたればなり。二一サウルいひけるは、我罪を犯せり。わが子ダビデよ歸へれ。わが生命今日爾の目に寶と見なされたる故により、我かされて爾に害を加へざるべし。嗚呼われ愚なることをなして甚だしく過てり。二二ダビデこたへていひけるは、王よ槍を視よ、請ふ一人の少者をしてわたりてこれを取らしめよ。二三わがはくはエホバ、おのゝに其義と眞實とにした

がひて報いたまへ。其はエホバ今日爾をわが手にわ  
たし給ひしに、我エホバの受膏者に敵してわが手  
をのぶることをせざればなり。二四爾の生命を今日  
わがおもんぜし如く、れがはくはエホバわが生命を  
おもんじて、諸の艱難のうちより我をすくひいだ

したまへ。三五サウル、ダビデにいひけるは、わが  
子ダビデよ、爾はほむべきかな。爾大なる事を爲  
さん。亦かならず勝をえんと。しかしてダビデは其  
道にさり、サウルはおのれの所にかへり。

◎ダビデは多くの同情ある友を有つたであらうが、それと同時に、又若干の敵をも  
有した。ジフ人が再度までも彼の隠家を、サウルに密告したのを見れば、そのどうし  
た意趣遺恨によるかは別として、彼等がダビデに對し、敵意をさしはさんだ、けは、  
間違なき事實であつた。その如く如何に神に恵まれた聖徒と雖も、尙何人からか憎ま  
れ、妬まれ、責めらるゝことは、免れ難いものである。それ故耶蘇は、「我がために人  
なんぢらを罵り、また責め、詐りて各様の悪しきことを言ふときは、汝ら幸福なり。  
喜び喜び、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし預言者等をも、斯く責めた  
りき。」(マタ五・一二、一三)と仰せられた。迫害をうけ、又は壓迫を蒙ることは、凡ての預  
言者たちに、伴うて離れぬ運命であつたからである。(一)

◎諺に「一度あることは二度ある」とあり。サウルは洞穴の中にて、ダビデの手に  
陥つた際、あぶない生命を助けられて、悔恨に堪へず、聲を放つて泣きつゝ、ダビデに  
向ひ、「汝は我よりも正し。我は汝に惡をむくゆるに、汝は我に善をむくゆ。」(サム前二四・  
一七)というた。それ程であるから、最早ダビデに對する殺意を擲つたかと思へば、さ  
うではなくて、間もなく今一度、前同様の経験を繰返さうとして居るのである。此の  
如く罪人は幾度となく、同じ罪惡を繰返し勝つものである。蜀山人が酒の害を悟り、  
之を禁じた時の歌に、「くろかねの、門より堅き我が禁酒、ならば手柄に、やぶれ朝比奈」  
と詠んだが、間もなく禁酒の誓は破れて、今一度、ぐでんぐでんに酔うた時の歌に、  
「我が禁酒、やぶれ衣となりにけり、やれついでくれ、それさしてくれ」とあつた。  
たゞ基督に救はれ、心を潔められた者のみ、よくその罪を繰返さざるを得るのである。  
即ち罪の遺傳、又惡の環境をも征服して、あらゆる罪惡の勢力に打勝つことを得る  
のである。有難いことではないか。(二一四)

◎サウルが車營の中に宿つてゐる所へ、ダビデはアビシャイ一人を連れて忍び込み、

アビシヤイが只一突に槍にてサウルを刺殺さんと請ふのを、彼はおしなだめ、たゞその枕邊にあつた槍と水の瓶とを取りて歸り來つた。彼はサウルを殺さんよりも、寧ろその良心の眼を醒し、彼を眞の悔改に至らしめんことを願うたのである。今日刑務所にて犯罪者を取扱ふのが又同じ主義で、犯罪人を殺してしまふのではなく、之を生かしおきて、改過遷善に至らしめんと努力するのが、最も進んだ行刑の仕方である。その爲、すでに死刑を全廢した國々も少くないのである。人の生命は全世界よりも貴きものだからである。(五一一二)

◎斯て後ダビデは、サウル麾下の將軍アブネルに呼びかけ、「爾なんぞ爾の主なる王をまもらざるや。今王の槍と王の枕邊にありし水の瓶は、いづくにあるかを見よ」というた。アブネルをはじめとして、三千の兵は皆熟睡し居り、何事の起りしかを知る者が、絶えてなかつたからである。エホバが彼等を深く眠らせ給うたからであつた。然しなからそれとは反對に、私共の神は、夜の間も睡ることなく、絶えず私共を保護し給ふ方である。すなはち詩篇の作者が、「エホバは、なんぢの足のうごかざるゝを容

したまはず。汝を護るものは微睡み給ふことなし。視よ、イスラエルを守りたまふものは微睡むこともなく、寝ることもなからん。(詩一二・三、四)というたのは、そのことを意味する。かうした神の行届いた御保護のあることを、感謝せねばならぬ。(一三一・一六)

◎サウルは再度まで、ダビデの手に陥りながら、危害を加へられなかつたのを見て、今更のやうに、恐縮し切つたものと見える。「我罪を犯せり。わが子ダビデよ歸れ。わが生命、今日爾の目に寶と見なされたる故により、我かさねて爾に害を加へざるべし、嗚呼われ愚なることをなして、甚だしく過てり」と。彼はその胸をうつて悔恨の情に堪へなかつた。古語に「仁者は敵なし」といふことがある。サウルの槍も、アブネルの劍も、又その三千の兵士も、ダビデの眞實と慈仁とに敵對することが、出来なかつたのである。彼は實に「善をもて惡に勝ち」(ローマ二・二一)得たものと、いはねばならぬ。(一七一・二一)

◎サウルは重ねてダビデに向うていうた。「わが子ダビデよ、爾はほむべきかな。爾大なる事を爲さん。亦かならず勝をえん」と。ダビデは前にサムエルから膏注がれて、

他日イスラエルの王となるべきことを、約束せられたに拘らず、あせらず、慌てず、時の來るを待ち、そのサウルに對する如き、どこまでも忍耐と寛容との限を盡して、之をあしらうたのである。斯して彼は、自ら進んで天下を取らうとはせず、寧ろ天下がその目前に落ち來るのを待ち、之を拾はんとしたのである。織田信長は「鳴かぬなら殺してしまへ、時鳥。」豊臣秀吉は「鳴かぬなら鳴かしてみよう、時鳥。」徳川家康は「鳴かぬなら鳴くまで待たう、時鳥」といふ、三人三様の態度で、天下取りを心掛けたとはいはれて居る。若しさうだとすれば、ダビデは少くとも、この一點に於てのみは、徳川家康のそれと、似たやうな態度をとつたものと、言へよう。彼は急がず、はやまらず、何處までも耐忍んで、神を待望むことを知る人物であつた。(二二二―二五)

二九 失意の一年四ヶ月

(サムエル前書第二十七章)

一ダビデ心の中にいひけるは、是のごとくば我早晚

サウルの手にほるびん。速にヘリシテ人の地にの

がるゝにまさることあらず。然らばサウルかされて我をイスラエルの四方の境にたづぬることをやめて、我かれの手をのがれんと。ニダビデたちておのれともなる六百人のものとともに、わたりてガテの王マオクの子アキシにいたる。ミダビデと其從者ガテにてアキシとともに住みて各其家族とともに在る。ダビデはその二人の妻、すなはちエズレル人アヒノアムと、カルメル人ナバルの妻なりしアピガルとともにあり。四ダビデのガテにげしことサウルにきこえければ、サウルかされて彼をたづねざりき。五こゝにダビデ、アキシにいひけるは、我もし爾のまへに恩を得たるならば、ねがはくは郷里にある邑のうちにて一のところを我にあたへて、其處にすむことを得さしめよ。僕なんぞ爾とともに王城にすむべけんやと。六アキシ其日チクラガをかれにあたへたり。是故にチクラガは今日にいたるまでユダの王に屬す。セダビデのヘリシテ人の國に在りし日

數は一年と四箇月なりき。八ダビデ其從者と共にのぼり、ゲシユル人、ゲゼリ人、アマレク人を襲ふたり。昔よりは等はシユルにいたる地にすみて、エジプトの地にまで及べり。九ダビデ其地をうちて男をも女をも生かし存さず、羊と牛と駱駝と衣服をとりて、還りてアキシに至る。一〇アキシいひけるは、爾ら今日何地を襲ひしや。ダビデいひけるは、ユダの南とエラメルの南とケニ人の南をかせりと。二ダビデ男も女も生存らしめずして一人をもガテにひきゆかさざりき。其はダビデ恐くはかれらダビデかくなせりといひて、我等の事を告げんといひたればなり。ダビデ、ヘリシテ人の地にすめるあひだは、其なすところ常にかくのごとなりき。一二アキシ、ダビデを信じていひけるは、彼は其民イスラエルをして全くおのれを悪ましむ。されば永くわが僕となるべし。

◎人は往々緊張した後に、その反動としての弛緩を感じるものである。預言者エリヤがカルメル山上、バアルの預言者四百五十人を向にまはし、唯一人、エホバの預言者として起ち上つたのは、如何にも勇壯の極であつた。然しながら數日の後には、曠野にて金雀花の下に坐し、その身の死なんことを求むるに至つた如きは、その著しき實例である。(列上二九・四)ダビデは勇敢に、又寛宏にサウルを取扱ひ、彼を亡き者とする機會はあつたけれども、之を赦して歸らしめた後、今更の様に、その身の成行を案じはじめた。是のごとくば、我早晚サウルの手にほろびん。速にペリシテ人の地にのがるゝにまざることをあらず」というて、彼は今一度ガテの王アキシの許に身を寄することとなつた。斯して信仰の人も、しばし懷疑に陥ることあり、神に屬ける勇士も忽ち恐怖の念に襲はるゝことがある故、私共は決して油斷することが出来ない。使徒パウロが「自ら立てりと思ふ者は倒れぬやうに心せよ。」(コリ前一〇・一二)というたのは、極めて適切なる教訓である。(一)

◎こゝにガテの王アキシとあるのは、この前にダビデが頼つたアキシとは、別人であつたらうとのことである。前にはダビデがアキシに頼つた時、身の危険を感じて、詐つて狂人の状をなし、門の扉に畫き、鬚を涎沫にて汚しなどして、(サム前二一・一三)漸く免れた。それが今一遍、同じガテの王を頼つて行いたといふのは、あまり氣乗のする處置ではなかつたに相違ない。いふまでもなく、さうした境遇にあつては、無遠慮に、日頃の信仰主張をふりかざし得よう筈もなく、むしろ日蔭者の姿で、氣がねをしなから生活する他はなかつたであらう。一體神の僕が、その主義信仰をつゝみかくし、世俗の庇護に身を託する位、心苦しいことはないものである。耶蘇の御言に、「凡そ人の前にて我を言ひあらはす者を、我もまた天にいます我が父の前にて言ひ顯さん。されど人の前にて我を否む者を、我も亦天に在す我が父の前にて否まん。」(マタ一〇・三二、三三)とあり。私共はその旗色を鮮明にし、神の軍人としての生活を營みたきものである。(二)

◎何故前にはあれほど、大膽勇猛であつたダビデとその部下とが、急に意氣地なく隣國の王に頼るやうな事になつたかといふに、一つの理由は、その家族を安んずる爲

であつたらしい。このあひだまでは、ダビデも、その従者も、大概獨身者で、洞穴にでも、岩屋にでも、起臥することが出来たが、そのうち段々妻を娶り、子をなす者も出来て見れば、いつまで、さうした生活をつゞけることもなり難く、安住の所を求めて、その結果、アキシの許に迄も、出かけることゝなつたのであらう。此の如く世には妻子の愛にほだされ、又、その生活の安定を求むるが爲に、心ならずも信仰をかくし、主義を曖昧にして、世を過すやうな人々が多くある。初代基督教會がひどい迫害をうけて居る時代に、パウロが「婚姻せぬ者は如何にして主を喜ばせんと、主のことを慮ばかり、婚姻せし者は如何にして妻を喜ばせんと、世のことを慮ばかりて心を分つなり。」(コリ前七・三二、三三)というたのは、その爲である。耶蘇も亦曾てその弟子を戒め、「我よりも父または母を愛する者は、我に相應しからず。我よりも息子または娘を愛する者は、我に相應しからず。」(マタ一〇・三七)と仰せられた。私共はその人情にほだされ、義理にからまれて、神の御旨に違反することがあつてはならない。(三、四)

◎ダビデはその初、ガテにてアキシの許に寄食して居つたが、どうも心置きでなからな

い故、アキシに請うて、そのユダに近い國境のチクラグを興へられ、其處に居住することゝなつた。彼がアキシと共に居つた間は、體のよい食客であつた。日本の昔にも「ゐさふるふ、三杯目にはそつと出し」などというて、食客は意氣地のないものである。他人に寄食するのは頭の上らぬものである。ダビデがアキシの許を離れ、同じく彼の支配に屬するとはいへ、別れてチクラグに住むことゝなつたのは、さもあるべきことゝ思はるゝ。パウロはそのテサロニケに贈つた書翰の中に、「價なしに人のパンを食せず。」(テサ後三・八)といひ、更に又「靜に業をなして、己のパンを食せんことを、我らの主耶蘇基督に由りて命じ、かつ勸む。」(テサ後三・一二)というて居る。それ故私共は、つとめ働いて己のパンを食したきものである。寄食者の如き生活を營みたくないものである。(五、六)

◎「ダビデのペリシテ人の國にをりし日數は、一年と四箇月なりき」とある。この一年と四箇月は、ダビデにとつて、日蔭者の如き時期であつた。即ち極めて失意の境遇に身を置いたる時節であつた。したがつてその間、彼は一度も「エポデを我にもちきたれ」



というたこともなく、又眞劍に神の御旨を尋ねたやうなあとも見えない。その意味からいへば、これは彼の生涯中、最も神との交際が乏しく、又祈の缺けた一年と四ヶ月であつたと、見られないでもない。「汝らの得ざるは求めざるに因りてなり。汝ら求めてなほ受けざるは、慾のために費さんとて、妄に求むるが故なり。」(ヤコ四・二、三)私共は信仰の祈をこめて、神の助と力とを仰ぎ、その身をおく境遇と事情は如何に不利なることがあつても、胸の中はいつも光明赫灼たる、義の太陽に照らされ居るやうでありたい。(七)

◎この時代のダビデは、所謂二重生活を營んで居つた。彼はアキシと懇意の間柄なるゲシユル人、ゲゼリ人、又はアマレク人を襲うて、その家畜衣服等を分捕つて居つたに拘らず、「何處へ行つた」と問はるれば、何時でも「ユダ、エラメル、又ケニ人の南部ををかしたのである」などといひくるめ、アキシをして、彼がその民イスラエルを敵として戦うて居るものとのみ、信ぜしめたのは、狡猾もまた甚しいといはねばならない。昔話の蝙蝠が鳥と獸との間にあり、或時は羽を廣げて鳥の仲間と思はせ、或

時は羽をすぼめて獸の仲間と思はせ、巧に雙方からその味方と思はれたといふ如く、この時代のダビデは、ペリシテ人とイスラエル人との中間に立ち、兩方から善く思はれようとして、所謂首鼠兩端、どつちつかずの態度に出で居つたのである。然しながら神の御旨は至つて明白である。即ち「罪人よ、手を淨めよ。二心の者よ、心を潔よくせよ。」(ヤコ四・八)とある如く、神はその僕が至き心をつくして、之に事ふることを求め給ふ。神は熱くもあらず、冷かにもあらず、たゞ微温きものを、唾棄し給ふ他はないのである。(八一―一二)

### 三〇 口寄の女

#### (サムエル前書第二十八章)

一其頃ペリシテ人、イスラエルと戦はんとて軍のために軍勢を集めれば、アキシ、ダビデにいひけるは、爾明かにこれをしれ。爾と爾の従者我とともに出て軍に加はるべし。ニダビデ、アキシにいひけるは、されば爾僕のなさんところをしるべしと。

アキシ、ダビデに、さらば我爾を永くわが身をまもる者となさんといへり。ニサムエルすでに死にたれば、イスラエルみな之をかなしみてこれをそのまちらまにはうむれり。またサウルは口寄者と卜筮師を其地よりおひいだせり。四ペリシテ人あつまりきた

りてシユネムに陣をとりければ、サウル、イスラエルを悉くあつめてギルボアに陣をとれり。五サウル、ペリシテ人の軍を見しとき、おそれてその心大にふるへたり。六サウル、エホバに問ひけるに、エホバ對へ給はず。夢によりても、ウリムによりても、預言者によりても、こたへたまはず。七サウル僕等にいひけるは、口寄の婦を求めよ。われそのところゆきてこれに尋ねんと。僕等かれにいひけるは、視よ、エンドルに口寄の婦あり。八サウル形を變へて、他の衣服を着、二人の人をとまひてゆき、彼等夜の中に其婦の所にいたる。サウルいひけるは、請ふわがために口寄の術をおこなひて、わが爾に言ふ人をわれに呼びおこせ。九婦かれにいひけるは、爾サウルのなしたる事、すなはち如何に彼が口寄者と卜筮師を國より斷ちさりたるを知る。爾なんぞ我を死なしめんとてわが生命を亡す謀計をなすや。一〇サウル、エホバを指してかれに誓ひいひけ

るは、エホバは生く、此事のためになんぢ罪にあふことあらじ。一一婦いひけるは、誰を我なんぢに呼び起すべきか。サウルいふ、サムエルを呼び起せ。一二婦サムエルを見て大なる聲にてさけびいだせり。しかして婦サウルにいひけるは、爾なにゆゑに我を欺きしや。爾はすなはちサウルなり。一三玉かれにいひけるは、恐るゝなかれ、爾なにを見しや。婦サウルにいひけるは、我神の地よりのぼるを見たり。一四サウルかれにいひけるは、其形容は如何。彼いひけるは、一人の老翁のぼる。其人明衣を衣たり。サウル其人のサムエルなるをしりて、地にふして拜せり。一五サムエル、サウルにいひけるは、爾なんぞ我をよびおこして我をわづらはすや。サウルこたへけるは、我いたく悩む。ペリシテ人我にむかひて軍をおこし、又神我をなれて預言者によりても、又夢によりても、ふたゝび我にこたへ給はず。このゆゑに我なすべき事を爾にまなばんとて爾を呼べ

り。一六サムエルいひけるは、エホバ爾をばなれて爾の敵となりたまふに、爾なんぞ我にとふや。一七エホバわれをもて語りたまひしことをみづから行ひて、エホバ國を口の手より割きはなち、爾の隣人ダビデにあたへたまふ。一八爾エホバの言にしたがはず、其烈しき怒をアマレクにもらさざりしによりて、エホバ此事を今日爾になしたまふ。一九エホバ、イスラエルをも爾とともにペリシテ人の手にわたし給ふべし。明日爾と爾の子等我ともなるべし。またイスラエルの陣營をもエホバ、ペリシテ人の手にわたしたまはんと。二〇サウル直ちに地に伸びたふれ、サムエルの言のために痛くおそれ、又其力を失へり。其はかれ其一日一夜物食ざりければなり。二一かの

婦サウルにいたり其痛く慄くを見てこれにいひけるは、視よ、仕女爾の言をきき、わが生命をかけて爾が我にいひし言にしたがへり。二二されば、請ふ、爾も仕女の言を聽きて我をして一口のパンを爾のまへに供へしめよ。而して爾くらひて途に就く時に力を得よ。二三されどサウル否みて我は食はじといひしを、其僕および婦強ひければ、其言をきいて地よりたちあがり、床の上に坐せり。二四婦の家に肥えたる犢ありしかば、急ぎて之を殺し、また粉をとり、擗れて酔いれぬパンを炊き、二五サウルのまへと其僕等のまへに持ち來りければ、彼等くらひて立ちあがり、其夜のうちにされり。

◎ダビデは、ガテの王アキシに身を寄せて居つた爲、ペリシテ人がイスラエルと戦ふに際し、心ならずも從軍して、あぶなくイスラエル人と戦ふべき破目に陥らんとした。それにつけても、人はその主として仰ぐところが、何者であるかを、十二分に吟味し

て居るべき必要がある。そのことについてパウロの言に、「なんぢら知らぬか、己を獻げ、僕となりて、誰に従ふとも其の僕たることを。或は罪の僕となりて死に至り、或は從順の僕となりて義にいたる。然れど神に感謝す。汝等はもと罪の僕なりしが、傳へられし教の範に心より従ひ、罪より解放されて義の僕となりたり。」(ロマ六・一六―一八)とあり。私共は罪の僕たる身を解放せられ、義の僕となつて居りたきものである。

(二、二)

◎サウルは敵の大軍が攻寄するのを見て、驚き惑ひ、爲さん所を知らず、之をエホバに問ひたれど、エホバは答へ給はなかつた、といふことである。諺に、「困つた時の神のみ」といふ如く、サウルは平生神を無視し、之に逆うてゐながら、まさかの時にのみ、急にその導と助とを求めて、それを得なかつたのである。耶穌に眼を開かれた盲人はいうた。「神は罪人に聽き給はねど、敬虔にして御意をおこなふ人に聽き給ふことを、我らは知る」(ヨハ九・三一)と。罪人は先づ罪から救はれんことを祈りて後に、他の數々の願を神の御前にもち來るべきものである。罪をそのままになしおきて、他に身

勝手な願をなす如きは、聖なる神を侮辱するものである。さうした祈の聽かれよう筈はないものと、思はねばならぬ。(三一六)

◎サウルは前に口寄者と卜筮師とを放逐した。モーセの律法に、「法印を結ぶ者、憑鬼する者、巫覡の業をなす者、死人に詢ふことをする者あるべからず。」(申一八・一二)とあり。サウルはこの擧はそれを實行したのであつた。然るに斯して一度、口寄者と卜筮師とを處分した彼が、今は自ら口寄の婦を頼るに至つたのは、どういふわけかと尋ねるに、それは彼が眞の神を見失うたからであつた。「エホバにかへて、他神をとるもの悲哀はいやまさん。」(詩一六・四)と、詩篇の作者はいうて居る。耶穌の御言に又「神は靈なれば、拜する者も靈と眞とをもて拜すべきなり。」(ヨハ四・二四)とあり。かくありてのみ眞の神に對して、眞の禮拜をなすものといふことが出来る。(七一〇)

◎口寄の婦はサウルに向ひ、「誰を我なんぢに呼び起すべきか」と尋ねると、サウルは答へて、「サムエルを」といふた。サウルはサムエルの生前、彼のいふ所に反いて、種々心配をかけたものである。それが彼の死後、かうした窮地に陥つた際、今一度サムエ

ルに會うて、その忠告と指導とを求めたくなつたものと見える。此の如く世には、その師匠なり、親なりの生前には、その教に反いておきながら、徒等の死後には、今更のやうに悲嘆の涙にくれる者が、決して少くない。乃ち「孝行をしたい時分に親はなし。」又「齒がぬけてからかみしめる親の恩。」などいふ句があるのも、畢竟そのことを意味する。(二二二―二四)

◎サムエルの靈がサウルに現れたのは、後にモーセとエリヤとが變貌山に現れて、耶蘇と物語つたといふのと、いくらか似た所があるようである。(マター一七・三)サムエルはサウルに向ひ、「エホバ爾をはなれて爾の敵となりたまふに、爾なんぞ我にとふや。爾エホバの言にしたがはず、其の烈しき怒をアマレクにもらさざりしによりて、エホバ此の事を今日爾になしたまふ。エホバ、イスラエルをも爾とともに、ペリシテ人の手にわたし給ふべし。明日爾と爾の子等、我とともになるべし。またイスラエルの陣營をも、エホバ、ペリシテ人の手にわたしたまはん」というた。すなはちサウルは、神に不従順であつた爲に棄てられたのである。「エホバの事を行うて、怠る者は誼はれ云

云(エレ四八・一〇)とある。その怠慢の罪の爲に、サウルは神から罰せられて、ペリシテ人との戦争に、みじめな敗軍に至るのみか、彼も其の子等も、共に陣中に生命を落さんと居るのである。それにつけても私共は、神に不従順なる罪の如何に恐しいものかを、知らねばならぬ。(一五一―一九)

◎「厲が王を憫む」といふことがある。口寄の婦は、王が一日一夜斷食をした上に、一方ならぬ精神上の苦悶を以てし、如何にも頼りない状にあるのを見て、氣の毒に思ひ、彼の爲に食卓を用意し、強ひて之に食事をなさしめた。ヨセホスは彼女のことを、「同情の鑑」として紹介して居る。然しながら此の際サウルが要する所のものは、肉體上の食物よりも、寧ろ精神上の慰安であつた。けれどもそれは、口寄の婦が供給し得ない所のものであつた。人のたすけは空しければなり。(詩六〇・一一)又「汝ら鼻より息のいでいりする人に倚ることをやめよ。斯るものは何ぞかぞふるに足らん。(イザ二・二三)などとあり。人は眞の神と和ぎ、之をその力と頼むまでは、至つて頼りなきものと思はねばならぬ。(二〇―二五)

三一二人の主

(サムエル前書第二十九章)

一爰にペリシテ人その軍をことごとくアベクにあつむ。イスラエルはエズレルにある泉水の傍に陣をとる。ニペリシテ人の君等あるひは百人或は千人をひきゐて進み、ダビデと其従者はアキシとともに其後にすむ。ニペリシテ人の諸伯いひけるは、是等のヘアル人は何なるや。アキシ、ペリシテ人の諸伯にいひけるは、此はイスラエルの王サウルの僕ダビデにあらざや。かれ此日ごろ、此年ごろ、我とともにをりしが、その逃げおちし日より今日にいたるまで、我かれの身に咎あるを見ずと、四ペリシテ人の諸伯これを怒る。即ちペリシテ人の諸伯彼にいひけるは、此人をかへらしめて爾が之をおきし其所にふ

たゝびいたらしめよ。彼は我らとともに戦争に下るべからず。然らば彼戦争においてわれらの敵とならざるべし。かれ其主と和がんとせば、何をもてすべきや。この人々の首級をもてすべきにあらざや。五是はかつて人々が舞蹈の中にて歌ひあひ、サウルは千をうちころし、ダビデは萬をうちころすといひたるダビデにあらざや。六アキシ、ダビデをよびてこれにいひけるは、エホバは生く、まことに爾は正し、爾の我とともに陣營に出入するはわが目には善しと見ゆ。そは爾が我に來りし日より今日に至るまで、我爾の身に惡しき事あるを見ざればなり。然れど諸伯の目には爾よからず。七されば今かへりて安かこ

ゆき、ペリシテ人の諸伯の目に惡しく見ゆることをなす勿れ。八ダビデ、アキシにいひけるは、我何をなせしや、わが爾のまへに出し日より今日までに、爾何を僕の身に見たればか、我ゆきてわが主なる王の敵となし、かふことをえざると。九アキシこたへてダビデにいひけるは、我爾のわが目には神の使のごとく善きをしる。されどペリシテ人の諸伯、かれは

我らとともに戦ひにのぼるべからずといへり。一〇されば爾および爾の主の僕の爾とともに來れる者、明朝夙く起きよ。爾ら朝はやくおきて夜のおくるに及ばず去るべし。一一是をもてダビデと其従者ペリシテ人の地にかへらんと朝はやく起きてされり。十二してペリシテ人はエズレルにのぼれり。

◎伊豫の今治在に、犬塚池といふのがある。昔はその池をさしはさんで二つの寺があり。一匹の犬が、その二つの寺で養はれて居つた。即ち東の寺の鐘が鳴れば東に、西の寺の鐘なれば西にゆいて、食を得て居つたが、或日二つの寺の鐘が一度に鳴り出したので、犬は東の寺に行つたものか、西の寺に行つたものか、わからなくなり、しきりに池の邊をあちこちと走り狂うて居つたが、やがて氣が顛倒したものか、池に跳び込んで死んでしまつた。犬塚池といふ名前は、それから出たのだといふ傳説がある。その如く、人は二人の主の事に事ふることが出来ない。然るにダビデはイスラエル人を愛

して、之に事へんことを願ひながら、その敵國なるペリシテ人の中に身を寄せて、ガテの王アキシに頼つて居るものから、イスラエル人とペリシテ人と、二人の主人に事へねばならない破目にちちた。困つたことになつたものと言はねばならない。(一、二)

◎ペリシテ人の諸伯は、アキシが率ゐる軍勢の後に、ダビデとその一隊とがついてくるのを見て、「是等のヘブル人は何なるや」と訝り問うた。ペリシテ人はヘブル人を敵として戦はんとするに當り、反つてヘブル人を其の味方の中に見出すのを、心外千萬に覺えたのであつた。その如く、今日の私共基督者は又、神の特選の民である。基督は我等のために己を與へたまへり。是われらを諸般の不法より贖ひ出して、善き業に熱心なる特選の民を、己がために潔めんとてなり。(テト二・一四)とあるのは、それである。私共は既にかく潔められて、神の特選の民たるからには、したがつて又、邪惡なるこの世に味方して、その罪惡に與るべき筈がない。「誰にても世の友とならんと欲する者は、己を神の敵とするなり。(ヤコ四・四) 私共は世俗の後について、のろのろと進軍すべき性質のものでないのである。(三)

◎ペリシテ人の諸伯は、ダビデとその一隊とが、彼等と共に居るのを危険に覺え、それに対して抗議をした。すなはちアキシに向ひ、「此の人をかへらしめて、爾が之をおさし其の所に、ふたゝびいたらしめよ。彼は我等とともに戦に下るべからず。」といふたのである。それと同じやうに世俗は今も、眞面目な基督者を排斥する。即ち彼等をけむたがり、果は厭うて之を棄てるのである。耶穌はその最後に於ける執成の祈の中に、「我は御言を彼らに與へたり。而して世は彼らを憎めり。我の世のものならぬごとく、彼らも世のものならぬに因りてなり。(ヨハ一七・一四)と仰せられた。それ故私共は假令此の世から憎まれ、嘲けられ、遠ざけられるやうなことがあつても、それを不思議なことのやうに考へてはならぬ。「人なんぢらを憎み、人の子のために遠ざけ謗り、汝らの名を惡しとして棄てなば、汝ら幸福なり。(ルカ六・二三)といふ御教も、あるではないか。(四、五)

◎アキシは止むを得ず、ダビデをチクラグにかへり行かしめることゝなつた。これは彼にとつては不本意千萬のことであつたが、ペリシテ人の諸伯の手前、餘儀なく、か

うした處置に出でたものである。凡そ基督耶穌に在りて、敬虔をもて一生を過さんと欲する者は迫害を受くべし。(テモ後三・一二)又「患難に遭ふことの我らに定まりたるは、汝等みづから知る所なり。(テサ前三・三)などいふ言も、思ひ合さるゝのである。(六、七)

◎ダビデがアキシに向ひ、「我何をなせしや」と問ふと、答へて、「我爾の、わが目には神の使のごとく善きをしる云々」というた。これは彼の生活と行動とが、如何なる好印象を、日頃からアキシに與へて居つたかを、示すものである。その昔へテの子孫がアブラハムに向ひ、「我等の中にありて汝は神の如き君なり。(創二三・六)」というたことがある。眞の基督者は、その生活又奉仕によつて、絶えず神の榮光をあらはし、神をその周囲の人々に證して居るべき筈である。ダビデがアキシから、神の使の如き、善人と認められて居つたといふのは、喜ぶべきことである。(八、九)

◎ダビデは遂に、ペリシテ人の軍勢に暇を告げて、退陣することゝなつた。「不信者と軛を同じうすな、釣合はぬなり。義と不義と何の干與かあらん。光と暗と何の交際かあらん。基督とベリアルと何の調和かあらん。信者と不信者と何の關係かあらん。神の宮と偶像と何の一致かあらん。この故に『主いひ給ふ、汝等かれらの中より出で、之を離れ、穢れたる者に觸るなかれと。されば我なんぢらを受け、われ汝らの父となり、汝等わが息子、娘とならんと、全能の主いひ給ふ』とあるなり。(コリ後六・一四—一八)ダビデがイスラエルに忠義ならん爲には、どうしてもペリシテ人の群を離れ、その仲間はずれとならねばならない必要があつた。しかもそれが神の攝理により、具合よく履行せらるゝに至つたのは、忝いことゝいはねばならぬ。人のあゆみはエホバによりて定めらる。そのゆく途をエホバよろこびたまへり(詩三七・二三)とは、かうした場合に當嵌るべき言であつた。(一〇、一一)

### 三三一 其の神エホバによりて

#### (サムエル前書第三十章)

一ダビデと其従者第三日にチクラカにいたるに、アレク人すてに南の地とチクラカを侵したり。かれらチクラカを撃ち、火をもて之を燬き、ニ其中に居りし婦女を擄にし、老いたるをも若きをも一人も殺

さずして、之をひきて其途におもむけり。ミダビデ  
と其従者邑に至りて視るに、邑は火に燬け、その妻  
と男子女子は擄にせられたり。四ダビデおよびこれ  
とともにある民、聲をあげて哭き、終に哭く力もな  
きにいたれり。五ダビデのふたりの妻、すなはちエ  
ズレル人アヒノアムと、カルメル人ナバルの妻なり  
しアピガルも虜にせられたり。六時にダビデ大に心  
を苦めたり。其は民おの／＼其男子女子のために氣  
をいらだて、ダビデを石にて撃たんといひたればな  
り。されどダビデ其神エホバによりて、おのれをば  
げませり。セダビデ、アヒメレクの子祭司アピヤタ  
ルにいひけるは、請ふエホデを我にもちきたれと。  
アピヤタル、エホデをダビデにもち來る。ハダビデ、  
エホバに問ふていひけるは、我此軍の後を追ふべき  
や。我これに追ひつくことをえんかと。エホバ彼に  
こたへたまはく、追ふべし。爾かならず追ひつきて、  
たしかに取もどすことをえん。九ダビデおよび之と

をころさず、また我をわが主人の手にわたさざるを  
神をさして我に誓へ。我爾を此軍にみちびきくだら  
ん。一六かれダビデをみちびきくだりしが、視ふ、  
彼等はベリシテ人の地とユダの地より奪ひたる諸  
の大なる掠取物のために、よろこびて飲食し、踊り  
つゝ地にあまねく散りひろがりて居る。一七ダビデ  
暮あひより次日の晩にいたるまで彼らを撃ちしか  
ば、駱駝にのりて逃げたる四百人の少者の外は、一  
人ものがれたるもの无かりき。一八ダビデはすべて  
アマレク人の奪ひたる物を取りもどせり。其二人の  
妻もダビデとりもどせり。一九小きも、大なるも、男  
子も、女子も、掠取物も、すべてアマレク人の奪ひ  
さりし物は一も失はず、ダビデことごとく取かへせ  
り。二〇ダビデまた凡ての羊と牛をとれり。人々こ  
の家畜をその前に驅ひきたり、是はダビデの掠取物  
なりといへり。二一かくてダビデかの憊れてダビデ  
にしたがひ得ずしてベソル川のほとりに止まりし二

ともなる六百人の者、ゆきてベソル川にいたれり。  
後にのこれる者はこゝに止まる。一〇即ちダビデ四  
百人をひきゐて追ひゆきしが、憊れてベソル川をわ  
たることあたはざる者二百人はとゞまれり。二二衆  
人野にて一人のエジプト人を見、これをダビデにひ  
きたりてこれに食物をあたへれば食へり。また  
これに水をませたり。二三すなはち一段の乾無花  
果と二球の乾葡萄をこれにあへたり。彼くらひて其  
氣ふたゝび爽になれり。かれは三日三夜物をもく  
はず、水をものまさりしなり。二四ダビデかれにい  
ひけるは、爾は誰の人なる、爾はいつくの者なるや。  
かれいひけるは、我はエジプトの少者にて一人のア  
マレク人の僕なり。三日まへに我疾にかかりしゆゑ  
に、わが主人我をすてたり。二四我らケレテ人の南  
とユダの地とカレブの南をかし、また火をもてチ  
クラクをやけり。二五ダビデかれにいひけるは、爾  
我を此軍にみちびきくだるや。彼いひけるは、爾我

百人の者のとこるにいたるに、彼らダビデをいむ  
かへ、またダビデともなる民をいむかふ。ダビ  
デかの民にちかづきてその安否をたづぬ。二三ダビ  
デとともにゆきし人々の中の悪しく邪なる者、み  
なこたへていひけるは、彼等は我らとともにゆかさ  
りければ、我らこれに取りもどしたる掠取物をわけ  
あたふべからず。唯おの／＼にその妻子をあたへて  
これをみちびきさらしめん。二三ダビデ言ひけるは、  
わが兄弟よ、エホバ我らをまもり、我らにせめきた  
りし軍を我らの手にわたし給ひたれば、爾らエホバ  
のわれらにたまひし物をしかするは宜しからず。二四  
誰か爾らにかゝることをゆるさんや。戦にくだり  
し者の取る分のごとく、輻重のかたはらに止まりし  
者の取る分もまた然あるべし。共にひとしく取るべ  
し。二五この日よりちダビデこれをイスラエルの  
法となし、例となせり。其事今日にいたる。二六ダ  
ビデ、チクラクにいたりて其掠取物をユダの長老な



其朋友にわかちおくりて曰はしめけるは、是はエホバの敵よりとりて爾らにおくる餽物なり。二七ベテルに在るもの、南のラモテに在るもの、ヤツテルに在る者、二八アロエルに在る者、シフモテに在るもの、エシテモに在るもの、二九ラカルに在るもの、

エラメル人の邑に在るもの、ケニ人の邑に在るもの、三〇ホルマに在るもの、コラシヤンに在るもの、アタクに在るもの、三一ヘアロンに在るもの、およびすべてダビデが其従者とともに毎にゆきし所にこれをわかちおくれり。

◎ダビデはその手勢を引具して、チクラグに歸つて見ると、不在の間にアマレク人が攻め寄せて、チクラグの邑を火にて焚き、その中に居りし婦女たちを擄にし、老いたる者も、若き者も、殺さずして、そのまゝ連れ歸つて居るのを發見した。ダビデの部下の者は聲を放つて哭き、遂には哭く力さへうせて、失望のあまり、ダビデを石にて撃たんとするに至つた。それでもダビデは、「其の神エホバによりておのれをばげませり」とあり。これはヨブがあらゆる艱難試験の間に身を置き、處置の出づべき所を知らざる中に、「彼われを殺すとも、我は彼に依頼まん。」(ヨブ一三・一五)と告白したのと似て、如何にも壯烈なる信仰的態度を示すものである。パウロも亦、曾ていうた。「兄弟よ、我らがア ज्याにて遭ひし患難を汝らの知らざるを好まず、即ち歴せらるること甚

しく、力耐へがたくして生くる望を失ひ、心のうちに死を期するに至れり。これ己を頼まずして、死人を甦へらせ給ふ神を頼まん爲なり。(コリ後一・八、九)と。此の如く私共は百計盡きた時にも尚、依頼むべき獨の神を有することを、感謝せねばならぬ。(二一六)◎ダビデは祭司アビヤタルに向ひ、「請ふ、エポデを我にもちきたれ」というた。これはそのエポデを著用して、神の御旨を問はしめん爲であつた。斯してダビデは今一度神の導を求め、その御旨に従ふ生活に立戻つたのである。「かれ我をよばし我こたへん。我その苦難のときに偕にをりて、之をたすけ、之をあがめん。」(詩九一・一五)又「なやみの日にわれをよべ、我なんぢを援けん。而してなんぢ我をあがむべし」(詩五〇・一五)等とあり。神は喜んでその子等の祈をさし給ふ。私共は毎に神に祈り、又事毎に神に祈つて、その助と導とを受くる様でなくてはならぬ。(七一〇)◎衆人は道にてエジプト人なる青年が、病氣した爲に、その主人なるアマレク人から棄てられて、なやんで居るのを見出した。その使用人が病氣したからというて、路傍に遺棄して去つたのは、残酷極まる話である。基督の宗教は、途上になやめる旅人を

助けて、之を救ふことを教へる宗教である。所謂「善きサマリヤ人」の譬は、それである。(ルカ一〇・三〇―三七)ダビデはその青年を介抱して、之に食事をなさしめると、忽ち見違へるやうに元氣づき、やがてダビデとその部下とを案内して、アマレク人の後を追ふことゝなつた。斯して路傍に遺棄せられた一青年は、意外に大事な御奉公をする者となつたのである。其の如く、人は皆用ひどころがあるものである。基督によりて罪の滅亡から救はれた者は、又他人を罪の滅亡から救ひ出す爲に用ひらるゝのが、常の習である。救はれたる者をして救はしめよ。(一―一五)

◎「兵驕る者は敗る」といふことがある。アマレク人は戦争に勝つたことを誇り、大なる掠取物を得たことを喜び、飲みつ、食ひつ、踊りつ、夢中になつて騒いで居ると、そこへ不意にダビデが攻寄せ来て、駱駝に乗つて逃げた四百人を除く他は、アマレク人を残らず殺した。それにも拘らず、ダビデの二人の妻をはじめ、ヘブル人の男子女子は、殺さずに保護せられて居つた爲、そのまゝ之を取戻すことが出来たのである。耶蘇の御言に、「ノアの日にありし如く、人の子の日に然あるべし。ノア方舟に

入る日まで、人々飲み食ひ娶り嫁ぎなど爲たりしが、洪水きたりて彼等をとことごとく滅せり。ロトの日にも斯のごとく、人々飲み食ひ、賣り買ひ、植ゑつけ、家造りなど爲たりしが、ロトのソドムを出でし日に、天より火と硫黄と降りて、彼等をとことごとく滅せり」(ルカ七・二六―二九)とあり。神の審判は思はぬ時に來るのである。それを思へば、ただ飲み食ひ、賣り買ひ、植ゑつけ、家造りなどすることを知つて、神を敬ふことを知らざる人民は、憐れなものである。滅亡は意外の時に、彼等の上に落ち來る恐があるからである。(一六―二〇)

◎ダビデが率ゐた六百の兵のうち、その四百は第一線にあつて戦うたにも拘らず、他の二百は疲れて、ベソル川の邊にとゞまり、専ら輜重の世話をした。戦終りて後、第一線に立つた者が掠取物を獨占し、輜重の世話をした者を除外せんとするのを見て、ダビデは之をおしとゞめ、後方勤務をした者にも、戦闘に従事した者と同様に、掠取物の分配に與らしむることゝなつた。此の如く掠取物を戦闘員のみならず、非戦闘員にも分配することは、モーセの律法に早くから定められた所であつた。(民三一・二七)明

治天皇の御製に、「國をおもふ、みちに二つはなかりけり。いくさのにはに、たつもた  
たぬも。」とあり。私共は戦線に立つ者の勞苦を感謝すると共に、また後方勤務をする  
者の功績を、認識するに吝であつてはならぬ。(二二―二五)

◎ダビデは又これ迄、種々世話になつた、そここの邑々の人民に、それぞれ、掠取  
物の分け前を送つて、その報恩の志をあらはしたのである。恩を忘るゝは淺ましい  
ことである。然しながら恩に報ゆるは、床しく又美しい行爲である。それと同時に、  
私共は人の恩に報ゆることを知る如く、又、神の恩恵に報ゆることを知らねばなら  
ぬ。不信仰な一農夫が、何心なく或る集會に出席し、「牛はその主を知り、驢馬はそ  
のあるじの厩を知る。然れどイスラエルは識らず、わが民はさとらず。(イサー・三)と  
いふ聖句に基づいての説教を聴き、家に歸つて後その農園に行くと、一匹の牛が早く  
も彼を認め、その傍により、舌を出して彼の手を舐めるのを見て、忽ち前に聞いた  
「牛はその主をしり云々」の聖句を思ひ出し、彼がその主なる神を認むることの足り  
ないのを自覺し、悔改めて眞の信仰に入つたといふ話がある。私共は神の前に、恩知  
らずの民となりたくないものである。(二六―三一)

### 三三三 サウルの最期

#### (サムエル前書第三十一章)

一ペリシテ人、イスラエルと戦ふ。イスラエルの人  
人ペリシテ人のまへより逃げ、負傷者ギルボア山に  
斃れたり。ニペリシテ人、サウルと其子等に攻めよ  
り、ペリシテ人、サウルの子ヨナタン、アピナダブ  
およびマルキシエアを殺したり。三戦はげしくサウ  
ルにせまりて、射手の者サウルを射とめければ、彼  
痛く射手の者のために苦しめり。四サウル武器を執  
る者にいひけるは、爾の劍を抜き、其をもて我を刺  
しとほせ。恐らくは是等の割禮なき者きたりて我を  
刺し、我をばづかしめんと。然れども武器をとる者  
痛くおそれ肯んぜざれば、サウル劍をとりて其上

に伏したり。五武器を執るものサウルの死にたるを  
見て、おのれも劍の上に入して彼とともに死ねり。六  
かくサウルと其三人の子、及びサウルの武器をとる  
もの、並に其従者みな此日俱に死ねり。七イスラエ  
ルの人々の谷の對向に在るもの、及びヨルダンの對  
面に在る者、イスラエルの人々の逃ぐるを見、サウ  
ルと其子等の死ぬるをみて、諸邑を棄て、逃げけれ  
ば、ペリシテ人きたりて其中に在る。八明日ペリシ  
テ人戦敗せる者を剝がんとて來り、サウルと其三人  
の子のギルボア山に仆れたるを見たり。九彼等すな  
はちサウルの首を斬り、其鎧甲をはぎとり、ペリシ

テ人の地の四方につかはして此好報を其偶像の家お  
まび民の中につげしむ。一〇またかれら其鎧甲をア  
シタロテの家におき、其體をベテシヤンの城垣に釘  
つけたり。一二ヤベシギレアデの人々、ペリシテ人  
のサウルになしたる事を聞きしかば、一二勇士みな

二三〇  
おこり、終夜ゆきてサウルの體と其子等の體をベテ  
シヤンの城垣よりとりおろし、ヤベシにいたりて之  
を其處に焚き、一三其骨をとりてヤベシの柳樹の下  
にはうむり、七日のあひだ斷食せり。

◎ペリシテ人は、イスラエル人と戦うて之に勝ち、サウルの子ヨナタン、アビナダブ  
及びマルキ・シユアを殺した。ヨナタンは勇士であつた。彼は「多くの人をもて救ふ  
も、少き人をもてすくふも、エホバにおいては妨げなし。」(サム前一四・六)といひつゝ、そ  
の副官と只二人でペリシテ人に迫り、奇捷を得たやうなこともあつた。彼のダビデに  
於けるは、管仲、鮑叔の交情にもまさりて、眞實なるものであつた。彼は「おのれの  
命のごとくダビデを愛し。」(サム前一八・七)たのである。彼は孝子であつた。彼がその父  
サウルの非道の行爲を見て憂へ、之を諫めて過なからしめんとした苦心は、並大抵の  
ものではなかつた。(サム前一九・四一六)その上に彼は、神に信賴すること極めて篤きもの  
であつた。或はヨナタンのダビデに於ける、己を虚うして、只管神の御旨の行はれん

ことを求めた態度を評して、「舊約聖書中、最も多く基督の心を實現したものの」といふ  
た人がある。彼はその親に似ざる、愛と信仰との權化であつた。その最期は眞に哀し  
むべきものがあつた。(一、二)

◎サウルも同じく、敵の矢にあたり、痛手を負うて、その武器を執る者に向ひ、「爾の  
劍を抜き、其をもて我を刺しとほせ。恐らくは是等の割禮なき者きたりて我を刺し、  
我をばづかしめん。」といふたが、武器を執る者が甚く恐れ、之を肯んぜざるを見、自  
ら劍を取りてその上に俯したとある。彼はそのはじめ、謙遜柔和なる心を以て、神の  
召に應じた。(サム前九・二一。同一〇・二二)然しながら不幸にして、彼は間もなく、高ぶつて  
自ら用ゆる者となつた。或時はサムエルの到るを待ちかねて、祭司でない彼が自ら神  
に犠牲を獻げ、(サム前一三・八―一四)或時は又、アマレク人を討つて之を根絶すべきこと  
を命ぜられながら、勝手にその王を赦し、牛羊等の最も善きものを残し、たゞ惡しき  
ものを滅す等の、不従順な行爲をなすに至つた。その後年ダビデに對する態度の如き  
は、嫉妬、猜疑、陰謀、迫害等、至らざるなく、人が神を離るゝ時は、かくも墮落し

得るものかといふ、標本を示すようになつた。彼の生涯は最も悲惨なる墮落者の殷鑑である。又憐れなものといはねばならない。(三、四)

◎サウルは自殺した。その武器を執る者も亦之に殉死した。自殺といへば、耶蘇を賣つたユダも亦、その犯せる罪に責められて、煩悶のあまり自殺した。(マタ二七・五)之を聖書の教に照して考ふるに、「汝殺すなかれ」(出二〇・一三)との誡命は、他人を殺すことを戒しむると共に、又自ら害ふことを禁じたものである。自殺は神の御旨に逆らふ行為である。概していへば、人は神なきが故に望なく、望なきが故に自殺するのである。ヒュー・ブライム・ヒュースがいうた様に、「基督か、絶望か。人はその二つの中の一つを選ぶべき運命を有するものである。私共は基督を得ることによつて、此の世に於ては明るい希望を有ち、彼の世に於ては永遠の生命を嗣ぐべきものである。神を知る者には、自殺の必要がないのである。(五、六)

◎ペリシテ人は、サウルと、その三人の子との死骸を發見し、大に喜んでその好報を偶像の宮に報告し、又人民の間に告げ知らせたとある。成程ペリシテ人は戦に勝つたに相違ない。然しながら、これは彼等が善かつた爲に與へられた勝利ではなく、イスラエル人が悪かつた爲に陥つた禍に過ぎなかつたのである。斧はこれをもちゐて伐るものにむかひて、己みづから誇ることをせんや。鋸はこれを動かす者にむかひて、己みづから高ぶることをせんや。此はあだかも筈がそのれを擧ぐるものを動かし、杖みづから木にあらざるものを擧げんとするにひとし。(イザ一〇・一五)との言は、この場合のペリシテ人に、よく當嵌るのであつた。ペリシテ人はこの好報を偶像の宮及び民の中に告げたといへど、一勝一敗は戦の常で、今日勝つたかと思へば、明日は負けたと傳へられねばならない例も多く、此の如きものは、未だ眞の好報といふことが出来ない。眞の善き音信は基督の福音である。神の子が人を罪より救ひ給ふといふ報道である。最初のクリスマス夜、天の使が牧羊者に向ひ、「視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歡喜の音信を我なんぢらに告ぐ。」(ルカ二・一〇)といふたのは、それである。預言者イザヤは又、「よるこびの音信をつたへ、平和をつげ、善き音信をつたへ、救をつげ、シオンに向ひてなんぢの神は統治めたまふといふ者の足は、山の上において、いかに美

しきかな。(イザ五二・七)というたではないか。(七一〇)

◎ヤベシ・ギレアデの人民は、前年アンモニ人のために攻められた時、サウルによつて救はれたことがあり。(サム前一・一一)ペリシテ人がサウルとその子等との死骸を、ベテ・シヤンの城垣にさらして居るのを聞いて、捨ておくこと能はず、夜に乗じて之を奪ひ、携へ歸つて火葬に附したといふことである。彼等は斯して聊かサウルに對する舊恩を報いたものといふことが出来よう。今救主耶蘇は、私共を罪と滅亡とより救はん爲に、たふとき血を流し給うた。私共はヤベシ・ギレアデの人々の、サウルに於ける以上に、耶蘇に對する報恩の心がなくてはならぬ。主は我らの爲に生命を捨てたまへり。之によりて愛といふことを知りたり。我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。(ヨハ壹三・一六)と、ヨハネが教へたのは、尤も千萬のことといはねばならぬ。(一一一三)

山室軍平著

# 民衆の聖書サムエル後書

東京 救世軍出版及供給部

民衆の  
聖書

# サムエル後書

## 目次

(一六)	サムエル後書總論……………	一
(一一)	あゝ勇士は仆れたる哉(サムエル後書第一章)……………	一
(一二)	ユダに王となる(同、第二章)……………	八
(一三)	アブネル殺さる(同、第三章)……………	一五
(一四)	エホバは活く(同、第四章)……………	二二
(一五)	イスラエルに王となる(同、第五章)……………	二八
(一六)	歡喜雀躍(同、第六章)……………	三四
(一七)	ダビデの契約(同、第七章)……………	四一
(一八)	隨所の恩寵(同、第八章)……………	四八
(一九)	零落したる王孫(同、第九章)……………	五五

(一〇)	疑心暗鬼を生ず(同、第十章).....	六〇
(一一)	ダビデの大罪(同、第十一章).....	六七
(一二)	直言の人ナタン(同、第十二章).....	七三
(一三)	不倫の戀(同、第十三章).....	八一
(一四)	我等は死なざるべからず(同、第十四章).....	八八
(一五)	蒙塵(同、第十五章).....	九六
(一六)	流寓漂泊(同、第十六章).....	一〇四
(一七)	策士の末路(同、第十七章).....	一一二
(一八)	アブサロムの死(同、第十八章).....	一一九
(一九)	悲惨なる勝利(同、第十九章一―二三).....	一二七
(二〇)	還幸の途上(同、第十九章二四―四三).....	一三四
(二一)	叛逆者シバ(同、第二十章).....	一四一
(二二)	三年の饑饉(同、第二十一章).....	一四九
(二三)	讚美の歌(同、第二十二章).....	一五六
(二四)	最後の言(同、第二十三章).....	一六二
(二五)	無代價の獻物をせず(同、第二十四章).....	一七〇



サムエル後書總論

サムエル後書は同前書について、サウルの没落のことより書き起し、ダビデがユダの王として、ヘブロンに住みたること、(サム後二・四) やがて又イスラエルの王として、エルサレムに都を定めたること、引續き外敵に打勝ち、したがつて民心を得、國運隆隆たるに至つた當時から、その晩年に至るまでのことを記してある。すなはち神がダビデに向ひ、「我汝を牧場より取り、羊に隨ふ所より取りて、わが民イスラエルの首長となし、汝がすべて往くところにて汝と共にあり。汝の諸の敵を汝の前より斷ちさりて、地の上の大なる者の名の如く、汝に大なる名を得さしめたり。」(サム後七・八、九)と宣うたのは、そのことである。

それにも拘らず、ダビデは大罪を犯した。彼はその忠臣ウリヤの妻の、美にして艶なるを見て心動き、計略を用ひてウリヤを戦場に討死せしめ、その妻を後宮に入るゝに

至つたのである。彼ほどに神の恵深きを味ひ知つた者が、どうして斯る大なる罪惡を犯すに至りたるかは、殆んど理解し難きことである。すなはち神が預言者ナタンを通じて、彼を譴責し、「汝我を輕んじて、ヘテ人ウリヤの妻をとり、汝の妻となしたるに因りて、劍、何時までも汝の家を離るゝことなかるべし。エホバ斯くいひ給ふ。視よ、我汝の家の中より、汝の上に禍を起すべし云々」(サム後二二・一〇、一一)と宣うたのは、實際、止むを得ざることであつた。それを思へば何人も油斷することは出来ない。今更の様にたゞ、耶蘇がその弟子に告げ給うた、「なんぢら誘惑に陥らぬやう目を覺し、かつ祈れ」(マル一四・三八)との御言の、適切なるを覺ゆるのみである。

ダビデは斯して大なる罪を犯した。然しながら彼は、眞劍に之を悔改めて、神の御赦を得た。「われはわが愆をしろ。わが罪はつねにわが前にあり。我はなんぢにむかひて、たゞなんぢに罪ををかし、御前にあしきことを行へり。されば汝ものいふときは義とせられ、なんぢに鞫るときは答なしとせられ給ふ。」(詩五一・三、四)「なんぢは祭物を

このみたまはず、もし然らずば我これをさしげん。なんぢまた燔祭をも悦びたまはず。神のもとめ給ふ祭物は、くだけたる靈魂なり。神よ、汝は碎けたる悔いしこゝろを藐しめ給ふまじ。」(詩五一・一六、一七)などいふのは、その場合に於ける彼の眞心からの叫聲であつた。畢竟彼は恩恵によつて救はれた、大なる罪人であつた。斯る大なる罪人をさへ、受納れて潔め別ち、之を聖徒の一人とならしめ給うた神の慈愛は、驚異に値する。

マセソンはイスラエルの歴史に於ける、ダビデの立場を論じて、「彼は雷にイスラエル諸王の中にて、最も大なるものであつたのみならず、他の凡ての點に於ても、大なる者であつた。彼は勞働階級を代表するところの牧童であり、ユバル、ミリアム、デボラの繼續者たる樂人であり、國民の平和をおびやかす所の、すべてのゴリアテに打勝つ軍人であり、戰爭に便宜を齎らす所の武者修業者であり、軍隊を調へ、國政を整理する所の王であり、牛と羊との血を獻げて、くだけたる悔いし心を贖ふ所の祭司であ

り、その王國の永續の爲に、新鮮なる息を吹込んだ預言者であり、詩篇全部をその名によつて呼ばるゝ所の詩人であり。イスラエル人の評價によれば、彼はその國民的精神の權化、その國民性の顯現、イスラエル魂の化身、又その國運の模型であつた。イスラエル人は彼に於て、己自身のたましひの繪姿を見たのである」というて居る。又以て彼が如何に、イスラエル歴史の上に、特異の地位を占むるかを知ることが出来る。

之を信仰的にいへば、ダビデは多くの意味に於て、後に現るべき救主耶穌の模型であつた。その微賤なる牧童より身を起したことは、耶穌がナザレの田舎大工の家に人と成り給うたのと似て居り、その膏そゝがれて神の選擇をうけたことは、耶穌が聖靈をもて膏そゝがれ給うたのと比すべく、その流寓漂泊の身となつて、幾多の苦辛を嘗めたことは、耶穌が枕する所なく歴廻りて、善を行ひ給うたのと似た所があり、彼がペリシテ人に勝つて巨人ゴリアテを打倒したのは、耶穌が悪魔の誘惑に打勝ち、最終の敵なる死をさへ滅し給うたのと似た所があり、彼が早くからイスラエルの王とな

るべき召を受けながら、容易にその人民に認められなかつたことは、耶穌が己の國に來り給ひしに、己の民は之を受けなかつたのと、類似する所がある。彼はサウルの己を害せんと圖るのを知りながら、之を容赦した如く、耶穌は己に仇する者の爲に、執成してゐる給ふのである。又彼があらゆる障礙を乗り越えて、遂にイスラエルの王となつた如く、耶穌はやがて萬國萬民を統治し、殊に彼に屬するその人民を支配し、彼等の心の王國に君臨し給ふのである。ダビデの生活と行動とは、後の耶穌を豫表する所が最も多い。

サムエル後書の内容は、概略左の如し。

第一、ダビデの勝利

- (一) サウルとヨナタンとに對する挽歌。(二・二一・二七)
- (二) ユダに王となる。(二・二一・四・二二)
- (三) イスラエルに王となる。(五・一一・一〇・二九)

第二、彼の墮落及び受難

(一) 彼の犯罪(二一・二二・二三)

(二) 彼の刑罰(二三・二四・二五)

第三、彼の復位

(一) エルサレムへ還幸(二〇・二一・二二)

(二) 餘録(二一・二二・二四・二五)

民衆の聖書 サムエル後書

山室軍平著

一 あゝ勇士は仆れたる哉

(サムエル後書第一章)

一 サウルの死に後、ダビデ、アマレク人を撃ちてかへり、チクラグに二日止まりけるが、二第三日に及びて、一個の人其衣を裂き、頭に土をかむりて、陣營より即ちサウルの所より來り、ダビデの許にいたり地にふして拜せり。ミダビデかれにいひけるは、汝いづくより來れるや。かれダビデにいひけるは、イスラエルの陣營より逃れきたれり。四ダビデ

かれにいひけるは、事いかん。請ふ我につげ。彼こたへけるは、民戦に敗れて逃げ、民おほく仆れて死れり。またサウルと其子ヨナタンも死れり。五ダビデ其己につぐる少者にいひけるは、汝いかにしてサウルと其子ヨナタンの死にたるをせるや。六ダビデにつぐる少者いひけるは、我はからずもギルボア山にのぼり見しに、サウル其槍に倚りかゝりたり

て、戦車と騎兵かれにせめよらんとせり。七彼うし  
るにふりむきて我を見、我をよびたれば、我こたへ  
て、我こゝにありといふ。ハかれ我に汝は誰なるや  
といひければ、我かれにこたへて、我はアマレク人  
なりといふ。九彼また我にいひけるは、わが身いた  
く撃れば請ふ我うへのりて我をこるせ。わが生命  
なほわれの中にまつたければなりと。一〇我すなは  
ち彼の上へのりてかれを殺したり。其は我かれが既  
に仆れて生くることをえざるを知りたればなり。而  
して我その首にありし屍とその腕にありし劍を取  
りて、これをわが主に携へきたれり。一一是におい  
てダビデおのれの衣を執りてこれを裂けり。また彼  
とともにある者も皆しかせり。一二彼等サウルのた  
め、また其子ヨナタンのため、またエホバの民のた  
め、イスラエルの家のために哭きかなしみて、晩まで  
食を断てり。其は彼ら劍にたふれたればなり。二三ダ  
ビデ已に告げし少者にいひけるは、汝は何處の者な

ざれ。亦供物の田園もあらざれ。其は彼處に勇士の  
干棄てらるればなり。即ちサウルの干膏を沃がずし  
て彼處に棄てらる。二三殺せし者の血をのまずして  
ヨナタンの弓は退かず。勇士の脂を食はずしてサウ  
ルの劍は空しく歸らず。二三サウルとヨナタンは愛ら  
しく樂げにして、生死ともに離れず。二人は驚よりも  
捷く、獅よりも強かりき。二四イスラエルの女等  
よ、サウルのために哀げ。サウルは絳き衣をもて汝

◎ダビデはチクラグに歸り、三日目にアマレク人なる一青年が、衣を裂き、頭に土を  
かむり、來りてサウルの最期につき、報告するのを聞いた。今彼が言うた所をサムエ  
ル前書の終の記事(サム前三一・三一五)と合せ、考へて見るに、サウルは戦争の最中、ペ  
リシテ人の矢にあたり、痛手を負うて苦しみのあまり、その武器を執る者に向ひ、「汝  
の劍を抜き、それをもちて我を刺しとほせ」というたが、武器を執る者がそれをし得な  
いのを見て、自ら劍をとりて其の上に伏した。武器を執る者は之を見て、亦劍の上に

るや。かれこたへけるは、我は他國の人すなはちア  
マレク人なりと。二四ダビデかれにいひけるは、汝  
なんぞ手をのばして、エホバの膏そそぎし者をこる  
すことを畏れざりしやと。二五ダビデ一人の少者を  
よびていひけるは、近よりてかれをこるせと。即ち  
かれをうちければ死れり。二六ダビデかれにいひけ  
るは、汝の血は汝の首に歸せよ。其は汝口づから我  
エホバのあぶらそそぎし者をこるせりといひて、己  
にむかひて證をたつればなり。二七ダビデ悲歌を  
もて、サウルと其子ヨナタンを弔ふ。一八ダビデ命  
じてこれをエダの族にをしへしむ。即ち弓の歌是  
なり。是はヤシル書に記さる。一九イスラエルよ、  
汝の榮耀は汝の崇邱に殺さる。嗚呼勇士は仆れた  
るかな。二〇此事をガテに告ぐる勿れ。アシケロン  
の邑に傳ふる勿れ。恐くはペリシテ人の女ら喜ば  
ん。恐くは割禮を受けざる者の女ら樂み視はん。二二  
ギルボアの山よ、願くは汝の上に雨降ることあら  
な。

等を華麗に粧ひ、金の飾を汝等の衣に着けたり。二三  
嗚呼勇士は戦の中に仆れたるかな。ヨナタン汝は  
崇邱に殺されぬ。二六兄弟ヨナタンよ、我汝のた  
めに悲慟む。汝は大に我に樂き者なりき。汝の我を  
いつくしめる愛は尋常ならず、姉の愛にも勝りたり。  
二七嗚呼勇士は仆れたるかな。戦の具は失せたるか  
な。

伏して自殺した。然るにサウルはなほ死にきれず、やがて槍によつて身を起し、後を振り向いて、其處に一人のアマレク人が來合せたのを見、「わが身いたく擧れば、請ふ我がうへにのりて我をころせ」といひ、彼から止めを刺されて死んだものと見える。かくしてサウルの最期は、「希望なく、神なき」(エニ・一二)いとも憐れな背教者の最期であつた。(二一一〇)

◎アマレク人なる少者は、サウルの死んだ報道が、ダビデを喜ばするであらうと、思ひ量つたに拘らず、ダビデはそれを聞いて甚く悲しんだのである。サウルは一生のあひだ、ダビデを敵として彼に迫害を加へ、之を亡きものにせんと試みた。けれどもダビデは飽くまでも彼を尊敬し、之をその主君とし、又舅として、奉仕したのである。水戸黄門光圀の言に、「主人と親は無理なるものと思へ」とあり。ダビデは彼の主人たり、又義理の親たるサウルに對し、よくさうした覺悟で、あらん限の誠をつくしたのである。(二一一六)

◎ダビデは「弓の歌」をつくつて、サウルとその子ヨナタンとを用うた。前に彼が巨人ゴリアテを仆して歸つた時、女たちは聲をそろへて、「サウルは千をうち殺し、ダビデは萬をうちころす」(サム前一八・七)と歌ひ出で、それが忽ち流行歌となつて全國にひろがつた。これは快活なる凱旋の歌であるから、かくも速に流布したのであれど、今度の弓の歌はそれと違つて弔歌である。戦死者を悼む悲哀の歌であるから、前のもの程廣く世に行はるべき性質のもでなかつた。それ故ダビデは命令を下し、之をユダの族にをしへて歌はしめたのである。それにしても、サウルとその子ヨナタン他人、すなはち親子四人が打揃うて、國家の爲に生命を獻げたといふのは、如何にも悲壯の極にて、此は正しく後世までも、傳へらるべき出來事であつたに相違ない。ダビデが斯して死者に對する禮讓を盡したのは、極めて床しきこと、いはねばならない。

(二七、一八)

◎「嗚呼勇士は仆れたるかな。」嗚呼勇士は戦の中に仆れたるかな」等の句が、三度までも繰返されて居る。(一九、二五、二七)サウルとヨナタンとは、いかにも勇士であつた。敵を恐れず進んで戦ふ勇士であつた。その昔、神はヨシユアに向ひて、繰返し、「心を

強くしかつ勇め(ヨシ一・六)と仰せられ、又牢屋の中に囚へられたパウロに向ひても、  
同様に、「雄々しかれ、汝エルサレムにて我につきて證をなしたる如く、ロマにても證  
をなすべし。」(使二三・一一)と宣うたとあり。凡て神の御業を行ふ者には勇氣を要する。  
多くの善良なる計畫又工夫は、たゞ一つの勇氣を缺ぐが爲に、未完成に終つた例が  
少くない。私共は神の軍隊に屬する軍人として、亦勇敢にその聖戦を戦ふ者であり  
たい。(一九一―二二)

◎サウルとヨナタンとは、互に相愛した。ヨナタンの孝心はいふまでもなきことなが  
ら、サウルのヨナタンに對する愛情も亦、至つて深いものがあつた。畢竟彼がダビデ  
を敵として憎んだのも、彼が在る間は、その子ヨナタンが王位に即くべき望の少いこ  
とを憂へたからであつた。(サム前二〇・三二)こゝにダビデが、「サウルとヨナタンは愛ら  
しく樂しげにして、生死ともに離れず、二人は驚よりも捷く、獅子よりも強かりき。」  
と歌うた如く、彼等は最後まで共に戦うて敵に當り、遂に生死を共にするに至つたの  
である。それにつけても、私共基督に在る者は、又眞に親子の愛情に厚からねばなら

ぬ。子たる者よ、凡ての事みな兩親に順へ、これ主の喜びたまふ所なり。父たる者よ、  
汝らの子供を怒らすな、或は落膽することあらん。(コロ三・二〇、二二)といふ様な教もあ  
るではないか。(二三―二五)

◎管仲は鮑叔が如何にもよく、自分を理解してくれるのを喜んで、「我を生む者は父母、  
我を知る者は鮑子なり」というた。今ヨナタンのダビデに對する愛情を考へて見るに、  
彼は鮑叔の管仲に於けるにもまさつた理解を以て彼を遇し、その生命の如くに彼を愛  
し、利害の關係を忘れて、只管その爲につくした。彼はダビデを庇護する爲に、あぶ  
なくサウルの投槍に刺されんとしたことをさへあつた。(サム前二〇・三三) 耶蘇の御言に、  
「人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし」(ヨハ一五・一三)とあり。  
ヨナタンのダビデに對する愛は、それであつたといふことが出来る。これは後々まで  
も傳へらるべき、たふとき友情の模範であつた。(二六、二七)

## 二 ユダに王となる

### (サムエル後書第二章)

一此のちダビデ、エホバに問ふていひけるは、我ユダの一つの邑にのぼるべきや。エホバかれにいひたまひけるは、のぼれ。ダビデいひけるは、何處にのぼるべきや。エホバいひたまひけるは、ヘブロンにのぼるべしと。ニダビデすなはち彼處にのぼり。その二人の妻エズレル人アヒノアムおよびカルメル人ナバルの妻なりしアビガルもともにのぼれり。ミダビデ其おのれと共にありし従者と其家族を、ことごとく將きぬのぼりければ、皆ヘブロンに諸邑にすめり。四時にユダの人々きたり、彼處にてダビデに膏をそそぎてユダの家の王となせり。人々ダビデにつけて、サウルを葬りしはヤベシギレアデの人なりといひければ、五ダビデ使者をヤベシギレアデの人に

おくりて、これにいひけるは、汝らこの厚意を汝らの主サウルにあらはしてかれを葬りたれば、汝らは汝らエホバより福をえよ。六汝らは汝らエホバ恩寵と眞實を汝等にしめしたまへ。汝らこの事をなしたるにより、我亦汝らに此恩恵をしめすなり。七されば汝ら手をつよくして勇ましくなれ。汝らの主サウルは死にたり。又ユダの家我に膏をそそぎて我を彼らの王となしたればなりと。八爰にサウルの軍の長ネルの子アブネル、サウルの子イシボセテを取りて、これをマハナイムにみちびきわたり、九ギレアデとアシユリ人とエズレルとエフライムとベニヤミンとイスラエルの衆の王となせり。二〇サウルの子イシボセテは、イスラエルの王となりし時

四十歳にして、二年のあひだ位にありしが、ユダの家はダビデにしたがへり。二ダビデがヘブロンにありてユダの家の王たりし日数は七年と六ヶ月なりき。ニネルの子アブネルおよびサウルの子なるイシボセテの臣僕等、マハナイムを出てギベオンに至れり。一三ゼルヤの子ヨアブとダビデの臣僕もいてゆけり。彼らギベオンの池の傍にて出會ひ一方は池の此畔に、一方は池の彼岸に座す。一四アブネル、ヨアブにいひけるは、いざ少者をして起ちて我らの前に戯れしめん。ヨアブいひけるは、起たしめんと。一五サウルの子イシボセテに屬するベニヤミンの人、其數十二人およびダビデの臣僕十二人起ちて前み、一六各その敵手の首を執へて劍を其敵手の脊に刺し、斯して彼等俱に斃れたり。是故に其處はヘルカテハツリム(利劍の地)と稱へらる。即ちギベオンにあり。一七此日戰甚だ烈しくしてアブネルとイスラエルの人々、ダビデの臣僕のまへに敗

る。一八其處にゼルヤの三人の子ヨアブ、アビシヤイ、アサヘル居たりしが、アサヘルは疾足なること野に在る鹿のごとくなりき。一九アサヘル、アブネルの後を追ひけるが、行くに右左にまがらず、アブネルの後をしたふ。二〇アブネル後を顧みていふ、汝はアサヘルなるか。彼しかりと答ふ。二一アブネルかれにいひけるは、汝の右か左に轉向ひて少者の一人を擒へて其戎服を取れと。然れどアサヘル、アブネルをおふことを罷めて外に向ふを肯んぜず。二二アブネル再びアサヘルにいふ、汝我を追ふことをやめて外に向へ。我なんぞ汝を地に撃ち仆すべけんや。然せば我いかでかわが面を汝の兄ヨアブにむくべけん。二三然れどもかれ外にむかふことをいなむにより、アブネル槍の後銛をもてかれの腹を刺しければ、槍の背後にいてたり。かれ其處に仆れて立時に死ねり。斯りしかばアサヘルの仆れて死ねる所に來る者は皆たちどまれり。二四されどヨアブと



アビシヤイはアブネルの後を追ひきたりしが、ギベ  
オンの野の道傍にギアの前にあるアンマの山に至れ  
る時、日暮れぬ。二五ニヤミンの子孫アブネルに  
したがひて集まり、一隊となりてひとつの山の頂  
にたてり。二六爰にアブネル、ヨアブをよびていひ  
けるは、刀劍豈永久にほるばさんや。汝其終には  
怨恨を結ぶにいたるをしらざるや。汝何時まで民に  
其兄弟を追ふことをやめてかへることを命ぜざる  
や。二七ヨアブいひけるは、神は活く、若し汝が言  
出さざりしならば、民はおの／＼其兄弟を追はずし  
て今晨のうちにさりゆきしならんと。二八かくてヨ

一〇  
アブ喇吠を吹きければ、民皆たちどまりて、再びイ  
スラエルの後を追はず、またかさねて戦はざりき。  
二九アブネルと其従者、終夜アラバを経ゆきてヨルダ  
ンを渡り、ピテロンを通りてマハナイムにいたれ  
り。三〇ヨアブ、アブネルを追ふことをやめて歸り、  
民をこと／＼集めたるにダビデの臣僕十九人とア  
サヘル缺けてをらざりき。三一されどダビデの臣僕  
はベニヤミンとアブネルの従者三百六十人を撃ち殺  
せり。三二人々アサヘルを取りあげてベテレヘムに  
ある其父の墓に葬る。ヨアブと其従者は終夜ゆき  
て、黎明にヘブロンにいたれり。

◎ダビデがチクラグに留り居る間に、幾多の勇將猛卒が其處此處から出で來つて、彼  
に附いた。當時ダビデに歸して之を助くる者、日々に加はりて終に大軍となり、神の  
軍旅のごとくなれり(歴上一二・二二)とあるのは、それである。したがつてダビデは大  
なる軍勢の所有者となり、如何にその大なる武力を用ふべきかといふ問題に、逢着す

ることゝなつた。その際、彼が神に向ひて、「我ユダの一つの邑にのぼるべきや。」又  
「何處にのぼるべきや」と問うて、神の導に従うたのは善い。「汝すべての途にてエホ  
バをみとめよ。さらばなんぢの途を直くしたまふべし」(箴三・六)とは、此の場合に於  
けるダビデの態度であつた。斯して彼が手に入れたヘブロンは、彼の先祖代々の墓の  
ある所で、(創二三・一九)又祭司の邑、逃避の邑(ヨシ二〇・七)の一つであつた。(二一三)  
◎ユダの支派はダビデに膏を注いで、之をその王と崇めた。ずつと以前に、サムエル  
が彼に膏を注いだことがあれど、(サム前一六・一三)それはただ彼の將來を見越しての  
ことに過ぎなかつた。しかし乍ら此の度は少くとも、ユダの一つの支派に對しては、  
王者として臨むことゝなつたのである。ダビデがユダの王となつて最初に行うたこと  
は、ヤベシ・ギレアデの人々が、サウルの死骸を奪ひ來り、鄭重に之を葬つたのに對  
し、(サム前三一・一一―一三)感謝の意を表することであつた。風と日光とが、こもこも旅  
人の外套を脱がせようと試みた。風が強く吹けば吹く程、旅人は外套のボタンを固く  
締めたが、やがて日光が暖く照し始めると、旅人はボタンをはづして、外套を脱い

だといふ話がある。ダビデの寛仁大度は、日光の旅人に於けると同じく、人心を緩和し、その歸嚮する所を知らしむる上に、大なる益があつたに相違ない。(四一七)

◎ユダの人々がダビデを王としたのに對し、サウルの軍の總督であつたアブネルは、サウルの第四子イシボセテを立て、之をイスラエルの王とした。かくしてダビデとイシボセテと、即ち神に選ばれた者とアブネルに推された者と、二人の王が對立することゝなつたわけである。之と似て私共の前には又いつでも、キリストと悪魔と、靈と肉と、義と不義との、二つの異なる王者が對立し、私共をして去就に惑はしめんとする。然しながら私共は、いふまでもなく、基督に與して悪魔に敵し、靈に従うて肉を抑へ、義を以て不義を克服せねばならぬ。言ひ換れば、私共は基督をして、己が心と生活との全部を、支配せしめ奉らねばならぬ。我基督と偕に十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、基督我が内にありて生くるなり。(ガラ二・二〇) と、パウロがいうたのは、そのまゝ、私共の體驗でありたきものである。(八一―)

◎イスラエル軍の總督アブネルの發意にて、ユダの軍の總督ヨアブが之に同意した上、

雙方の軍隊から各々十二人宛の勇士を出し、それらが二人づつ、果合をして作るのを見て、之を慰んだ。爾來その處の名を、ヘルカテ・ハヅリム(利劍の地)と稱へたと  
いうてある。かく勇士が互に相殺して、それを戲事の如く見物するなどは、如何にも殘忍なる、非人道の行爲であつた。然しながら又考へて見れば、罪人は何時も戲事の如く罪惡を行ひ、相率ゐて、滅亡に至りつゝあるものである。愚なる者は惡をなすを戲事のごとくす。(箴一〇・二三)「既にその隣を欺くことをなして、我はたゞ戯れしのみといふ者は、火箭または鎗または死を擲つ狂人のごとし。」(箴二六・一九)などとあるのは、その謂である。慎むべきことではないか。(二二―一六)

◎ヨアブの兄弟アサヘルは、「疾足なること野にをる鹿のごとく」であつた。彼が敵の大將アブネルの後を追うて、一直線に馳せ來るのを見て、アブネルは彼が右か左かに歩を轉じ、他人に向はんことを求めたが、聽かないゆゑ、止むなく、槍の後銛を用ひ、その腹を刺して之を殺した。彼は疾足なることに於ては、アブネルに勝つて居つたが、その武勇に於ては、固より彼に比すべき者ではなかつた。それ故彼が唯一人にて、ア

ズネルの後を追うたのは、己が力をはからずして、無謀の戦をしたものと、言はれ  
 ても、致方はあるまい。耶蘇の御言に、「又いづれの王か、出でて他の王と戦争をせん  
 に、先づ坐して、此の一萬人をもて、かの二萬人を率ゐきたる者に對ひ得るか、否  
 か、籌らざらんや。もし及かざば、敵なほ遠く隔たるうちに、使を遣して和睦を請ふ  
 べし。斯の如く汝らの中、その一切の所有を退くる者ならでは、我が弟子となるを得  
 ず」(ルカ一四・三二―三三)とあり。神の御軍に従ふ私共も亦、其のつもりで、日頃から  
 見込をつけてかゝらねばならぬ。私共は一切の所有物を捨て、かゝるより以下の獻身  
 では、基督の弟子たる生活を一貫するに、力が足りないのである。(二七―二四)

◎アブネルはヨアブに向ひ、「刀劔豈永久にほろぼさんや。汝其の終には怨恨を結ぶに  
 いたるをしらざるや。汝何時まで民に、其の兄弟を追ふことをやめてかへることを命  
 ぜざるや」というた。これはイスラエル軍の大將から、ユダの軍の大將に、停戦を申  
 出でたものである。ヨアブは之を聞いて、「神は活く、若し汝が言ひ出さざりしなら  
 ば、民はおのおの其の兄弟を追はずして、今晨のうちにさりゆきしならん」といひ、

快く之を承諾した爲に、雙方の軍勢は暫く、交戦を止むることゝなつたのである。  
 戦争は好ましからぬものである。「なんぢの劔をもとに收めよ、すべて劔をとる者は劔  
 にて亡ぶるなり。」(マタ二六・五二)と、耶蘇は仰せられた。ミルトンの言に、「武力にて征  
 服したものは、半ば征服したものに過ぎない」とあり。ウエリントンも又、「敗北につ  
 いで悲惨なるものは勝利である」というて居る。實に平和の君がしろしめす、永久平  
 和の時代が、速に來らんことを、願はしいではないか。(二五―三二)

### 三 アブネル殺さる

#### (サムエル後書第三章)

一 サウルの家とダビデの家の間の戦争久しかりし  
 が、ダビデは益強くなり、サウルの家はますます  
 弱くなれり。ニヘアロンにてダビデに男子等生る。  
 其首出の子はアムノンといひて、エズレル人アヒノ  
 アムより生る。三共次はキレアアといひて、カルメ

ル人ナバルの妻なりしアピガルより生る。第三はア  
 アサロムといひて、ゲシユルの王タルマイの女子マ  
 アカの子なり。第四はアドニヤといひて、ハギテ  
 の子なり。第五はシバテヤといひてアピタルの子な  
 り。五第六はイテレヤムといひて、ダビデの妻エカ

ラの子なり。是等の子へアロンにてダビデに生る。  
六サウルの家とダビデの家の間に戦争ありし間、ア  
ブネルは堅くサウルの家を荷擔り。七嚮にサウル一  
人の妾を有てり。其名をリヅバといふ。アヤの女な  
り。爰にイシボセテ、アブネルにいひけるは、汝何  
ぞ我父の妾に通じたるや。ハアブネル甚しくイシ  
ボセテの言を怒りていひけるは、我今日汝の父サウ  
ルの家とその兄弟とその朋友に厚意をあらはし、  
汝をダビデの手にわたさざるに、汝今日婦人の過  
を擧げて我を責む。我あに犬の首ならんや。ユダに  
くみする者ならんや。九神アブネルに斯なしたまか  
されて斯なしたまへ。エホバのダビデに誓ひたまひ  
しごとく、我かれに然なすべし。一〇即ち國をサウ  
ルの家より移し、ダビデの位をダンよりベエルシバ  
にいたるまで、イスラエルとユダの上になてん。一一  
イシボセテ、アブネルを恐れたれば、かされて一言  
も之にことふるをえざりき。一二アブネルおのれの

我わが僕ダビデの手を以て、わが民イスラエルをヘ  
リシテ人の手より、またその諸の敵の手より救ひ  
いださんといひたまひたればなりと。一九アブネル  
亦ベニヤミンの耳に語り。しかしてアブネル自ら  
イスラエル及びベニヤミンの全家の善しとおもふ所  
を、へアロンにてダビデの耳に告げんとて往けり。  
二〇すなはちアブネル二十人をしたがへてへアロン  
にゆきて、ダビデの許にいたりければ、ダビデ、ア  
ブネルと其したがへる従者のために酒宴を設けた  
り。二一アブネル、ダビデにいひけるは、我起ちて  
ゆき、イスラエルを悉くわが主王の所に集めて、  
彼等に汝と契約を立てしめ、汝をして心の望む所の  
者を悉く治むるに至らしめんと。是においてダビ  
デ、アブネルを歸してかれ安然に去れり。二三時にダ  
ビデの臣僕およびヨアア、人の國を侵して歸り、大  
なる掠取物を携へきたれり。然れどアブネルはダ  
ビデとともにへアロンにはをらざりき。其はダビデ

代に使者をダビデにつかはしていひけるは、此地は  
誰の所有なるや。又いひけるは、汝我と契約を爲  
せ。我力を汝に添へてイスラエルを悉く汝に歸せ  
しめん。二三ダビデいひけるは、善し、我汝と契約  
をなさん。但し我一の事を汝に索む。即ち汝來りて  
わが面を觀る時、先づサウルの女ミカルを携れきた  
らざれば、我面を觀るを得じと。二四ダビデ使者を  
サウルの子イシボセテに遣はしていひけるは、わが  
メリシテ人の陽皮一百を以て聘りたるわが妻ミカル  
を我に交すべし。二五イシボセテ人をつかはして、  
かれを其夫ライシの子バルテより取りしかば、一六  
其夫哭きつゝ歩みて其後にしたがひて、俱にバホリ  
ムに至りしが、アブネルかれに歸り往けといひけれ  
ば、すなはち歸りぬ。一七アブネル、イスラエルの  
長老等と語りていひけるは、汝ら前よりダビデを汝  
らの王となさんことを求め居たり。一八されば今こ  
れをなすべし。其はエホバ、ダビデに付いて語りて、

かれを歸してかれ安然に去りたればなり。二三ヨア  
ア及びともにありし軍兵皆かへりきたりしとき、人  
々ヨアアに告げていひけるは、ネルの子アブネル王  
の所にきたりしが、王かれを返してかれ安然にされ  
りと。二四ヨアア王に語りていひけるは、汝何を爲  
したるや。アブネル汝の所にきたりしに、汝何故に  
かれを返して去りゆかしめしや。二五汝ネルの子ア  
ブネルが汝を誰かさんとてきたり、汝の出入を知り、  
また汝のすべて爲す所を知らんために來りしを知る  
と。二六かくてヨアア、ダビデの所より出來り、使  
者を遣はしてアブネルを追はしめたれば、使者シラ  
の井よりかれを將返れり。されどダビデは知らざり  
き。二七アブネル、へアロンに返りしかば、ヨアア  
彼と密に語らんとて彼を門の内に引きゆき、其處に  
てその腹を刺して之を殺し、己の兄弟アサヘルの血  
をむくいたり。二八其後ダビデ聞きていひけるは、  
我と我國はネルの子アブネルの血につきて、エホバ

のまへに永く罪あることなし。二九其罪はヨアブの首と其父の全家に歸せよ。願はくはヨアブの家には白濁を疾むものか、癩病人か、杖に倚るものか、劍に仆るものか、食物に乏しき者が絶ゆることあらざれと。三〇ヨアブとその弟アビシヤイのアブネルを殺したるは、かれがギベオンにて戦陣のうちにおのれの兄弟アサヘルをころせしにふれり。三二ダビデ、ヨアブおよびおのれとともにある民にいひけるは、汝らの衣服を裂き、麻の衣を着てアブネルのために哀哭くべしと。ダビデ王其棺にしたがふ。三三人衆アブネルをヘブロンに葬れり。王聲をあげてアブネルの墓に哭き、又民みな哭けり。三三王アブネルの爲に、悲の歌を作りて云はく、アブネル如何にして愚なる人の如くに死にけん。三四汝の手は縛もあらず、汝の足は鎖にも繋れざりしものを。嗚呼汝

◎サウルの家とダビデの家との間に、戦争が長く續いた。しかもダビデは戦ふ毎に益

一八  
は悪人のために仆るゝ人のごとくに仆れたり。斯て民皆再びかれのために哭けり。三五民みな日のあるうちにダビデにパンを食はしめんとて來りしに、ダビデ誓ひていひけるは、若し日の没るまへに我パンにても何にても味ひなば、神我にかなし又重れて斯なしたまへと。三六民皆見て之を其目に善しとせり。凡て王の爲す所の事は皆民の目に善しと見えたり。三七其日民すなはちイスラエル、皆ネルの子アブネルを殺したるは、王の所爲にあらざるを知れり。三八王その臣僕にいひけるは、今日一人の大將大人イスラエルに斃る。汝らこれをしらざるや。三九我は膏そくがれし王なれども、今日尙弱し。ゼルヤの子等なる此等の人我には制しがたし。エホバ惡をおこなふ者に其惡に隨ひて報いたまはん。

益強くなり、サウルの家は戦ふ毎に益々弱くなつた。耶蘇の御言に、「それ誰にても、有てる人は與へられて愈々豊ならん。然れど有たぬ人は、その有てる物をも取らるべし。」(マタ一三・一二)とあり。私共の信仰生活に於ても亦此の如く、内に生命があるなら、時を経るにしたがうて成長進歩すれど、内に生命がないなら、日を重ねるにつれて、追々枯死する他はない。神はモーセに命じて、將來、イスラエルの王たらん者は、「妻を多くその身に有ちて、心を迷はずからず」(申一七・一七)と戒め給うた。然るにダビデが、その明白なる誠命を破り、多くの妻を娶つたのは、甚だ遺憾なことである。やがて諸の禍をその家庭に經驗するに至つたのは、自ら播いた種子を刈つたものとして、また餘儀なきことといはねばならない。(二一五)  
◎アブネルはサウルの子イシボセテを擁護し、之を王としてゐたにも拘らず、イシボセテから、その父サウルが遺せし妾に通じたる故を以て責められ、憤怒して之に離反することゝなつた。諺にも「犯罪の下に婦人あり」といふ如く、災禍は婦人のことから起り來つたのである。日本の歴史にも、新田義貞が勾當内侍の愛に溺れ、出陣の時機

をおくれた爲に、楠正成、その他の忠臣を戦死せしむるに至つた、といふ説があり。世に性の問題の取扱を誤るくらゐ、人をして大事をあやまらしむるものは少い。警戒すべきことである。(六一一)

◎アブネルは使をダビデに遣つて、「汝我と契約を爲せ、我力を汝に添へて、イスラエルを悉く汝に歸せしめん」といふと。ダビデは答へて、「善し、我汝と契約をなさん。但し我一つの事を汝に索む。即ち汝來りてわが面を覲する時、先づサウルの女ミカルを携れきたらざれば、我が面を覲するを得じ」というた。ダビデは此の時すでに、多くの妻女を有したに拘らず、それでも尙その最初に娶つたミカルを慕うて、忘るること能はなかつたのは、人情、さもあるべきこととして、聊か同情に値する。東漢の光武が、その姉を家來の宋弘といふ者に嫁せしめたき下心あり。彼に向ひ、「諺にいふ、富んで交を易へ、貴くしては妻を易ゆとは、人情か」と尋ねると、宋弘は答へて、「貧賤の交は忘るべからず、糟糠の妻は堂より下さず」というて、之を拒絶した話がある。どこ迄も糟糠の妻を大事にするといふ心掛は、美はしいものといはねばならぬ。

◎イスラエル人は概ねダビデを推して、王となさんことを求めて居つたに拘らず、アブネルがサウルの子、イシボセテを王となし、強ひて人民を彼に従はせて居つたのを、今は彼自らが轉向して、ダビデをイスラエル全部の王となさんと、企つるに至つたのである。此の如く人の指導者たるものは、自分一箇の去就進退が、直ちに多數人民に影響する所大なることを知つて、それに對する責任を感じねばならぬ。リー將軍が或る朝、雪中を散歩に出掛け、小高い丘にのぼつて振り返つて見ると、その愛兒が父の雪中にのこした足跡を辿りつゝ、ついてくるのを見つけ、「人生は實に此の如きものである。前に行く人の足跡は、後から來る人の辿る所となるのである。」というて嘆息した。私共は別段、指導者などと呼ぶ、柄ではなくとも、その一舉一動が、他人に及ぼす影響の、案外に大なることを考へ、これに善處することを務めねばならぬ。(二七一)

◎ヨアブはアブネルを欺いて、之を刺殺し、己が兄弟アサヘルを報いた。(サム後

二・二三）彼が斯して、ダビデの安全に去り行かしたものは卑怯な話である。畢竟私怨を晴らす爲に、殺人を敢てしたものに過ぎないのである。仇返は加害者と被害者と、雙方を害する。蜂が人を刺せば、その人を傷つくるのみならず、自らその針を失うて、蜜奴となるに類する。」というた人がある。（二二―三二）

◎ダビデは「悲哀の歌」を作つてアブネルを悼み、日の入るまで食物を斷つて、その哀悼の情を表した。民は皆之を見て、満足に覺え、「凡て王の爲す所の事は、皆民の目に善しと見え」とある。斯してダビデの徳は、その人民の敬慕する所となつた。それがやがてイスラエル全民族を安んずる上に、影響する所甚だ多かつたのである。私共はこゝに、神に屬ける聖徒の、人格の力の如何に大なるかを、學ぶことが出来る。（三三―三九）

#### 四 エホバは活く

##### （サムエル後書第四章）

一 サウルの子はアブネルのヘアロンにて死にたるを聞きしかば、其手弱くなりてイスラエルみな憂へたり。ニサウルの子、隊長二人を有てり。其一人をバアナといひ、一人をレカブといふ。ベニヤミンの支派なるベロテ人リンモンの子等なり。其はベロテも亦ベニヤミンの中に數へらるればなり。三昔にベロテ人ギツタイムに逃遁れて、今日にいたるまで彼處に旅人となりて止まる。四 サウルの子ヨナタンに跛足の子一人あり。エズレルよりサウルとヨナタンの事の報いたりし時には五歳なりき。其乳媪かれを抱きて逃れたりしが、急ぎ逃ぐる時、其子墜ちて跛者となれり。其名をメヒボセテといふ。五 ベロテ人リンモンの子レカブとバアナゆきて、日の熱き頃イシボセテの家に行き、イシボセテ午睡し居たり。六 かれら麥を取らんとひて家の中にいりきたり、かれの腹を刺せり。而してレカブとその兄弟バアナ逃げさりぬ。七 彼等が家にいりしとき、イシボセテ

は其寢室にありて床の上に寝たり。かれら即ちこれをうちころし、これを誦りて其首級をとり、終夜アラバの道ゆきて、ハイシボセテの首級をヘアロンにダビデの許に携へたりて、王にいひけるは、汝の生命を求めたる汝の敵サウルの子イシボセテの首を視よ。エホバ今日我主なる王の仇をサウルと其裔に報いたまへりと。九 ダビデ、ベロテ人リンモンの子レカブと其兄弟バアナに答へていひけるは、わが生命を諸の艱難の中に救ひたまひしエホバは生く。一〇 我は嘗て人の我に告げて、視よ、サウルは死ねりと言ひて、自ら我に善き事を傳ふる者と思ひたりしを執へて、之をチクラクに殺し其消息に報いたり。一一 況んや悪人の義人を其家の床の上に殺したるをや。されば我彼の血をながせる罪を汝らに報い、汝らはこの地より絶たざるべけんやと。一二 ダビデ少者に命じければ、少者かれらを殺して其手足を切断し、ヘアロンの池の上に懸けたり。又イシボセテ

の首を取りて、ヘブロンにあるアブネルの墓に葬れ

り。

◎サウルの子イシボセテは、その勇敢なる將軍アブネル一人を力と頼んで居つた所が、そのアブネルが變心して、驢をダビデに通ずることとなり、果は敵の大將ヨアブの手にかゝつて、非業の最期を遂ぐるに及び、全くその據所を失うて、力脱がしたのは、まことに止むを得ないことであつた。これは所謂人頼みの、如何に儂いものかを教へる一事實である。預言者イザヤの言に、「汝ら鼻より息のいでいりする人に倚ることをやめよ。斯るものは何ぞかぞふるに足らん。」(イザ二・二三)とあり。支那の詩人は又、「行路難は山にあらず、水にあらず、唯人情反覆の間にあり」と歌うてゐる。それにつけても私共は、人間以上のものにすがること學ばねばならぬ。即ちいつも變ることなき、慈愛の神に、その據所を見出さねばならぬ。(二一三)

◎ヨナタンの子メビボセテは、イスラエルの王サウルの孫として生れ、稚い間は何彼と行届いた養育をうけて居つたに拘らず、彼が五歳の頃、その父も祖父も、共に戦に敗れて、討死するの不幸を見るに至り、その乳媪が彼を抱いて急ぎ逃るゝ際、取落した爲に一生不治の跛者となつた。跛者は不自由なものである。けれども救主耶蘇は、跛者の最も親切なる友で在し給ふ。すなはち福音書に「跛者はあゆみ」(マタ一一・五)といひ、又、「饗宴を設くる時は、寧ろ貧しき者、不具、跛者、盲人などを招け」(ルカ二四・一三)と、記してあるのは、そのことを意味する。座古愛子は四十年間、ひどいリユーマチスにて、身動きもならない病人ながら、「病みふして、あゆみ得ぬ身の、うれしさよ、道ふみまよふ、憂さしあらねば」と歌うて居る。彼女は耶蘇に救はれたお蔭にて、斯る恵に入ることを得たのである。(四、五)

◎イシボセテは午睡して居る間に、レカブとバアナとの爲に、刺殺された。孔子の弟子の宰予が晝寢て居ると、孔子が見て、「朽ちたる木は雕るべからず、糞土の牆は朽すべからず」というて、之を戒められた。ソロモンの言に、「惰る者よ、汝いづれの時まで臥し息むや。何れの時まで睡りて起きざるや。しばらく臥し、しばらく睡り、手を又きてまた片時やすむ。さらば汝の貧窮は盗人の如くきたり、汝の缺乏は兵士の如くきたるべし。」(箴六・九一一)とあり。私共は、懶惰の生活を營みたくないものである。



◎レカブとバナナとは、不意にイシボセテを襲ひ、その寢室に入つて彼の寢首を搔いた。しかもその首を携へてダビデの許に至り、之を賣らんと試みたのである。彼等は平生イシボセテから信頼を受け、その軍の隊長たる者であつた。それが忽ち寢返をうつて、この擧に出でたのは、淺ましいことといはねばならぬ。荻生徂徠の歌に、「世の中を、わたりくらべて、今ぞ知る、阿波の鳴戸に、波風はなし」とあり。神を敬ふことを知らない人々の心程、頼みがたないものはないのである。(七、八)

◎「わが生命を 諸の艱難の中に救ひたまひしエホバは活く。」とダビデはいうた。彼はあらゆる艱難の中にも、活ける神に倚頼み、その生命を救はれて今日に至つたのである。したがつて彼は何處までも、神の御旨のまにまに、その業を行はんことを覺悟して居つた。他の場合に彼が、「日々到我等の荷をおひたまふ主、われらのすくひの神はほむべきかな。神はしばしば我らを助けたまへる神なり。死よりのがれうるは主エホバに由る。」(詩六八・一九、二〇)又「この苦しむもの叫びたれば、エホバこれを聴き、そ

のすべての患難よりすくひいだしたまへり。」(詩三四・六)などというたのは、同じことを歌うたものである。(九)

◎ダビデは前に、サウルを刎ねたアマレクの一青年が、來つてそのことを告げたのに對し、之を喜ぶかと思ひのほか、反つて彼を殺してその仇を報いた。それと同じ様にこの度は又、イシボセテを殺して恩を仇にむいた、レカブとバナナとを誅戮して、その無辜の血を流した罪を罰したのである。「凡そ人の血を流す者は、人其の血を流さん。其は神の像のごとくに人を造りたまひたればなり。」(創九・六)とは、大洪水直後のノアの時代から、告げ示された所であつた。ダビデはそれを實行して、公平なる審判を行はんと試みたのである。彼はさうした悪虐の手段によつて、イスラエルの王位を篡奪する必要を見なかつた。彼はエホバを待望む者であつたからである。「なんぢら立かへりて静にせば救をえ、平穩にして依頼まば力をうべし。」(イザ三〇・一五)とは、神に信頼する者の態度でなくてはならぬ。(二〇―二二)

五 イスラエルに王となる

(サムエル後書第五章)

一爰にイスラエルの支派咸くヘブロンにきたり、  
ダビデにいたりていひけるは、視よ、我等は汝の骨  
肉なり。二前にサウルが我等の王たりし時にも、汝  
はイスラエルを率ゐて出入する者なりき。而してエ  
ホバ汝に、汝わが民イスラエルを牧養はん。汝イス  
ラエルの君長とならんといひ給へりと。三斯くイス  
ラエルの長老皆ヘブロンにきたり、王に詣りければ、  
ダビデ王ヘブロンにてエホバのまへにかれらと契約  
をたてたり。彼らすなはちダビデに膏を灑いてイス  
ラエルの王となす。四ダビデは王となりし時三十歳  
にして、四十年の間位に在りき。五即ちヘブロン  
にてユダを治むること七年と六箇月、またエルサレ  
ムにてイスラエルとユダを全く治むること三十三年

なり。六茲に王其從者とともにエルサレムに往き、  
其地の居民エブス人を攻めんとす。エブス人ダビデ  
にかたりていひけるは、汝此に入ること能はざるべ  
し。反つて盲者、跛者、汝を追ひはらはんと。是彼  
らダビデ此に入る能はずと思へるなり。七然るにダ  
ビデ、シオンの要害を取れり。是即ちダビデの城邑  
なり。八ダビデ其日いひけるは、誰にても水道にい  
たりてエブス人を撃ち、またダビデの心の惡める跛  
者と盲者を撃つ者は、(首となし長となさん)と。是  
によりて人々盲者と跛者は家に入るべからずといひ  
なせり。九ダビデ其要害に住みて之をダビデの城邑  
と名づけたり。またダビデ、ミロ(城塞)より内の  
四方に建築をなせり。一〇かくてダビデはますく

大に成りゆき、且萬軍の神エホバこれと共にいませ  
り。一ツロの王ヒラム、使者をダビデに遣はして  
香柏および木匠と石工をおくれり。彼らダビデの爲  
に家を建つ。二ダビデ、エホバのかたく己をたて  
てイスラエルの王となしたまへるを曉り、またエホ  
バの其民イスラエルのために其國を興したまひしを  
曉れり。三ダビデ、ヘブロンより來りし後、エル  
サレムの中よりまた妾と妻を納れたれば、男子女子  
またダビデに生る。四エルサレムにて彼に生れた  
る者の名はかくのごとし。シャンマ、シヨバブ、ナ  
タン、ソロモン、一五イアハル、エリシユア、ネバ  
グ、ヤビア、一六エリシヤマ、エリアダ、エリパレ  
テ。一七爰に膏を沃いてダビデをイスラエルの王と  
爲せし事、ヘリシテ人に聞えければ、ヘリシテ人皆  
ダビデを獲んとて上る。ダビデ聞きて要害に下れ  
り。一八ヘリシテ人臻りてレバイムの谷に布き備へ  
たり。一九ダビデ、エホバに問ふていひけるは、我

ヘリシテ人にむかひて上るべきや。汝かれらわが  
手に付したまふや。エホバ、ダビデにいひたまひけ  
るは、上れ、我必らずヘリシテ人を汝の手にわたさ  
ん。二〇ダビデ、バアル・メラジムに至り、彼ら其  
所に撃ちていひけるは、エホバ水の破壊り出づるこ  
とく、我敵をわが前に破壊りたまへりと。是故に其  
所の名をバアル・メラジム(破壊の處)と呼ぶ。二一  
彼處に彼等その偶像を遺てたれば、ダビデと其從者  
これを取りあげたり。二三ヘリシテ人再び上りてレ  
バイムの谷に布き備へたれば、二三ダビデ、エホバ  
に問ふに、エホバいひたまひけるは、上るべからず。  
彼等の後にまはり、ベカの樹の方より彼等を襲へ。  
二四汝ベカの樹の上に進行の音を聞かば、即ち突出づ  
べし。其時にはエホバ汝のまへにいて、ヘリシテ  
人の軍を撃ち給ふべければなりと。二五ダビデ、エ  
ホバのおのれに命じたまひしことくなし、ヘリシテ  
人を撃ちてダバよりガセルにいたる。

◎イスラエルの各支派の代表者はヘブロンに來り、ダビデを戴いて、彼が全イスラエルの王とならんことを求め、「視よ、我等は汝の骨肉なり。前にサウルが我等の王たりし時にも、汝はイスラエルを率ゐて出入する者なりき。而してエホバ汝に、汝わが民イスラエルを牧養はん。汝イスラエルの君長とならんといひ給へり」というたのである。彼等は元來、同じ祖先を有する同胞であつた。即ちヤコブの家族が繁殖して、イスラエルの民族となつたものである。こゝに「我等は汝の骨肉なり」と、各支派の代表者がダビデにいうたのは、その爲であつた。今日日本の國體が又、大きに之と似たところがある。日本の國體は天皇を圓の中心とし、段々その圓が大きくなつて、今日の如くなつたものである。義は君臣、情は父子などいふのは、そのことを意味する。此の如きものは、全く神の攝理の然らしむるところとして、何處までも之を尊重せねばならぬ。之を心靈的に見れば、イスラエルの各支派がダビデを王と仰いだ様に、私共はまた「ダビデの子なる耶蘇」を仰いで、その靈魂上の王とせねばならぬ。彼は「肉によれば、ダビデの裔より生れ、潔き靈によれば、死人の復活により、大能をもて、

神の子と定められ」(ローマ一・三、四)給うた、お方だからである。(二一三)

◎ダビデがゴリアテをたふしたのは、彼が二十歳の頃のこと、それから四五年間宮中にあつてサウルに事へ、次の四五年は又受難の人として、其處此處にさまよひ、三十歳にしてユダの王となり、それから七年と六ヶ月の後、全イスラエルの支配者となつたのである。彼は通計四十年の間、王位にあつたけれども、内、最初の數年間は、たゞユダの支派のみを治めて居つた様に、私共の心靈生活に於ても亦、之と似て、最初の間は耶蘇をして、その心の領土の一部を支配せしむるに止り、他の大部分は、全く彼の支配の外に残しおく如きことが毎度ある。けれどもダビデは後に推されて、イスラエルの全部を支配することとなつた。その如く私共は又、その心をも、生活を、全部耶蘇の支配の下に置き、彼をして私共にある一切のものを、領有せしめ奉らねばならぬ。「わが子よ、彼の心を我に與へよ。」(箴二三・二六)とは、神に私共の心の全部を獻げ、之を其の支配の下におくべきことを、教へられたものである。(四、五)

◎エルサレムはベニヤミンの支派に屬し、ユダの北境に近き要害の地であつたが、そ

の頃までエブス人が其處に割據して、イスラエル人の寄りつくことを許さなかつた。ダビデが其處に攻寄するに當つても、其の人民は「汝此に入ること能はざるべし。反つて盲者、跛者、彼を追ひはらはん」など、大言を吐いて居つたのである。然しながらダビデは遂にエルサレムを陥れ、シオンの要害を取り、此處を都として、全イスラエルに君臨することゝなつたのである。『それ我らの戦争の武器は肉に屬するにあらず。神の前には城砦を破るほどの能力あり。我等はもろもろの論説を破り、神の示教に逆ひて建てたる凡ての櫓を毀ち、凡ての念を虜にして、基督に服はしむ』(コリ後一〇・四、五)と、パウロはいうて居る。私共は神の武器を執つて立ち、悪魔の城塞を陥れ、其處に耶蘇を迎へ入れ、之を彼の住み給ふ所たらしめねばならぬ。すなはち罪に穢れた人の心を潔め、之を主の統治し給ふところとなさねばならぬ。(六一八)

◎ダビデはエルサレムを陥れ、シオンの要害に住みて、之をダビデの邑と名づけた。かくて彼は益々大になりゆき、且萬軍の神エホバ之と偕に在し給うた。そこへッロの王ヒラムは、使者を遣して、香柏および木匠と石工とをおくり來り、彼らはダビデの爲

に家を建てたとある。元來イスラエル人は農牧の民として、都市の建設はその長所でなかつた故、此の場合に於けるヒラムの援助は、大層役に立つた様に見える。古語に、「徳孤ならず、必ず隣あり」とあり。ダビデが神の祝福を受くる頃には、またヒラムの如き理解ある友人が出て來て、之を援助するに至つたのも、別段不思議はないことである。先づ神の國と神の義とを求むる者には、その他の必要なものは、皆彼に加へらるべき御約束だからである。(九一―一二)

◎かくてダビデは、「エホバのかたく己をたてて、イスラエルの王となしたまへるを曉り、またエホバの其の民イスラエルのために、其の國を興したまひしを曉れり」とあり。私共は神の恵と導とを實驗すればするほど、それだけ、己が使命に對する自覺を強くすることが出来る。神に用ひられて、その御業にたづさはつた經驗ある者は、愈々神に用ひられて、更に大なる御業を行ふに至るものである。使徒パウロが、「我はこの福音のために立てられて、宣傳者、使徒、教師となれり。之がために我これらの苦難に遭ふ。されど之を恥とせず。我わが依頼む者を知り、且わが委ねたる者を、か

の日に至るまで、守り得給ふことを確信すればなり」(テモ後一・二一、二二)というたのは、同じ種類の體驗を語つたものである。(一三一―一六)

◎こゝにダビデが兩度ペリシテ人と戦うて、之に打勝つた始末を書いてある。その都度彼は先づ神に祈り、その啓示と能力とを受けて後に、出でて見事に敵の軍勢を打破つたことを見るのである。此の如く私共も亦、外に出て敵に當る前に、先づ内に退いて神に見え、その衷なる人を強くせらるゝ必要がある。畢竟人の前に力がないのは、先づ神の前に力を受けないからである。又公の生活に勝利を得ないのは、密室に神と角力することが足りないからである。なんぢは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉ぢて、隠れたるに在す汝の父に祈れ。さらば隠れたるに見給ふなんぢの父は報い給はん」(マタ六・六)と、耶蘇は教へ給うたのである。(二七一―二五)

### 六 歡 喜 雀 躍

(サムエル後書第六章)

一ダビデ再びイスラエルの選拔の兵士三萬人を悉く集む。ニダビデ起ちて己と共に在る民と共にバアルユダに往きて、神の櫃を其處より昇上らんとす。其櫃はケルビムの上に坐したまふ萬軍のエホバの名をもて呼ばる。三即ち神の櫃を新しき車に載せて、山にあるアビナダブの家より昇ぎいだせり。四アビナダブの子ウザとアヒオ、神の櫃を載せたる其新車を御し、アヒオは櫃のまへにゆけり。五ダビデおよびイスラエルの全家、琴と瑟と鈴と鏡鉢をもちて力を極め、謠を歌ひてエホバのまへに躍躍れり。六彼等がナコンの禾場にいたれる時、ウザ手を神の櫃に伸ばして之を扶へたり。其は牛振りたればなり。七エホバ、ウザにむかひて怒を發し、其誤謬のために彼を其處に撃ちたまひければ、彼そこに神の櫃の傍に死ねり。八エホバ、ウザを撃ちたまひしにゆりて、ダビデ怒り其處をベレヅウザ(ウザ撃ち)と呼べり。其名今日に至る。九其日ダビデ、エ

ホバを畏れていひけるは、エホバの櫃いかに我所にいたるべけんやと。一〇ダビデ、エホバの櫃を己に移してダビデの城邑にいらしむるを好まず。之を轉してガテ人オベデエドムの家にとらしむ。一二エホバの櫃がテ人オベデエドムの家にとること三月なりき。エホバ、オベデエドムと其全家を恵みたまふ。一三エホバ神の櫃のためにオベデエドムの家と其所有を皆恵みたまふといふ事、ダビデ王に聞えければ、ダビデゆきて喜樂をもて神の櫃をオベデエドムの家よりダビデの城邑に昇上れり。一四エホバの櫃を昇者六步行たる時、ダビデ牛と肥えたる者を獻げたり。一五ダビデ力を極めてエホバの前に踊躍れり。時にダビデ布のエホバを着け居たり。一六ダビデおよびイスラエルの全家、歡呼と喇叭の聲をもてエホバの櫃を昇きのぼれり。一七神の櫃ダビデの城邑にいりし時、サウルの女ミカル窓より窺ひて、ダビデ王のエホバのまへに舞躍るを見、其心にダビデを藐視む。

一七人々エホバの櫃を昇入れて、之をダビデが其爲に張りたる天幕の中なる其所に置けり。而してダビデ燔祭をエホバのまへに獻げたり。一八ダビデ燔祭と酬恩祭を獻ぐることを終へし時、萬軍のエホバの名を以て民を祝せり。一九また民の中即ちイスラエルの衆庶の中に、男にも女にも俱にパン一箇、肉一斤、乾葡萄一塊を分ち與へたり。斯くて民皆おのおの其家にかへりぬ。二〇爰にダビデ其家族を祝せんとて歸りしかば、サウルの女ミカル、ダビデを出でむかへていひけるは、イスラエルの王今日如何に

三六  
威光ありしや。自ら遊蕩者の其身を露すが如く、今日其臣僕の婢女のまへに其身を露したまへりと。二一ダビデ、ミカルにいふ、我はエホバのまへに、即ち汝の父よりもまたその全家よりも、我を選びて我をエホバの民イスラエルの首長に命じたまへるエホバのまへに躍れり。二二我は此よりも尙部からん。またみづから賤しと思はん。汝が語へる婢女等とともにありて、我は尊榮をえんと。二三是故にサウルの女ミカルは死ぬる日まで子あらざりき。

◎神の櫃は彼是七十年の間、バアレ・ユダ、すなはちキリアテ・ヤリムにあつた。(サム前七・一) これはユダの區域に屬し、ベニヤミンの西境に近く、エルサレムから西へ八哩ばかりの所であつた。ダビデは今、その神の櫃を、エルサレムに移さんと思ひ立つたのである。この神の櫃といふのは、神が人々の間に住み給ふことを、あらはすものであつた。又後世にいたり、耶蘇が來つて私共に居り給ふことを、暗示するので

あつた。マタイ傳福音書の初には、耶蘇のことを記して、「その名はインマヌエル(神われらと偕に在す)と稱へられん」(マター・二三)とあり。その終には彼の言を記して、「視よ、我は世の終まで、常に汝らと偕に在るなり」(マター二八・二〇)というてある。それにつけても私共は、耶蘇を迎へて、之をその胸の中に宿らしめ、爾來引續き神と偕に居るやうでなくてはならぬ。(二一五)

◎神の櫃は、レビ人の宗族なるコハテの子孫が、之を肩に擔ふべく、それさへ「彼等は聖物に捫るべからず。恐くは死なん」(民四・一五)と戒められて居つた。然るに此の場合には、之を新しき車に載せ、アビナダブの子ウザとアヒオとが、御して進むうち、之を牽く牛が櫃を振つた故、ウザは手を伸して扶へると、神は彼にむかひて怒を發し、之をそこに撃ちたまうて、彼は神の櫃の傍に倒れ死した。その所の名をペレヅウザ(ウザ撃ち)と呼ぶるゝに至つたのは、その爲であつた。これは神を押れ侮るべからざることを、教ふるものであつた。神は愛の父であると共に、又正義の主で在し給ふ。それ故私共は、神を親しみなつかしむと共に、之を敬ひ貴ふことを忘れてはならぬ。

ペーコンの言に、「神の教會は動搖することがあつても、不適當な手を借りて鎮靜すべきでない」とあり。使徒パウロは又、「自ら欺くな、神は侮るべき者にあらず。人の播く所は、その刈る所とならん。」(ガラ六・七) というて居る。私共が神を愛慕するのは善い。けれども之を狎侮る如きあやまちに陥らぬやう、注意したきものである。(六八)

◎こゝに於てダビデは畏れをなし、「エホバの櫃、いかで我が所にいたるべけんや」といひ、しばしが間、之をガテ人オベデ・エドムの家に安置することとなつた。然るにエホバの櫃がオベデ・エドムの家にある三ヶ月の間、神は彼とその全家とを恵み給ひ、目に見えてその一家が繁榮に赴いた。信仰生活には概して隆昌を伴ふものである。足ることを知りて敬虔を守る者は、大なる利益を得るなり(テモ前六・六)とは、かうした場合をいふのである。木曾の山中に、古い徳利を家寶として藏する旅館があり。これは「徳のある所に利がある」道理を教へるものとして、先祖代々傳へ來つたものだ、というて居る。牽強附會の嫌はあれど、また大に面白い所もあるやうに覺えらるゝではないか。(九一一)

◎神はその櫃の故を以て、オベデ・エドムの家とその所有とを恵み給ふことが、ダビデに聞えると、彼は非常に喜び、往いて神の櫃をオベデ・エドムの家より、ダビデの城邑、すなはちエルサレムに昇上らしむることとなつた。永く人の記憶に留れる古い邑々には、それぞれの特色を有つたものが多く。即ちローマは武力を、エルサレムは信仰を、アテネは又、文藝を代表する如き類である」と、チスレーリはいうて居る。しかも其のエルサレムを宗教上の都市として、不朽の感化を世界に及ぼさしめたのは、ダビデが神の櫃をその邑に移したことに、原因するのである。凡そ都市に政治、教育、商業、工業その他百般の設備があつても、も一つその上に宗教がないなら、所謂「佛つくつて魂を入れぬ」ものである。ダビデが神の櫃をエルサレムに移した様に、私共はそれぞれその住む地方に、宗教を持たむことを忘れてはならない。(二二一六)

◎人々はエホバの櫃をエルサレムに移し、之をダビデがその爲に設けた天幕の中に置いた。而してダビデは其處にて、燔祭と酬恩祭とをエホバの前に献げたとある。この

燔祭は聖別を意味するものであつた。(レビ三・一七) その如く私共は身も心も、その一切の所有をも聖別して、神のものとせねばならぬ。酬恩祭は又、感謝を意味するものであつた。(レビ三・一七) それと同じ様に私共は又、凡ての事感謝すべきものである。私共は耶蘇から癩病を癒されながら、御禮もいはずに去り行きたる九人の者に倣ふことなく、歸つてその有難い恵を感謝した、一サマリヤ人に學ぶところがなくてはならぬ。(二七一―一九)

◎ダビデは神の櫃の前に踊つた。その喜に堪へられなかつたからである。彼と偕なる人民も皆、歡呼と喇叭の聲とを以て、喜び勇んで都に上つた。その賑々しい状をミカルが窓から望み、ダビデが櫃の前に踊るのを見て之を藐視んだ。彼女はダビデがその家に歸るのを待受けて、「イスラエルの王、今日如何に威光ありしや。自ら遊蕩者の其の身を露すが如く、今日其の臣僕の婢女のまへに、其の身を露したまへり」といふと、ダビデは答へて、「我はエホバのまへに、即ち汝の父よりも、またその全家よりも、我を選みて、我をエホバの民、イスラエルの首長に命じたまへるエホバのまへに

躍れり」というた。ミカルは勇猛なる武人、威嚴ある王者としてのダビデを慕へども、神の僕としての彼を愛することが出来なかつた。彼女は人の前に上品ふることを知つて、未だ神の前に謙ることを學んでゐなかつたのである。ビリー・ブレーが「ハレルヤ、ハレルヤ」というて、大騒をして神を讚美するのを見て、「騒々しいではないか。もし少し静にせよ。」といふ者があると、答へて、「盥に一ぱいの水がある上に、更に水を注げば溢れるであらう。その如く神は満足れる恵を給うた上に、さらに彌まざる恵を加へ給ふ故、それが溢れて歌となり、讚美となるのは、眞に止むを得ないのである」というた。私共は此うした、歡喜雀躍の宗教的體驗をして居りたきものである。(二〇一―二三)

### 七 ダビデの契約

#### (サムエル後書第七章)

一 王其家に住むに至り、且エホバ其四方の敵を壊り

て、彼を安かならしめ給ひし時、ニ王預言者ナタン



にいひけるは、視よ、我は香柏の家に住む。然れども神の櫃は幔幕の中にあり。三ナタン、王にいひけるは、エホバ汝と共に在せば、往きて凡て汝の心にあるところを爲せ。四其夜エホバの言ナタンに臨みていはく、五往きてわが僕ダビデに言へ、エホバ斯く言ふ。汝わがために我の住むべき家を建てんとするや。六我はイスラエルの子孫をエツプトより導き出せし時より、今日に至るまで、家に住みしことなくして但天幕と幕屋の中に歩み居たり。七我イスラエルの子孫と共に凡て歩める處にて、汝ら何故に我に香柏の家を建てざるやと、わが命じてわが民イスラエルを牧養しめし、イスラエルの士師の一人に一言も語りしことあるや。八然れば汝わが僕ダビデに斯く言ふべし。萬軍のエホバ斯く言ふ、我汝を牧場より取り、羊に隨ふ所より取りて、わが民イスラエルの首長となし、九汝がすべて往くところにて汝と共にあり、汝の諸の敵を汝の前より斷ちさりて、

地の上の大なる者の名の如く、汝に大なる名を得させしめたり。一〇又我わが民イスラエルのために處を定めてかれらを植ゑつけ、彼らをして自己の處に住みて重ねて動くことなからしめたり。一一また惡人昔の如く、またわが民イスラエルの上に士師を立てたる時よりの如く、ふたゝび之を惱ますことなかるべし。我汝の諸の敵をやぶりて汝を安かならしめたり。又エホバ汝に告ぐ、エホバ汝のために家をたてん。一二汝の日の満ちて汝が汝の父祖等と共に寝らん時に、我汝の身より出づる汝の種子を汝の後にたて、其國を堅うせん。一三彼わが名のために家を建てん。我永く其國の位を堅うせん。一四我はかれの父となり、彼はわが子となるべし彼もし迷はば、我人の杖と人の子の鞭を以て之を懲さん。一五されど我の恩恵はわが汝のまへより除きしサウルより離れたることくに、彼よりは離るることあらじ。一六汝の家と汝の國は汝のまへに永く保つべし。汝の位

は永く堅うせらるべし。一七ナタン凡て是等の言のごとく、またすべてこの異象のごとく、ダビデに語りければ、一八ダビデ王入りてエホバの前に坐していひけるは、主エホバよ、我は誰、わが家は何なればか、爾此まで我を導きたまひしや。一九主エホバよ、此はなほ汝の目には少き事なり。汝また僕の家を遙か後の事を語りたまへり。主エホバよ、是は人の法なり。二〇ダビデ此上何を汝に言ふを得ん。其は主エホバ汝僕を知りたまへばなり。二一汝の言のため、また汝の心に隨ひて、汝此諸の大なることを爲し、僕に之をらしめ給ふ。二三故に神エホバよ、爾は大なり。其は我らが凡て耳に聞ける所に依れば、汝の如き者なく、また汝の外に神なければなり。三四地の何れの國か汝の民イスラエルの如くなる。其は神ゆきてかれらを贖ひ、己の民となして大なる名を得たまひ、また彼らの爲に大なる畏るべき事を爲したまへばなり。即ち汝がエツプトより贖

ひ取り給ひし民の前より、國々の人と其諸神を逐拂ひたまへり。二四汝は汝の民イスラエルをかぎりなく汝の民として汝に定めたまへり。エホバよ、汝はかれの神となりたまふ。二五されば神エホバよ、汝が僕と其家につきて語りたまひし言を永く堅うして汝のいひし如く爲したまへ。二六わがはくは永久に汝の名を崇めて、萬軍のエホバはイスラエルの神なりと曰はしめたまへ。わがはくは僕ダビデの家をして汝のまへに堅く立たしめたまへ。二七其は萬軍のエホバ、イスラエルの神よ、汝僕の耳に示して、我汝に家をたてんと言ひたまひたればなり。是故に僕この祈禱を汝に爲す道を心の中に得たり。二八主エホバよ、汝は神なり。汝の言は眞なり。汝の恵を僕に語り給へり。二九願くは僕の家を祝福みて、汝のまへに永く續くことを得させしめたまへ。其は主エホバ汝これを語りたまへばなり。わがはくは汝の祝福によりて僕の家を永く祝福を蒙らしめたまへ。

◎ダビデはその新築した宮殿に居住するに至り、且エホバが四方の敵を壊りて、彼を安らかならしめ給うた時、預言者ナタンに向うていうた。「視よ、我は香柏の家に住む。然れども神の櫃は幔幕の中にあり」と。これは彼が、神の宮を建立したき志のあつたことを、示すものである。彼は後にバビロンの王ネブカデネザルが、壯大なる王宮の上へ歩みつゝ、「此の大なるバビロンは、我が大なる力をもて建て、京城となし、之をもてわが威光を輝かす者ならずや」というて、ひとりよがりをしたのと違ひ、自分ばかり華麗なる宮殿に住んで、神を禮拜する場所は、いつまでも天幕にあるを見るに忍びなかつたのである。今日の私共も亦、自分ばかり氣持よき住宅に住ひ、救世軍の會館、又は基督教の會堂は、不十分な設備のまゝに、見棄て、おく様であつてはならぬ。ウイリアムス監督は、毎月七八百圓の収入のうち、僅かに十五六圓を以て生活し、残の金を貯蓄して、大震災前まで築地にあつた、巨大なる三一教會堂を建設せられたと聞いて居る。私共はもつともつと、神を禮拜し靈魂を救に導く爲の建物に、深切な注意を拂ふやうでなくてはならぬ。(二一三)

◎その夜、神はナタンに啓示を興へて、ダビデに告げしめ給うた中に、ダビデに關し、少くとも三つのことを語り給うた。即ち「萬軍のエホバ斯く言ふ、我汝を牧場より取り、羊に隨ふ所より取りて、わが民イスラエルの首長となし」とは、神の彼に對する召命を語るものである。次に、「汝がすべて往くところにて汝と共にあり」とは、爾來引續き、神から興へられた指導を語るものである。又「汝の諸の敵を汝の前より斷ちさりて、地の上の大なる者の名の如く、汝に大なる名を得さしめたり」とは、その結果としての勝利を告示されたものである。此の如く神の僕たる私共は、第一、神の召に應じ、第二、その指導にしたがひ、第三、その御業に成功を見るやうでなくてはならぬ。これらの點に於て、ダビデが體驗した神の恵は、又私共が銘々その身に味うて居る所でありたい。(四一九)

◎それにも拘らず、神の宮を建つることは、ダビデによつてではなく、その子ソロモンによつて、なさしめようといふのが、神の御旨であつた。その如く偉大なる事業は一代にて完成するものでなく、反つて父祖が夢想し、計畫し、或は僅かに着手した所を、

後世子孫が何代かかつて、漸く成就ぐる場合さへ少くない。こゝにダビデが神の名の爲に建てんと欲した宮を、子のソロモンに至つて、實現し得たのは結構のことである。大將ウイリアム・ブースは、その臨終の枕邊に侍する長子ブラムエルに遺言し、彼の死後速に支那傳道を開始すべきこと、又大に無宿者の爲に盡力すべきことを約束せしめたが、ブラムエルは謹んでその旨をうけ、父の死後、速にこれらのことを事實に行うたのである。父子志を一つにして、共に神の御業を行ふこと、此の如きものは、信仰上の美談と呼ぶことが出来よう。(二〇一—二三)

◎神がダビデの子孫について語り、「汝の家と汝の國は、汝のまへに永く保つべし。汝の位は永く堅うせらるべし。」と仰せられたのは、その子孫が永くイスラエルに君臨すべきことを意味すると同時に、又神の子イエスが彼の裔より出で給ひ、その立て給ふべき心靈上の王國は榮えに榮えて、永遠に至るべきことを、暗示するのである。すなはち後に天の使がマリヤに向ひ、「視よ、なんぢ孕りて男子を生まん。其の名を耶蘇と名づくべし。彼は大ならん。至高者の子と稱へられん。また主たる神、これに其の父ダ

ビデの座位をあたへ給へば、ヤコブの家を永遠に治めん。その國は終ることなかるべし。(ルカー・三—三三) といふたのは、それである。實に彼の座位は永遠の座位、彼の國は永遠の國にして、その支配は永遠に至るべきものである。(二四—一六)

◎ダビデは、ナタンを通じて與へられた神の啓示に感奮した。彼はこれらの御言を、ナタンの執成によつて得たものではあれど、それに對する御答は、自分で直ちに、神の御前に申上げた。彼は先づ、「主エホバよ、我は誰、わが家は何なればか、爾此まで我を導きたまひしや」と問ひ、進んで「ダビデ、此の上、何を汝に言ふを得ん。其は主エホバ、汝僕を知りたまへばなり」といふて居る。この「主エホバ、汝僕を知りたまふ」とは、彼が神に對する知己の感をいひあらはしたものである。人が知らうと知るまいと、世間が賛成しようとして反對しようとしてに拘らず、神我を知り給ふとの確信の上、事を行ふ者には力がある。又勇氣が加はり、熱心がともなひ、その結果、不思議な勝利を獲るに至るのである。「人生意氣に感ず、功名誰かまた論ぜんと、昔の人はいふて居る。神と私共との間に、かうした知己の感を有する者は幸福である。(一七一—

◎こゝに記されたダビデの祈の中に、「家」といふ字が、七回までも繰返し用ひられて居る。「ねがはくは僕ダビデの家をして、汝のまへに堅く立たしめたまへ」といひ、「願くは僕の家を祝福みて、汝のまへに永く續くことを得さしめたまへ」などいふ如きは、それである。詩篇に「エホバ家をたて給ふにあらずば、建つる者の勤勞は空しく、エホバ城をまもり給ふにあらずば、衛士のさめをるは徒勞なり」(詩一二七・一)とあり。家も、國も、神を敬ふ信仰の上のうち建てずば、その基礎が堅實なるを得ないものと思はねばならぬ。すなはちヨシユアが、「我と我が家とは共にエホバに事へん」(ヨシニ四・一五)というたのは、この點に於て、最も善き模範を示したものだといはねばならぬ。 (二五―二九)

### 八 隨所の恩寵

#### (サムエル後書第八章)

一 此後ダビデ、ベリシテ人を撃ちて之を服す。ダビデまたベリシテ人の手よりメケアンマをとれり。ニダビデまたモアブを撃ち、彼らをして地に伏さしめ、繩をもて彼らを度れり。即ち二條の繩をもて死者を度り、一條の繩をもて生しおく者を量度る。モアブ人は貢物を納れてダビデの臣僕となれり。三ダビデまたレホアの子なるゾバの王ハダゼルが、ユフラテ河の邊にて其勢を新にせんとて往けるを撃てり。四 而してダビデ彼より騎兵千七百人、歩兵二萬人を取り、またダビデ一百の車の馬を存して、其餘の車馬は皆其筋を切斷り。五 ダマスコのスリヤ人、ゾバの王ハダゼルを援けんとて來りければ、ダビデ、スリア人二萬二千を殺せり。六 而してダビデ、ダマスコのスリアに代官を置きぬ。スリヤ人は貢物を納れてダビデの臣僕となれり。エホバ、ダビデを凡て其往く所にて助け給へり。七 ダビデ、ハダゼルの臣僕等の持てる金の楯を奪ひて、之をエルサレム

に携ち來る。ハダビデ王又ハダゼルの器バタとバロタより、甚だ多くの銅を取れり。九 時にハマテの王トイ、ダビデが、ハダゼルの總の軍を撃破りしを聞きて、「トイ其子ヨラムをダビデ王に遣はし安否を問ひ、かつ視を宣べしむ。其はハダゼル嘗てトイと戰を爲したるに、ダビデ、ハダゼルと戰ひてこれを撃ちやぶりたればなり。ヨラム銀の器と金の器と銅の器を携へ來りければ、一ダビデ王其攻め伏せたる諸の國民の中より取りて納めたる金銀と共に、是等をもエホバに納めたり。二 即ちエドムより、モアブより、アンモンの子孫より、ベリシテ人より、アマレクよりえたる物、及びゾバの王レホアの子ハダゼルより得たる掠取物と共に之を納めたり。三 ダビデ鹽谷にてエドム人一萬八千を撃ちて歸りて名譽を得たり。四 ダビデ、エドムに代官を置けり。即ちエドムの全地に徧く代官を置きて、エドム人は皆ダビデの臣僕となれり。エホ

バ、ダビデを凡て其往くところにて助け給へり。  
一五ダビデ、イスラエルの全地を治め、其民に公道  
と正義を行ふ。一六ゼルヤの子ヨアブは軍の長アヒ  
ルデの子、ヨシヤパテは史官、一七アヒトブの子ザ

ドクとアピヤタルの子アヒメレクは祭司、セラヤは  
書記官、一八エホヤダの子ベナヤはケレテ人および  
ベレテ人の長、ダビデの子等は大臣なりき。

◎神が幼きサムソンに就き、その母に語りて、「彼、ペリシテ人の手より、イスラエル  
を拯ひ始めん。」(士一三・五)と仰せられたのは、既に二百餘年前のことであつた。サム  
ソンは其の啓示の如く、成人の後、ペリシテ人と戦うたけれども、概していへば、た  
だ一地方に於て、一時的の勝利を得たに止り、遂に壓倒的にその全部を征服するに至  
らなかつた。サウルの時代にも、ペリシテ人との間に、一勝一敗はあつたけれども、  
之を満足に征服することは出来なかつたのである。それをダビデの時に至りて漸く成  
就げたのは、大なる手柄であつた。それと似て私共が罪惡のペリシテ人と戦ふに當  
つても、油断をしないと、いつまでもたゞ、勝つたり負けたりを繰返すのみにて、一生  
物足りない信仰生活をつゞけるやうな恐がある。それ故私共は神の御助により、一

思ひに罪惡の力に打勝ち、所謂潔められた生活を営む者とならねばならぬ。ダビデの  
子なる耶蘇は、私共を助けて、能く罪の力に打勝たせ給ふお方である。彼は己に頼り  
て神にきたる者のために、執成をなさんとて常に生くれば、之を全く救ふことを得給  
ふなり」(ヘブ七・二五)とあるのは、その謂ではないか。(一)

◎ダビデは又モアブを撃ち、「彼らをして地に伏さしめ、二條の繩をもて死す者を度り、  
一條の繩をもて生しおく者を量度つた」といふのは、その人民の三分の二を殺し、三  
分の一を生かしおいたといふ意味であらう。何故ダビデが斯く多數の人々を殺害した  
か、といふことに就き、傳説によれば、ダビデが前に、その父母をモアブの王に託し  
た際、(サム前二・三、四)モアブ人はその信任を裏切り、之を殺害した故、彼はその仇を  
報いたのだ、といふのであれど、その確實なることを知る由がない。いづれにもせ  
よ、ダビデがモアブ人を二分し、一方を殺して一方を生かしおいただけは、間違がな  
い。それと同じ様に、人の子がその榮光をもて、もろもろの御使を率ゐさたる時には、  
その榮光の座位に坐し、その前に諸の國人をあつめ、之を別つこと牧羊者が羊と山

羊とを別つ如くして、之に審判を宣告し、一方は世の創より彼等の爲に備へられた國を嗣がしめ、他方は又、惡魔とその使等との爲に備へられたる、永久の火に入らしめ給ふのである。(マタ二五・三一―四六) 私共は豫々罪より救はれて、潔く生くる者となり、大なる審判の日に、憚らず御前に立ち得る用意を、とのへて居らねばならぬ。(二一四)

◎こゝに「エホバ、ダビデを凡て其の往く所にて助け給へり」といふ句を、二度までも繰返されて居る。(六、一四) 神は在さざる所なく、都市にも、農村にも、工場にも、商店にも、宮殿にも、茅屋にも、山にも、海にも、野にも、岡にも、何處にても私共をかへりみ、守り給ふお方である。ブラザー・ローレンスは、この間まで枯木の如く見えたる樹林が、急に新緑に變つて居るのを見て「これは神の力である。神まことに此處に在す」と、森の中で感じ。それから以來、神はいづこにも、在さざる所なきことを現實に體驗し、所謂「神の御前に生くる生活」をつゞくる聖徒となつた。ダビデを凡て其の往く所にて助け給うた神は、又私共に隨所の恵を與へ給ふお方である。その御名に榮あれ。(五、六)

◎ダビデは頻りに戦に勝ち、金銀銅の器など多くの掠取物を得て、之をエホバに納めた。それが後にソロモンの時代に至り、宏壯なる神の宮を建設する場合に、大なる助となつたのは想像に難くない。地とそれに充つるもの、世界とその中にすむものは、皆エホバのものなり(詩二四・一)とあり。私共はその神から與へられたる物資を、今一度神に獻げ、その御用の爲に使うて頂かねばならぬ。身を神に獻げたといふ者は、又その所有を神に獻げねばならぬ。私共は古の聖き女たちと共に、「其の財産をもて」(ルカ八・二三) 耶蘇に事ふべきものである。(七一―一二)

◎鹽の谷といふのは、死海の南にあたる地方であつた。ダビデはその鹽の谷にて「エドム人一萬八千を撃ちて、歸りて名譽を得たり」とあり。昔から多くの人々は、たゞこの「名譽」を得たい爲に憂身を賣して居るのである。しかも其の實、この世の名譽は案外あてにならないものである。名譽は影法師の如く、或時は大きく、或時は小さく、或時は現れ、或時は隠れる。」と或人がいうたのは、眞實のことである。それ故

私共は、浮いた一時の名譽を求むることをやめて、神よりの名譽を求めたきものである。使徒パウロの言に、「我は汝らに審かれ、或は人の審判によりて審かるゝことを最小き事とし、また自らも己を審かず。我みづから責むべき所あるを覺えねど、之に由りて義とせらるゝ事なければなり。我を審きたまふ者は主なり。」(コリ前四・三、四)というてある。戒しむる所がなくてはならぬ。(一三、一四)

◎「ダビデはイスラエルの全地を治め、其の民に公道と正義を行つた」とあり。彼が如何に善政をその民に行つたかを、察することが出来る。彼は勇敢なる軍人であると共に、又聰明なる政治家であつた。ゴルドン將軍がカルツウムの總督となつて赴任するや、その歓迎會の席上に宣言して、「私は神の御助により、收支決算を正確にするであらう」といひ、それまで盛んに行はれた賄賂の授受を嚴禁し、訴のある者は、何時にても、親展書にて彼に直訴するの便をひらき、頗る公平に政治を執行したのは、この場合に於けるダビデと、似た所があつた様に見える。けれどもそれよりも有難いのは、ダビデの子なる耶蘇が、私共の心に來り、その胸の中を支配し、その生活を統御し、

一切萬事に行届いた政治を行ひ給ふことである。「神の國は汝らの中に在るなり。」(ルカ一七・二一)と彼が宣うたのは、そのことを意味する。所謂聖潔の生活といふのも、その他に出でないのである。(一五一―一八)

### 九 零落したる王孫

#### (サムエル後書第九章)

一爰にダビデいひけるは、サウルの家の遺存れる者尙あるや。我ヨナタンの爲に其人に恩恵をほどこさんと。ニサウルの家の僕なるザバと名づくる者ありければ、かれをダビデの許に召したるに、王かれにいひけるは、汝はザバなるか。彼いふ、僕是なり。三王いひけるは、尙サウルの家の者あるか。我其人に神の恩恵をほどこさんとす。ザバ、王にいひけるは、ヨナタンの子尙あり。跛者なり。四王かれにいひけるは、其人は何處に在るや。ザバ、王にいひけ

るは、ロデバルにてアンミエルの子マキルの家になる。五ダビデ王、人を遣はしてロデバルより、即ちアンミエルの子マキルの家よりかれを携來らしむ。六サウルの子ヨナタンの子なるメヒボセテ、ダビデの所に來り伏して拜せり。ダビデ、メヒボセテといひければ、答へて、僕此にありと曰ふ。七ダビデかれにいひけるは、恐るゝなかれ、我必ず汝の父ヨナタンの爲に恩恵を汝にしめさん。我汝の父サウルの地を悉く汝に復すべし。又汝は恒に我席において

食ふべしと。ハかれ拜して言ひけるは、僕何なればか、汝死にたる犬のごとき我を眷顧たまふ。九王サウルの僕ザバを呼びてこれにいひけるは、凡てサウルとその家の物は、我皆汝の主人の子にあたり。一〇汝と汝の子等と汝の僕、かれのために地を耕へして汝の主人の子に食ふべき食物を取りきたるべし。但し汝の主人の子メヒボセテは恒に我席において食ふべしと。ザバは十五人の子と二十人の僕あり。

二ザバ、王にいひけるは、總て王が主の僕に命じたまひしごとく僕なすべしと。メヒボセテは王の子の一人のごとき、ダビデの席にて食へり。二ニメヒボセテに一人の若き子あり。其名をミカといふ。ザバの家に住める者は皆メヒボセテの僕なりき。三メヒボセテはエルサレムに住みたり。其はかれ恒に王の席にて食ひたればなり。かれは兩の足ともに跛へたる者なり。

◎曩にダビデは自分の住宅を建てると共に、神の宮を建設せんことを思ひ立ち、(サム後七・二)今は又、自分が安樂なる生活を營むと共に、サウルの子孫の没落したのを見出して、救護せんと考へ出したのは甚だ善い。彼はサウルからは敵意を以て扱はれたけれども、ヨナタンからは最も眞實なる友情を以て、遇せられたのである。そこで彼はいうた。「サウルの家は遺存れる者尙あるや。我ヨナタンの爲に其の人に恩恵をほどこさん」と。彼は人から請求せられたのでもなく、又は勧誘をうけたのでもなく、全く自發的に之を案じ出したのであつた。「たふとき人は、たふとき謀略をまうけ、恒に

たふとき事をおこなふ」(イザ三二・八)とは、此の如きをいふのであらう。(二)

◎ダビデは斯して、サウルの家は僕なるザバといふ者を見出し、尙サウルの家は者あるか。我其の人に神の恩恵をほどこさん」というた。ダビデとヨナタンとは、神に誓うて親交をとりかはした仲であつた。我ら二人、ともにエホバの名に誓ひて、願くはエホバ、恒に我と汝のあひだに在し、我が子孫と汝の子孫のあひだに坐せといへり」(サム前二〇・四二)と、ヨナタンがいうたのは、そのことであつた。ダビデはヨナタンとの間の、さうした誓約を記憶し、ヨナタンの子に「神の恩恵をほどこさん」というたのである。箴言に「兄弟よりもたのもしき知己もまたあり」(箴一八・二四)とあり。古い歌には又、「ちちぶれて、袖に涙のかゝるとき、人のこゝろの、奥ぞしらるゝ」とあるのも思ひ合されて、いとも床しいことに覺えらるゝ。(二、三)

◎ヨナタンの子メヒボセテは跛者であつた。これは幼い時、乳母が抱きて敵の手から遁れんとする際、取落して足を挫いた爲に、斯なつたのである。(サム後四・四)彼は兩足ともに萎えて居た故、自分でもその不運を嘆き、自ら「死にたる犬のごとき我」とい



うて居つた。さうした不具者を、一國の王たるダビデが尋ねて、親切をしようといふのは、想像にも及ばぬ幸運がめぐり來つたものである。然しながら又考へて見れば、神は之と似たやうな親切を以て、私共を待ち給ふのである。私共は神の前に罪を犯し、「惱める者、憐むべき者、貧しき者、盲目なる者、裸なる者」(黙三・一七)であつたのを、神は尋ね出して、凡ての罪と禍との中から救ひ、その子供として情をかけ給ふこととなつたのである。此の小さき者の一人の亡ぶるは、天にいます汝らの父の御意にあらず。(マタ一八・一四)又「神は凡ての人の救はれて、眞理を悟るに至らんことを欲し給ふ。(テモ前二・四)とあるのは、それである。諺に「不具の子ほど尙可愛い」とあり。神は不具の子を有つた親の心にて、罪人なる私共を憐みいつくしみ給ふのである。(四、五)

◎「親は守の神。」又「親の恩と水の恩は送られぬ。」などいふことがある。メビボセテは父のヨナタンが、ダビデに親切をしておいたお蔭で、ダビデから、あらゆる行届いた世話を受くることとなつたのである。林檎の苗木を植ゑる老人を見て、「今更そんな

ものを植ゑたかというて、あなたはその木に結ぶ果をたべる見込はないであらう」といふ者があると、老人は答へて、「それはわかりきつたことである。けれども私は、親父が植ゑておいた林檎の果を食うた代に、私が植ゑた林檎の木から、又私の子孫がその果を食ふことを望むのである。」というたさうである。所謂「他の人々さきに勞し、汝らはその勞を收むるなり」(ヨハ四・三八)とは、そのことである。私共は先に往いた人々から、受くる恩澤の廣大なるを思ふにつけても、また後から來る人々に祝福を遺すやう、其のために、貢獻する所がなくてはならぬ。(六一八)

◎ダビデはメビボセテの爲に、彼の祖父サウルの有つた土地を、残らず返し與へた。然しながら斯して折角ダビデが與へた廣い土地も、あまり多くメビボセテ自分の爲にならぬので、反つてその僕チバの十五人の子、二十人の僕等をはじめとし、多くの寄寓者の食祿となつてしまつたやうである。貨財増せばこれを食む者も増すなり。その所有主は唯目にこれを見るのみ、其の外に何の益かあらん。(傳五・一一)とは、眞實のことである。それを思へば、ヘブル書の記者が、「金を愛することなく、有てるものを以

て足れりとせよ(ヘブ一三・五)と戒めたのは、尤も千萬のことである。(九、一〇)

◎メビボセテは兩足萎えた、見る影もなき不具者であつたに拘らず、威權赫耀たるダ

ビデ王の前にあり。常に彼とその食卓を共にする榮譽を與へられた。耶蘇の御教に、

「天國は己が子のために婚筵を設くる王のごとし」(マタ二二・二)とあり。王が僕を出し

て客を婚宴の席に招く如く、神はその僕等を各方面に派遣して、恩恵にあづかるべき

人々を召してゐ給ふのであれど、その割合には、之に聽き従ふ者が少いと、御譬で

ある。私共は素直に神の御招に應じ、定められた禮服、即ち「耶蘇基督を衣て」(ロマ

一三・一四)之に列席せねばならぬ。そは「招かるゝ者は多かれど、選ばるゝ者は少し」

(マタ二二・一四)と、戒められて居るからである。(二二・一三)

### 一〇 疑心暗鬼を生ず

#### (サムエル後書第十章)

一 此後アンモンの子孫の王死にて、其子ハモン之に

代りて位に即く。ニダビデ我ナハシの子ハモンに、

その父の我に恩恵を示せしごとく恩恵を示さんとい

ひて、ダビデかれを其父の故によりて慰めんとて其

僕を遣はせり。ダビデの僕アンモンの子孫の地に

たるに、ミアンモンの子孫の諸伯其主ハモンにいひ

けるは、ダビデ慰者を汝に遣はしたるによりて、

彼汝の父を崇むと汝の目に見ゆるや。ダビデ此城邑

を窺ひ、これを探りて陥れんために、其僕を汝に

遣はせるにあらずや。四是においてハモン、ダビデ

の僕を執へ、其鬚の半を剃り落し、其衣服を中より

斷ちて股までにしてこれを歸せり。五人々これをダ

ビデに告げければ、ダビデ人を遣はしてかれらを迎

へしむ。其人々大に恥ぢたればなり。即ち王いふ、

汝ら鬚の長びるまでエリコに止まりて然るのち歸る

べしと。六アンモンの子孫自己のダビデに惡まるゝ

を見しかば、アンモンの子孫己を遣はしてベテレホ

アのスリア人とゾバのスリア人の歩兵二萬人、およ

びマアカの王より一千人、トアの人より一萬二千人

を雇ひいれたり。セダビデ聞きてヨアブと勇士の惣

軍を遣はせり。ハアンモンの子孫出て門の入口に軍

の陣列をなしたり。ゾバとレホアのスリア人および

トアの人とマアカの人は別に野に居れり。九ヨアブ

戰の前後より己に向ふを見てイスラエルの選抜の

兵の中を選みて、これをスリア人に對ひて備へし

め、一〇其餘の民をばその兄弟アビシヤイの手に交

して、アンモンの子孫に向ひて備へしめて、一一い

ひけるは、若スリア人我に手強からは、汝我を助け

よ。若アンモンの子孫汝に手剛からは、我ゆきて汝

をたすけん。一二汝勇ましくなれよ。我ら民のため

と、われらの神の諸邑のために勇しく爲さん。願は

くはエホバ其目によしと見ゆるところをなしたま

へ。一三ヨアブ己と共に在る民と共に、スリア人に

むかひて戰はんとて近づきければ、スリア人彼の前

より逃げたり。一四アンモンの子孫スリア人の逃げ

たるを見て、亦自己等もアビシヤイのまへより逃げ

て城邑にいりぬ。ヨアアすなはちアンモンの子孫の所より還りてエルサレムにいたる。一五スリア人其イスラエルのまへに敗れたるを見て俱にあつまれり。一六ハダゼル、人をやりて河の河岸に在るスリア人を將ぬ出だして、皆へラムに來らしむ。ハダゼル軍の長シヨバクかれら率ゐたり。一七其事ダビデに聞えければ、彼イスラエルを悉く集めてヨルダンを渡りてへラムに來れり。スリア人ダビ

六二  
デに向ひて備へ、之と戦ふ。一八スリア人イスラエルのまへより逃げければ、ダビデ、スリアの兵車の人七百、騎兵四萬を殺し、又其軍の長シヨバクを撃ちて、之を其所に死なしめたり。一九ハダゼルの臣なる王等、其イスラエルのまへに壞れたるを見て、イスラエルと平和をなして之に事へたり。斯くスリア人は恐れて再びアンモンの子孫を助くることをせざりき。

◎「聖なる物を犬に與ふな。また眞珠を豚の前に投ぐな」(マタ七・六)とあり。ダビデはアンモンの王ナハシから、若干の恩義をうけたこともあるので、その死を聞いて使者を遣り、其の子ハヌンを慰めんとこゝろみたるに、アンモンの諸伯は之を誤解し、その國を偵察する爲に使者を遣つたものゝ如く取違へて、之に侮辱を加へることゝなつた。ホール監督の言に、「悪人は善人を理解することが出来ない。これは自らを標準として、他人をはかるからである。」というたのは、眞實の事である。この場合に於けるダビデは、全く聖なる物を犬に與へ、又眞珠を豚の前に投げる者と、なり了つたのである。

る。之を信仰生活の上からいへば、私共は又屢々神の厚き恩恵を呪詛の如く誤解し、其の行届いた親切を無慈悲な取扱の如く取違へ、愚痴をこぼしたり、反抗したりしてのみ、居るやうなことがある。警むべきことではないか。(二一三)

◎アンモンの子孫の王ハヌンは、ダビデの僕を執へ、其の鬚の半を剃り落し、其の衣服を中より斷ちて、股までにしてこれを歸した。當時イスラエル人の風習として、鬚を半剃り落されることは、或る場合には首を刎ねらるるよりも、つらい侮辱であつた。それ故ダビデが人を遣して、彼等を迎へしめ、鬚の長びるまでエリコに止まり、然る後歸り來るべき取計をしたのは、思ひやりある處置といはねばならない。アレキサンダーの肖像を描いた畫家があり、その頬にある痣を隠さん爲に、彼が頬杖ついて、その指が丁度痣を押へた所を、描いたといふことである。人の缺點弱點は、之を摘發して恥をかゝす代に、成るたけ之を蔽ひ隠し、其の人を庇護する様に、心掛けたいものである。(四、五)

◎アンモンの子孫は疑心暗鬼を生じた結果、其の必要もないのに、ダビデに戦を挑

んだことになり、所謂敵をついて蛇を出すの愚を、演ずるに至つたのである。彼等は自分たちの中から軍勢を繰出したのみか、スリアの歩兵を多数雇ひ入れて、イスラエル人と戦はしむることとなつた。耶蘇は後に羊と牧羊者との譬を語り、「牧者ならず、羊も己がものならね雇人は、豺狼のきたるを見れば羊を棄てて逃ぐ。彼は雇人にてその羊を顧みぬ故なり。」(ヨハ一〇・一二、一三)と仰せられた。雇はれた兵が、まさかの時に、あまり役に立たないのも亦、同じ道理である。それ故使徒パウロは、その若き弟子なるテモテに向ひて、「汝、基督耶蘇のよき兵卒として、我とともに苦難を忍べ。」(テモ後二・三)というて居る。私共は基督の軍隊に於ける精兵たらんことを心掛けねばならぬ。救の御軍は雇入れた兵卒などの、能く戦ひ得べき戦争ではないのである。(六) ◎イスラエル軍の大將ヨアブは、兵を二隊に分け、自ら一隊を率ゐてスリア人に向ひ、その兄弟アビシヤイをして、他の一隊を率ゐてアンモンの子孫に向はしめた。而して彼はいうたのである。「若しスリア人我に手強からば、汝我を助けよ。若しアンモンの子孫、汝に手剛からば、我ゆきて汝をたすけん」と。基督の軍隊に於ても亦此の如く、

お互の間に、いつもかうした連絡があり、統制があり、互に助け、互に勵ますやうでなくてはならぬ。基督に屬ける私共は、一つ體から接續する多くの肢の如きものである。したがつてお互の間には、「もし一つの肢苦しまば、もろもろの肢ともに苦しむ、一つの肢尊ばれなば、もろもろの肢ともに喜ぶ」(コリ前一二・二六)くらゐの、關係がなくてはならぬ。ヨアブは又いうた。「汝勇ましくなれよ。我ら民のためと、われらの神の諸邑のために、勇しく爲さん。願くはエホバ、其の目によしと見ゆるところをなしたまへ」と。彼等は名の爲にあらず、利の爲にあらず、その民と諸邑との爲に戦うたのである。しかも彼等が、其の全力を盡して戦うた結果は、之を神に委せ奉らうといふのである。所謂「人事を盡して天命を待つ」といふのは、ヨアブがこの場合に於ける態度であつた。(七一・二二)

◎スリア人なる雇兵は、もとよりイスラエルの選抜の兵に抵抗し得べき筈もなく、敵の近づくを見て、直ちに潰え去ると、それを見たアンモンの子孫までが亦、同じく總崩れになり、逃れてその邑に入つた。諺に、「狂人が走れば不狂人も走る」といふ如く、

悪しき模範は人を害ふものである。殊に多数の人々の集合したやうな場合には、所謂  
群衆心理に驅られて、愈々その間違を大きくするものである。箴言に、「邪曲なる者の  
途に入るることなかれ。悪しき者の路をあゆむこと勿れ。これを避けよ、過ぐること勿  
れ。離れて去れ」(箴四・一四、一五)とあり。私共は悪しき模範の爲に身をあやまることな  
きやう、慎しみ戒むべき必要がある。(一三、一四)

◎スリア人はハダゼルの指導の下に、今一度勢揃をしてイスラエル人と戦ひ、大敗  
の結果、イスラエル人と平和をなし、之に事ふることとなり、最早再びアンモンの子  
孫を助くることも出来なくなつた。斯して神がアブラハム、(創一五・一八)ヨシユア(ヨシ  
一・四)の昔から約束し給うた如く、イスラエルは追々榮えて、遂にユーフラテ河まで  
を領有することとなつたのである。此の如く神は、その約束し給うた所を忠實に果し  
給ふお方である。それ故へブル書の記者は、「また約束し給ひし者は忠實なれば、我ら  
言ひあらはす所の望を動かさずして堅く守り、互に相顧み、愛と善き業とを勵まし、  
集會をやむる或人の習慣の如くせず、互に勧め合ひ、かの日いよいよ近づくを見て、

ますます斯の如くすべし。」(ヘブ一〇・二三―二五) とうて居る。私共は神の約束に依頼  
み、それを力に毎日を過したきものである。(二五―二九)

### 一一 ダビデの大罪

#### (サムエル後書第十一章)

一年歸へりて王等の戦に出づる時に及びて、ダビ  
デ、ヨアアおよび自己の臣僕並にイスラエルの全軍  
を遣はせり。彼等アンモンの子孫を滅してラバを圍  
めり。されどダビデはエルサレムに止りぬ。二爰に夕  
暮にダビデ其床より興きいて、王の家の家蓋より  
一人の婦人の體をあらふを見たり。其婦は觀るに甚  
だ美し。三ダビデ人を遣して婦人を探らしめしに、  
或人いふ、此はエリアムの女バテシバにて、ヘテ人  
ウリヤの妻なるにあらずやと。四ダビデ乃ち使者を  
遣はして其婦を取る。婦彼に來りて彼婦と寝たり。

しかして婦其不潔を清めて家に歸りぬ。五かくて婦  
孕みければ、人をつかはしてダビデに告げていひけ  
るは、我子を孕めりと。六是においてダビデ、人を  
ヨアアにつかはしてヘテ人ウリヤを我に遣はせとい  
ひければ、ヨアア、ウリヤをダビデに遣はせり。七  
ウリヤ、ダビデにいたりしかば、ダビデこれにヨア  
アの如何なると、民の如何なると、戰爭の如何なる  
を問ふ。八しかしてダビデ、ウリヤにいひけるは、  
汝の家に下りて足を洗へと。ウリヤ玉の家を出づる  
に、王の贈物其後に從ひて來る。九然れどウリヤ

は王の家の門に其主の僕等とともに寝れて、己の家  
にくだり至らず。二〇人々々ダビデに告げて、ウリヤ  
其家にくだり至らずといひければ、ダビデ、ウリヤ  
にいひけるは、汝は旅路をなして來れるにあらずや。  
何故に自己の家にくだらざるや。一ウリヤ、ダビ  
デにいひけるは、概とイスラエルとユダは小屋の中  
に住まり、我主ヨアブと我主の僕は野の表に陣を取  
るに、我いかてわが家にゆきて食ひ飲し、また妻と  
寝べけんや。汝は生く、また汝の靈魂は活く、我此  
事をなさじ。二二ダビデ、ウリヤにいふ、今日も此  
にとどまれ。明日我汝を去らしめんと。ウリヤ其日  
と、次の日エルサレムにとどまりしが、一三ダビデ  
彼を召して其まへに食ひ飲みせしめ、ダビデ彼を醉  
はしめたり。晩にいたりて彼出て、其床に其主の僕  
と共に寝たり。されどおのれの家にはくだりゆかさ  
りき。一四朝におよびてダビデ、ヨアブへの書を認  
めて、之をウリヤの手によりて遣れり。一五ダビデ

六八  
其書に書していはく、汝らウリヤを烈しき戦の先  
鋒にいだして、かれの後より退きて彼をして戦死せ  
しめよ。一六是においてヨアブ城邑を窺ひて、ウリ  
ヤをば其勇士の居ると知る所に置けり。一七城邑の  
人出てヨアブと戦ひしかば、ダビデの僕の中の數人  
仆れ、へて人ウリヤも死ねり。一八ヨアブ人を遣は  
して軍の事を悉くダビデに告げしむ。一九ヨアブ  
其使者に命じていひけるは、汝が軍の事を皆王に語  
り終へしとき。二〇王もし怒りを發して汝に、汝ら  
なんぞ戦はんとて城邑に近づきしや。汝らは彼らが  
石塔の上より射ることを知らざりしや。二一エルベ  
セテの子アビメレクを撃ちし者は誰なるや。一人の  
婦が石塔の上より磨の上石を投げて彼をテベツに殺  
せしにあらずや。何ぞ汝ら城垣に近づきしやと言は  
ば、汝言ふべし。汝の僕へて人ウリヤもまた死りと。  
二三使者ゆきてダビデにいたり、ヨアブが遣はした  
るところのことをことごとく告げたり。二三使者ダ

ビデにいひけるは、敵我等に手強かりしが、城外に  
いて我等にいたりしかば、我等これに迫りて門の  
入口にまで至れり。二四時に射手の者城垣の上より  
汝の僕を射たりければ、王の僕の或者死に、亦汝の  
僕へて人ウリヤも死ねりと。二五ダビデ使者にいひ  
けるは、斯汝ヨアブに言ふべし。此事を憂ふるなか  
れ。刀劍は此をも彼をも同じく殺すなり。強く城邑

を攻めて戦ひ、之を陥るべしと。汝かくヨアブを  
勵ますべし。二六ウリヤの妻、其夫ウリヤの死にた  
るを聞きて夫のために悲哀めり。二七其喪の過ぎし  
時、ダビデ人を遣はして彼を己の家に召しいる。彼  
すなはちその妻となりて、男子を生めり。但しダビ  
デの爲したる此事はエホバの目に悪しかりき。

◎情慾の情慾はおのれの身を殺す。是はその手を肯て働かせざればなり。(箴二二・二五)  
とあり。ダビデは、自ら陣頭に立つて戦ふ代に宮殿の中に安居し、國務にいそしむべ  
き時間に惰眠を貪り、極めて弛緩した心靈状態で、夕方屋上を散歩しつゝ、一人の美  
人が身體を洗ふのを高い所から見て心動き、それが人妻であることを聞いても尙、そ  
の肉慾の惑を退くること能はず、遂に彼女を召して、之に戯るゝに至つたといふの  
は、全く心外千萬のことである。かくのごとく、人は、どれ程高い恩惠の經驗に入つ  
たかというて、なほ墮落の危険は去らない故、ちよつとも油斷することは出来ない。

「なんぢら誘惑に陥らぬやう目を覺し、かつ祈れ。」(マル一四・三八)と、耶蘇がその弟子をいましめ給うたのは、いかにも尤のことである。(二一五)

◎ダビデはウリヤの妻を弄んだ後、その罪跡を葬らん爲に、ウリヤを出征先より呼び戻し、數日その家に起臥せしめんとしたけれども、果さなかつた。ウリヤは極めて敬虔なる、誠忠の人であつた。神の櫃も、イスラエルの人民も、小屋の中に住まり、將軍ヨアブも、その軍人も、陣中に寢起をして居るのに、我のみいかで家に歸つて飲食し、又その妻と起居を共にすべき筈があらうかと、彼はその家に歸ることを辭して、王宮の門番小屋に宿泊した。日本の昔の武士が、「家を出ては妻子を忘れ、戰に臨んではその身を忘れる」というたのは、そのまゝ當年の、ウリヤの覺悟であつたやうに見える。彼は義理がたき愛國者、又その職分に忠實なる武人であつた。(六一〇)

◎ダビデはウリヤをもてなし、之を酒に酔はしめて、その堅固なる精神を挫かうと試みたけれども、及ばなかつた。神代から、だます工夫は酒がいにり。又「酒が内に入れば、智慧が外に逃れる」などいふこともあり。東西古今を通じて、酒くらゐ人の正し

き判断をあやまらせ、又人を多くの邪惡に至らしむるものはない。酒は理性をくらまして罪を犯さしめる。しかも理性を盗むは、金を盗むよりも惡しく、人を罪におとすは、之を他の如何なる禍におとすよりも惡しい」というた人がある。神の御旨になうて、生き甲斐ある生活を營まんと欲する者は、何はさておき、先づ酒を遠ざくべき必要がある。(二三)

◎こゝに於てダビデは、書を將軍ヨアブに贈り、ウリヤを激しき戰の先鋒に立たせ、之を討死せしむるやう仕向けたのである。諺に、「地獄に通ずる階段は、一步踏みあやまれば、どん底まで落ちるやうに、出來て居る」とあり。ダビデの淫行は彼をして殺人罪を企てしめ、忠勇無二のウリヤの如き人物を殺害するに至らしめた。どういふ不仁、不道、残忍、惡虐な所業であらう。「なんぢの心を淫婦の道にかたむくること勿れ。またこれが徑に迷ふこと勿れ。そは彼は多くの人を傷つけて仆せり。彼に殺されたる者ぞ多かる。その家は陰府の途にして死の室に下りゆく。」(箴七・二五—二七)又「慾孕みて罪を生み、罪成りて死を生む。」(ヤコー・一五)というてある。それにつけても、罪

悪は殊にその初を憤むことが、極めて大事である。(二四一七)

◎ダビデの罪悪は、ヨアブをその共犯者たらしめ、又ウリヤを亡き者にせん爲に、他に幾人かの軍人をも死地に陥れ、彼と共に討死せしむることとなつた。すなはちウリヤとその一隊の軍人とは、殊更に敵の勇士の居る所に押寄せ、その射手のために射殺さるゝよう、仕向けられたのである。或人の言に、「罪は好ましからぬ旅客である。その泊つた家に火を放ける」とあり。しかもその火は、あたり近所を悉く焼き盡さずには、やまない業火である。「視よ、いかに小き火の、いかに大なる林を燃すかを。(ヤコ三・五) 世に罪悪ほど懼るべく、厭ふべく、又憎むべき、危険なものは、他にないのである。(二八一二五)

◎ダビデは間もなく、ウリヤの妻バテシバをいれて、之と結婚した。美しき婦のつゝしみなきは、金の環の豕の鼻にあるが如し。(箴一一・二二) ダビデもダビデなら、バテシバもバテシバであつたと、いはねばならない。こゝに「但しダビデの爲したる此の事は、エホバの目に悪しかりき」とあり。いくら王の權威をふるうて、肉慾をほしい

まゝにしたかというて、神の怒がその上にある限は、決して眞に幸福であり得ないのは、いふまでもないことである。婦と姦淫をおこなふ者は智慧なきなり。之を行ふ者はおのれの靈魂を亡し、傷と凌辱とをうけて、其の恥を雪ぐこと能はず。(箴六・三二、三三) とあるのは、そのことをいうたものである。(二六、二七)

### 一二 直言の人ナタン

#### (サムエル後書第十二章)

→エホバ、ナタンをダビデに遣はしたまへば、彼ダビデに至りてこれにいひけるは、一の邑に二箇の人あり。一は富みて一は貧し。二其富者は甚だ多くの羊と牛を有てり。三されど貧者は唯自己の買ひて育てたる一の小き牝羔の外は何をも有たざりき。其牝羔彼およびかれの子女とともに生長ち、かれの食物を食ひ、かれの椀に飲み、また彼の懷に寝て、

彼には女子の如くなりき。四時に一人の旅人其富る人の許に來りけるが、彼おのれの羊と牛の中を取りて、そのおのれに來れる旅人のために煮るを惜みて、かの貧き人の牝羔を取りて、之をおのれに來れる人のために煮たり。五ダビデ其人の事を大に怒りてナタンにいひけるは、エホバは生く、誠に此をなしたる人は死ぬべきなり。六且彼此事をなしたるに因り、



また憐憫まざりしによりて、其牝羔を四倍になして償ふべし。セナタン、ダビデにいひけるは、汝は其人なり。イスラエルの神エホバ斯くいひ給ふ、我汝に膏を沃いでイスラエルの王となし、我汝をサウルの手より救ひいだし、汝に汝の主人の家をあたへ、汝の主人の諸妻を汝の懐に與へ、またイスラエルとエダの家を汝に與へたり。若し少からば我汝に種々の物を増し加へしならん。九何ぞ汝エホバの言を藐視して、其目のまへに悪をなせしや。汝刀劍をもてテ人ウリヤを殺し、其妻をとりて汝の妻となせり。即ちアンモンの子孫の劍をもて彼を斬殺せり。一〇汝我を輕んじてテ人ウリヤの妻をとり、汝の妻となしたるに因りて、劍何時までも汝の家を離るることなかるべし。一一エホバ斯くいひ給ふ、視よ、我汝の家の中より汝の上に禍を起すべし。我汝の諸妻を汝の目の前に取りて、汝の隣人に與へん。其人此日のまへにて汝の諸妻とともに寝ん。一二其は

汝は密に事をなしたれど、我はイスラエルの衆のまへと日のまへに、此事をなすべければなりと。一三ダビデ、ナタンにいふ、我エホバに罪を犯したり。ナタン、ダビデにいひけるは、エホバまた汝の罪を除き給へり。汝死なざるべし。一四されど汝此所行によりて、エホバの敵に大なる罵る機会を與へたれば、汝に生れし其子必ず死ぬべしと。一五かくてナタン其家にかへれり。爰にエホバ、ウリヤの妻がダビデに生める子を撃ちたまひければ、痛く疾めり。一六ダビデ其子のために神に乞求む。即ちダビデ斷食して入り、終夜地に臥したり。一七ダビデの家の年寄等、彼の傍に立ちてかれを地より起たしめんとせしかども、彼肯せず。又かれらと共に食を爲さざりき。一八第七日に其子死ねり。ダビデの僕、其子の死にたることをダビデに告ぐることを恐れたり。彼らにいひけるは、子の尙生ける間に我等彼に語ひたりしに、彼我等の言を聽きいれざりき。如何ぞ、

彼に其子の死にたるを告ぐべけんや。被害を爲さんと。一九然るにダビデ、其僕の私語くを見て、ダビデ其子の死にたるを曉れり。ダビデ乃ちその僕に子は死にたるやといひければ、彼ら、死ねりといふ。二〇是に於てダビデ地よりおきあがり、身を洗ひ、膏をぬり、其衣服を更へて、エホバの家にいりて拜し、自己の家に至り、求めて自己のために食を備へしめて食へり。二一僕等彼にいひけるは、此の汝がなせる所は何事なるや。汝子の生ける間はこれがために斷食して哭きながら、子の死れる時に汝は起きて食を爲すと。二二ダビデいひけるは、嬰孩の尙生ける間にわが斷食して哭きたるは、我誰かエホバの我を憐れみて、此子を生かしめ給ふを知らんと思ひたればなり。二三されど今死にたれば、我なんぞ斷食すべけんや。我再びかれをかへらしむを得んや。我かれの所に往くべけれど、彼は我の所にかへらざるべし。二四ダビデ其妻バテシバを慰め、かれの所に

いりてかれとともに寝たりければ、彼男子を生めり。ダビデ其名をソロモンと呼ぶ。エホバこれを愛したまひて、二五預言者ナタンを遣はし、其名をエホバの故によりてエデデア(エホバの愛する者)と名づけしめたまふ。二六爰にヨアア、アンモンの子孫のラバを攻めて王城を取れり。二七ヨアア使者をダビデに遣はしていひけるは、我ラバを攻めて水城を取れり。二八されば汝今餘の民を集め、斯城に向ひて陣どりて之を取れ。恐らくは我此城を取りて人我名をもて之を呼ぶに至らんと。二九是においてダビデ民を悉くあつめてラバにゆき、攻めて之を取れり。三〇而してダビデ、アンモン王の冕を其首より取りはなしたり。其金の重は一タラントなり。また寶石を嵌れたり。これをダビデの首に置く。ダビデ其邑の掠取物を甚だ多く持出せり。三一かくてダビデ其中の民を將いだして、これを鋸と鐵の千齒と鐵の斧にて斬り、また瓦陶の中を通行らしめ

たり。彼斯の如くアンモンの子孫の凡ての城邑にな

セリ。しかしてダビデと民は皆エルサレムに還りぬ。

◎ナタンは、ダビデから招かるゝのを待たず、神の命のまゝに此方から出かけて、ダビデを警めた。私共も人から招聘せらるゝのを待たず、此方から無遠慮に往いて、神の御言を傳へる熱心を有したきものである。ナタンは譬を設けて、ダビデにその罪惡を説き示した。譬を用ひて眞理を明に教へるのは、好ましきことである。耶蘇も「譬ならでは何事も語り給はず」(マタ一三・三四)といはれ給うた。ダビデはナタンのいふ所をよく理解したけれども、それを己が身に引きあて、考へることをしなかつたのである。彼は「兄弟の目にある塵を見て、おのが目にある梁木を認めぬ」(マタ七・三)者であつた。すなはち彼はナタンが譬の中に語り出でた、強慾非道の富者を嚴罰すべきことを知つて、自分がその當の罪人であることを、心づかなかつたのである。(二一六)

◎ナタンは眞直に目をダビデに注ぎつゝ、「今いうた強慾非道の富者とは、他にあらず。汝はその人なり」と直言した。「富人が多く、の牛羊を所有しながら、貧民のたゞ一匹しか有たない牝羔を奪うて、之を調理し、旅人をもてなしたといふ如く、汝は神からあ

らゆる恩恵と賜物とを、溢るゝまでに頂きながら、尙足ることを知らないで、忠臣ウリヤを殺し、その妻を奪うた。それ故に、何時までも、汝の家を離るることなかるべく、又汝の家の中より、汝の上に禍が起り來るであらう。」と喝破したのである。ナタンは斯して正面からダビデの罪を責めて、その悔改を促したのである。大將ウイリアム・ブースは、私共が世の人を救に導かん爲には、また此の場合のナタンと同じく、眞直に神の眞理を宣傳へて、人々に罪の自覺とその悔改とを促す必要のあることを、論じたのであるが、その一文を読んで感激に堪へず、有望なる裁判官の地位を擲つて、救世軍の士官となり、後、命ぜられて印度に救世軍を開拓したのは、有名なブース・タツカー中將その人であつた。私共は直言の人ナタンの模範に、學ぶ所がなくてはならぬ。(七一二)

◎ダビデは忽ち、己が犯せる罪に責められ、胸をうつて神の前に懺悔し、これが赦を求むることとなつた。詩篇第三十二篇に、「我いひあらはさざりしときは、終日かなしみさけびたるが故に、わが骨ふるひ衰へたり。なんぢの御手は夜も晝もわがうへにあ

りて重し。わが身の潤澤はかはりて夏の旱のごとくなれり。(詩三二・三、四)とあるのも、また同じく第五十一篇に、「われはわが愆をしる。わが罪はつねにわが前にあり。我はなんぢにむかひて、たゞなんぢに罪ををかし、御前にあしきことを行へり。なんぢヒツプをもて我をさよめたまへ、さらばわれ淨まらん。我をあらひたまへ、さらばわれ雪よりも白からん(詩五一・三、四、七)とあるのも、共にその當時、彼が作つた詩であらうといはれて居る。彼は非常な大罪を犯した。それにも拘らず、尙再び起つことを得たわけは、彼が極めて深刻に、衷心からその罪を悔いて、神の赦を求めた爲であつた。(二三、一四)

◎ダビデは嬰兒の病苦になやむ間は、斷食して入り、終夜地に臥して、只管に神の癒を求めて居つたが、嬰兒が愈々死んだと聞かや、起ち上つて身を洗ひ、衣服を更へてエホバを拜し、家に歸つて食卓に就いた。彼は及ばぬまでもその願を神に訴へて居つたが、それと共に、愈々の場合になつては、一切を其の御旨に委ねて、その心を休むべきことを、知つて居つたのである。耶蘇がゲツセマネの園に祈つて、「わが父よ、も

し得べくば此の酒杯を我より過ぎ去らせ給へ。されど我が意の儘にはあらず、御意のままに爲し給へ。(マタ二六・三九)と仰せられた様に、彼も或る程度まで、その大御心を學んで居つた様に見える。斯て後ダビデはいうた。我かれの所に往くべけれど、彼は我の所にかへらざるべし」と。一度死んだ者は、復歸り來らない。けれども私共は互に、やがて彼の世にて再び相見るの機會を有するものである。すなはちダビデが他の場合に、「そは汝、わがたましひを陰府にすておきたまはず。なんぢの聖者を、墓のなかに朽ちしめ給はざる可ければなり。(詩一六・一〇)というたのは、彼の來世に對する希望と信仰とを、歌うたものである。(二五・二三)

◎神はダビデの大なる罪を赦し給ひ、彼はバテシバとの間に一男子を擧げ、その名をソロモン(平和)と呼んだ。神はまた預言者ナタンを彼に遣して、嬰兒の名をエデデア(エホバの愛する者)と名づけしめ給うた。みよ、子輩はエホバのあたへたまふ嗣業にして、胎の實はその報のたまものなり。(詩一二七・三) 神の憐憫は大きく、その愛は限がない。「罪の増すところには恩恵も彌増せり(ロマ五・二〇)とは、ダビデの一生を通じて、私

共に與へらるゝ教訓である。(二四、二五)

◎將軍ヨアブはアンモンの子孫と戦ひ、ラバを攻めてその水源地を略取し、將に本城を陥れんとする前に、使をダビデに遣つて、その自ら來り、之を乗取らんことを求めた。さもなければ、城を陥れた名譽がヨアブに歸して、王のものとはならないことを恐れられたからであつた。昔、趙の貫高は「事成らば王に歸せん。敗るれば獨身にして座せん」といひ。手柄が出来たなら榮譽を王に歸すべく、失敗したなら責を自分で負ふべき覺悟を表白した。この場合に於けるヨアブの精神が、又それと似た所があり、床しいことに覺えらるゝ。今日の私共は、又すべてその爲す所に於て、あらゆる貧乏籤を自分に引いても、凡ての榮光は之を耶蘇に歸し奉らねばならぬ。われはエホバなり。是わが名なり。我はわが榮光をほかの者に與へず。(イザ四二・八)と、神は仰せられて居るのである。(二八一三)

### 一三 不倫の戀

#### (サムエル後書第十三章)

一 此後ダビデの子アサロムにタマルと名づくる美しき妹ありしが、ダビデの子アムノンこれを戀ひたり。ニアムノン心を苦しめて遂に其姉妹タマルのためにわづらへり。其はタマルは處女なりければ、アムノンかれに何事をも爲しがたしと思ひたればなり。三然るにアムノンに一人の朋友あり。ダビデの兄弟シメアの子にして、其名をヨナダブといふ。ヨナダブは甚だ有智き人なり。四彼アムノンにいひけるは、汝王の子、なんぞ日に日に斯く瘡せゆくや。汝我に告げざるや。アムノン彼にいひけるは、我わが兄弟アサロムの妹タマルを戀ふ。五ヨナダブ彼にいひけるは、床に臥して病と伴り、汝の父の來りて汝を見る時、これにいへ。請ふわが妹タマル

をして來りて我に食を與へしめ、わが見て彼の手より食ふことをうる様に、わが目のまへにて食物を調理へしめよと。六アムノンすなはち臥して病と伴りしが、王の來りておのれを見る時、アムノン、王にいひけるは、請ふ吾妹タマルをして、來りてわが目のまへにて二の菓子を作へしめて、我にかれの手より食ふことを得さしめよと。七是においてダビデ、タマルの家にいひつかはしけるは、汝の兄アムノンの家にゆきて、かれのために食物を調理へよと。八タマル其兄アムノンの家にいたるに、アムノンは臥し居たり。タマル乃ち粉をとりて之を搗れて、彼の目のまへにて菓子を作へ、其菓子を焼き、九鍋を取りて彼のまへに傾出たり。然れども彼食ふことを否

めり。しかしてアムノンいひけるは、汝ら皆我を離れていてよと。皆かれをはなれていたり。一〇アムノン、タマルにいひけるは、食物を寢室に持ちきたれ。我汝の手より食はんと。タマル乃ち己の作りたる菓子を取りて寢室に持ちゆきて、其兄アムノンに至る、二タマル彼に食はしめんとて近く持ち至れる時、彼タマルを執へて之にいひけるは、妹よ、來りて我と寝れよ。三タマル彼にいひけるは、否、兄上よ、我を辱しむるなかれ。是のとき事はイスラエルに行はれず。汝此愚なる事をなす可からず。四我は何處に我恥辱を棄てんか。汝はイスラエルの愚人の一人となるべし。されば請ふ王に語れ。彼我を汝に與へざる事なかるべしと。一四然れどもアムノン其言を聽かずして、タマルより力ありければタマルを辱しめてこれと偪に寝たりしが、一五遂にアムノン甚だ深くタマルを惡むにいたる。其かれを惡む所の惡みは、かれを戀ひたるころの戀よ

りも大なり。即ちアムノン彼にいひけるは、起ちて往けよ。一六かれアムノンにいひけるは、我を返して此惡を作るなかれ。是は汝がさきに我になしたる所の惡よりも大なりと。しかれども聽きいれず。一七其側に仕ふる少者を呼びていひけるは、汝この女をわが許より遣りい出して、其後に戸を鍵せと。一八タマル振袖を着たり。王の女等の處女なるものは斯のとき衣服をもて粧ひたり。アムノンの侍者かれを外にいだして其後に戸を鍵せり。一九タマル灰を其首に蒙り、着たる振袖を裂き、手を首にのせて呼はりつゝ去りゆけり。二〇其兄アサロム彼にいひけるは、汝の兄アムノン汝と偪に在りしや。然れど妹よ、黙せよ、彼は汝の兄なり。此事を心に留るなかれと。かくてタマルは其兄アサロムの家に凄しく住み居れり。二一ダビデ王是等の事を悉く聞きて甚だ怒れり。二二アサロムはアムノンにむかひて善きも惡しきも語はざりき。其はアサロム

アムノンを惡みたればなり。是は彼がおのれの妹タマルを辱しめたるに由れり。二三全二年の後アサロム、エフライムの邊なるバアルハヅルにて羊の毛を剪らしめ居て、王の諸子を悉く招けり。二四アサロム王の所にいりていひけるは、視よ、僕羊の毛を剪らしめたる。れがはくは王と王の僕等、僕とともに來りたまへ。二五王アサロムにいひけるは、否わが子よ、我等を皆いたらしむるなかれ。おそらくは汝の費を多くせん。アサロム、ダビデを強ふ。しかれどもダビデ往くことを肯んぜずしてかれを視せり。二六アサロムいひけるは、若し然らずば、請ふわが兄アムノンをして我らとともに來らしめよ。王かれにいひけるは、彼なんぞ汝とともにゆくべけんやと。二七されどアサロムかれを強ひければ、アムノンと王の諸子を皆アサロムとともにゆかしめたり。二八爰にアサロム、其少者等に命じていひけるは、請ふ汝らアムノンの心の酒によ

りて樂む時を視すまして、わが汝等にアムノンを撃てと言ふ時に彼を殺せ。懼るゝなかれ。汝等に之を命じたるは我にあらざや。汝ら勇しく武くなれと。二九アサロムの少者等、アサロムの命ぜし如くアムノンになしければ、王の諸子皆起ちて、各其驛馬に乗りて逃げたり。三〇彼等が路にある時、風聞ダビデにいたりていはく、アサロム王の諸子を悉く殺して一人も遺るものなしと。三一王乃ち起ち、其衣を裂きて地に臥す。其臣僕皆衣を裂きて其傍にたり。三二ダビデの兄弟シメアの子ヨナダア答へていひけるは、吾主よ、王の御子等なる少年を皆殺したりと思ひ給ふ勿れ。アムノン獨り死れるのみ。彼がアサロムの妹タマルを辱かしめたる日よりアサロム此事をさだめおきたるなり。三三されば我主、王よ、王の御子等皆死ねりといひて、此事をおもひ煩ひ給ふなかれ。アムノン獨り死にたるなればなりと。三四斯てアサロムは逃れたり。爰に守望

ぬたる少者、目をあげて視たるに、視よ、山の傍よりして己の後の道より多くの人来れり。三五ヨナダア、王にいひけるは、視よ、王の御子等来る。僕のいへるが如く然りと。三六彼語ることを終へし時、視よ、王の子等來り聲をあげて哭けり。王と其僕等も皆大に甚く哭けり。三七倍アサロムは逃げてゲ

シユルの王アミホデの子タルマイに至る。ダビデは日々其子のために悲めり。三八アサロム逃げてゲシユルにゆき三年彼處に居たり。三九ダビデ王アサロムに逢はんと思ひ煩らふ。其はアムノンは死にたるによりて、ダビデかれの事はあきらめたればなり。

◎ダビデの長子アムノンは、その異母妹なるタマルを戀した。彼が若し信念堅く、道念強き青年であつたなら、そうした不道理なる情熱を抑制することも出来たであらうが、不幸にして彼には、それほど信仰も自制力もなかつた。その上、彼は父ダビデが忠臣ウリヤを殺して、その妻バテシバを奪うたやうな事實を、目前に見て居る故、自らその慾情を克服しようとは試みず、反つて意馬心猿の狂ふがまゝに、とんでもない大間違を惹起すに至つたのである。古い歌に「よこさまに、這うてをしへし、蟹の子に、すぐに這へとは、無理な親蟹」とあり。アムノンの汚行に對しては、彼自らの不心得はいふ迄もなきことながら、父ダビデのそれに對する責任も、また決して輕い

ものではなかつたのである。(二、二二) 八四  
◎「アムノンに一人の朋友あり、其の名をヨナダブといふ。ヨナダブは甚だ有智き人なり」とあり。ヨナダブが若しかしい人であつたとすれば、彼は所謂惡賢い人であつた。彼はアムノンの朋友であつたよりも、事實に於ては寧ろ、彼をそこなふ敵人であつた。ヨナダブはアムノンに入智慧して、巧に妹のタマルを凌辱せしめたばかりか、後には又その爲に、タマルの同母兄なるアサロムが、アムノンに對して殺意を有するのを知りながら、之を默視した。(三二) 此の如きものが若し「朋友」と呼ばるべくば、世に所謂朋友くらゐ、危険なものはない。否、否、此の如き者は朋友ではなくて、仇敵である。羊の皮を被つた狼である。「ほゆる獅子のごとく歴廻りて、呑むべきものを尋ぬる惡魔」(ペテ前五・八)と、見做さるべきものであつた。(三一五) 八五  
◎アムノンはヨナダブから入智慧をされた所にしたがひ、詭計を用ひて妹のタマルを欺き、之を己が病室に呼寄せて、暴行を加へたといふのは、どういふ言語道斷のことであらう。然しながら又考へて見れば、世にはこのアムノンと同じ様に、今も金力

或は權力などを濫用して、無智の少女を玩弄し、凌辱して居る者が、其處此處に見出さるゝのは、奇怪千萬のことである。今金を盗まれた者はまた取戻すことも出来よう。けれども一旦貞操を奪はれたものは、之を回復するに道がない。又一思ひに斬殺されたのは苦しいけれども、それは一時のことだから、まだ優である。しかし乍ら弱き女性を凌辱して、彼女の妻たり母たる特權を褫奪し、之を一生の戮殺にするに至つては、それよりも遙に勝つた殘虐非道の極である。私共はかの人道の敵にして、肉慾の奴隸たる無賴漢の爲に、幾多無垢の女性が、戮殺にせらるゝのを、傍觀してをるわけには行かないのである。(六一一八)

◎タマルは灰を首に蒙り、その着用したる振袖を裂き、手を首にのせて、泣き叫びつゝ、同母兄なるアブサロムの許に歸り、爾來其處に「凄しく住み」居つたといふことである。即ち彼女は、アムノンの情慾の爲に犠牲となり、一生を日蔭物として過したのであつた。ジヨセフイン・バットラーは、一人の少女が輕薄なる一男子の爲に欺かれ、妊娠してのち棄てられて、なさん所を知らず、やがて生れた赤坊を壓殺し、その

爲に入獄の身となつたに拘らず、彼女をしてさうして犯罪をなすに至らしめた男子は、平氣で過して居る状を見て憤慨に堪へず、それらのことが動機となつて、當時英國にあつた十數ヶ所の遊廓を廢止する爲に、獻身的大努力をこゝろむるに至つたのである。それにつけても私共は、弱き女性を保護せねばならぬ。私共は男子のみ理不盡なる不徳行爲を厭てするのを、默視し居るべき筈がないのである。(一九一二二)

◎二年を経て後、アブサロムは羊の毛を剪つた祝宴にことよせ、その異母兄弟を悉く招いて、盛んに之を饗應し、酔のまはつた頃、その若者等をして、アムノンを襲うて之を殺害せしめた。前にナタンが神の御言をダビデに傳へて、「汝我を輕んじて、へテ人ウリヤの妻をとり、汝の妻となしたるに因りて、劍何時までも汝の家を離るゝことなかるべし。」(サム後二二・一〇)というたのは、斯してその最初の實現を見たのである。其の如く罪は蠍と似て、その尾に針を有するものである。罪惡には必ず義罰が伴ふものであれば、私共はそれを記憶して、恐るゝ所がなくてはならぬ。(二三一二九)

◎ダビデはその報知を聞いて、衣を裂き、地に臥した。のみならず以來日々、その爲

に悲しんだとあり。彼はかうした、家庭の悲惨事の責が、主として己にあることを知つて、苦悶したのであらう。あゝ神よ、わがために清き心をつくり、わが衷になほさ霊をあらたにおこしたまへ。われを御前より棄て給ふなかれ。汝のさよき御霊をわれより取り給ふなかれ。なんぢの救のよるこびを我にかへし、自由の御霊をあたへて、我をたもちたまへ。さらばわれ懲ををさせる者になんぢの途ををしへん。罪人はなんぢに歸りきたるべし。(詩五一・一〇—一三)とは、この場合に於ける、彼の衷心からの願であつたらうかと、想像せらるゝ。(三〇—三九)

### 一四 我等は死なざるべからず

#### (サムエル後書第十四章)

一ゼルヤの子ヨアブ、王の心のアサロムに趣くを  
知れり。ニヨアブ乃ちテコアに人を遣りて、彼處より一人の哲婦を呼びきたらしめて、其婦にいひけ

るは、請ふ汝喪にある真似して喪の服を着、油を肩にぬらず、死者のために久しく哀しめる婦のごとく爲りて、三王の所にいたり、是のごとくかれに語

るべしと。ヨアブ其言語をかれの口に授けたり。テコアの婦王に至り、地に伏して拜し、王にいひけるは、王よ助け給へ。五王、婦にいひけるは、何事なるや。婦いひけるは、我は實に整婦にしてわが夫は死れり。六仕女に二人の子あり。俱に野に争ひしが、誰もかれらを排解するものなきにより。此遂に彼を撃ちて殺せり。七是において視よ、全家仕女に逼りていふ、其兄弟を撃ち殺したる者を付せ。我ら彼をその殺したる兄弟の生命のために殺さんと。斯く嗣子をも滅し、存れる我炭火を熄して、わが夫の名をも遺存をも地の面に無からしめんとす。八王婦にいひけるは、汝の家に往け。我汝の事につきて命令を下さん。九テコアの婦、王にいひけるは、王わが主よ、れがはくは其罪は我とわが父の家に歸して、王と王の位には罪あらざれ。一〇王いひけるは、誰にても爾に語る者をば我に將來れ。しからば彼かされて爾に觸ること无かるべし。二婦いひけるは、

願くは王爾の神エホバを憶えて、かの仇を報ゆる者をして重れて滅すことを爲さしめず、わが子を斷つことなからしめ給へと。王いひけるは、エホバは生く、爾の子の髪の毛一すぢも地に墮つることなかるべし。三婦いひけるは、請ふ仕女をして一言わが主王に言はしめ給へ、ダビデいひけるは、言ふべし。四婦いひけるは、爾なんぞ斯る事を神の民にむかひて思ひたるや。王此言を言ふにより、王は罪ある者の如し。其は王その放たれたる者を歸らしめざればなり。五抑我等は死なざるべからず。我等は地に瀉れたる水の再び聚る能はざるがごとし。神は生命を取り給はず、方法を設けて其放たれたる者をして己の所より放たれたることなからしむ。六我此事を王我主に言はんとて來れるは、民我を恐れしめたればなり。故に仕女謂へらく、王に言はん、王婢の言を行ひ給ふならんと。七其は王聞きて我とわが子を共に滅して神の産業に離れしめんとする人



の手より、婢を救ひだし給ふべければなり。一七  
仕女また思へり。王が主の言は慰となるべしと。  
其は神の使のごとく、王が主は善も悪も聞き給へ  
ばなり。れがはくは爾の神エホバ爾と共に在せと。  
一八王こたへて、婦にいひけるは、請ふわが爾に問は  
んところの事を我に隠すなけれ。婦いふ、請ふ王わ  
が主言ひ給へ。一九王いひけるは、此すべての事に  
おいてはヨアアの手爾とともにあるや。婦答へてい  
ひけるは、爾の靈魂は活く、王が主よ、凡て王わ  
が主の言ひたまひしところは、右にも左にもまがら  
ず。實に爾の僕ヨアア我に命じ、是等の言を悉く  
仕女の口に授けたり。二〇其事の見ゆるところを變  
へんとて、爾の僕ヨアア此事をなしたるなり。然れ  
どわが主は神の使の智慧のごとく智慧ありて、地に  
ある事を悉く知りたまふと。二一是において王ヨ  
アアにいひけるは、祝ふ、我此事を爲す。されば往  
きて少年アアサロムを携歸るべし。二二ヨアア地に

九〇  
伏して拜し、王を祝せり。而してヨアアいひけるは、  
王が主よ、王僕の言を行ひたまへば、今日僕わが  
爾に恵るゝを知ると。二三ヨアア乃ち起ちてゲシユ  
ルに往き、アアサロムをエルサレムに携れ來れり。  
二四王いひけるは、彼は其家に退くべし。わが面を見  
るべからずと。故にアアサロム己の家に退きて王の  
面を覲ざりき。二五倍イスラエルの中にアアサロム  
のごとく其美貌のために讃められたる人はなかり  
き。其足の跡より頭の頂に至るまで、彼には瑕疵  
あることなし。二六アアサロム其頭を剪る時、其頭  
の髪を衡るに王の權衡の二百シケルあり。毎年の終  
りにアアサロム其頭を剪れり。是は己の重によりて剪  
りたるなり。二七アアサロムに三人の男子と一人の  
タマルといふ女子生れたり。タマルは美女なり。  
二八アアサロム二年のあひだエルサレムに在りたれ  
ども、王の顔を見ざりき。二九是によりてアアサロ  
ム王に遣さんとてヨアアを呼びに遣はしけるが、彼

來ることを肯んぜず。再び遣せしかども來ることを  
肯んぜざりき。三〇アアサロム其僕にいひけるは、  
祝ふ、ヨアアの田地は我の近くにありて其處に大麥  
あり。往きて其に火を放てと。アアサロムの僕等田  
地に火を放てり。三一ヨアア起ちてアアサロムの家  
に來りて之にいひけるは、何故に爾の僕等田地に火  
を放ちたるや。三二アアサロム、ヨアアにいひける  
は、我人を爾に遣はして此に來れ。我爾を王に遣は

さんと言へり。即ち爾をして王に我何のためにゲシ  
ユルより來りしや。彼處に尙あらば我ためには反つ  
て善しと言はしめんとせり。然れば我今王の面を見  
ん。若し我に罪あらば王我を殺すべし。三三ヨアア、  
王に至りてこれに告げれば、王アアサロムを召す。  
彼王にいたりて王のまへに地に伏して拜せり。王ア  
アサロムに接吻す。

◎ヨアアが、テコアより一人の哲婦を呼び來り、彼女をしてダビデを説かしめ、ア  
ブサロムの爲に執成をなさしめんとした動機は、極めて疑はしい。或は他日、ダビデ  
に繼いで王位に登るべき者は、アブサロムであらうと見込をつけ、其のため、豫め彼  
の歡心を得んと企てたものかも知れない。ダビデはその子アブサロムが、兄のアムノ  
ンを殺した後、母方の里なるゲシユルに身を避け、三年を過す間、彼が追々氣儘我儘  
になり行く様子は聞けども、その前非を悔悟した模様は、一向見出さないにも拘らず、

そこは我が子のことであるから、どうしても彼の上を忘るゝこと能はず、日夜そのみ心配して居つたのである。人の親の、心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ひぬるかな。親の愛は忝けないものである。その忝けない愛を有難いと心づく子が、案外に少いのは、嘆はしきことである。(二一三)

◎テコアの婦がダビデに説いた所は、その形式に於て、いくらか前のナタンが、彼を戒めたのと似た所がある。(サム後二・一一六)然しながらその内容は全く異つて居る。ナタンは神から遣されて、王の罪を責め、これが悔改を促したのであれど、テコアの婦は人から雇はれて、王子の罪を庇護し、その爲に王の同情を求めんとしたのである。二人兄弟の子供が相争うて、一方が他方を殺した爲に、あとに残つた方をも其の罰として殺さるゝことゝなれば、二人共死んで、その家督を相続すべきものがなくなる。それ故之を赦免してほしいといふ如きは、全く人情を以て公義をあやまるものである。況んやそれをアムノンと、アブサロムとの場合に當嵌めようといふのは、頗る無理な話である。プラムエル・ブース大將は、人の指導者たるものゝ心得を説き、「愛と

律法」との兩立すべき必要を高調せられた。私共は愛を重んずると共に、又律法の大切なことを忘れてはならない。即ち律法の公義のゆるがせにすべからざることを、心得ねばならぬ。テコアの婦はダビデを誘うて、その親子の情愛の爲に、彼が治者としての公義を枉ぐべき、危険に陥らしめんとしたのである。(四一一)

◎こゝにテコアの婦の言として、「抑我等は死なざるべからず。我等は地に瀉れたる水の再び聚る能はざるが如し。」というてあるのは、その之を言うた人の何人であるかに拘らず、至極の道理を語つたものと、いはねばならない。昔の人の歌に、「みな人の、知り顔にして、知らぬかな。必ず死ぬる、習なりとは。」又「裸にて、きたる身なれば、貨をも、すてゝ裸で、また歸らむ。」などとあり。私共は皆必ず一度は、死なねばならぬ運命を有するものである。しかも私共は、只一度しか此の世を渡らぬ者であるゆゑ、平生から戒心して、現在目前の生活を、後日の悔とならぬ様に、營むべき必要がある。又墓の彼方に永遠の生命のあることを知つて、豫々それに對する用意をしてかゝらねばならぬ。「それ神は、その獨子を賜ふほどに、世を愛し給へり。すべて彼を

信ずる者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。(ヨハ三・一六)と、教へてあるではないか。(二二二〇)

◎ヨアブの執成は半功を奏し、ダビデはアブサロムのエルサレムに歸ることを許したが、しかも彼は王の顔を見ることを得ず、退きて己が家に留るべきことを命ぜられた。つまりその家に幽閉せられたわけである。「密室は神が人に謁見を賜る場所である。」などという人もありて、一人居ることは、聖徒の神々しき生活を營む上に、益する所が多い。然しながらそれだけの心掛なき人にとつては、閑居することは、邪念邪思を増長する機会を作るものに過ぎない。「小人閑居して不善を爲す。」又「何もなすことなくして悪事をなす。」などいふのは、それである。不幸にしてアブサロムは、一人居る時に邪念邪思をやしなひ、閑居する間に専ら不善を企てた様に見える。(二二二四)

◎其の當時イストラエルの中に、アブサロムの如く、その美貌を以て賞讃せらるる者は、他になかつた。彼は昔流にいうたら、三十六相揃うて、一點の瑕瑾なき美男子であつた。その一年一回頭髪を刈る時、その毛を衡るに、重さ三斤餘に達して居つたといふのである。然しながら、いくら家作や什器が調うて居つても、其の内に住む者が痴愚であつたら、何の役にも立たない如く、外貌のみ幾ら美しくとも、衷なる人が暗愚で、不心得であつては、何の甲斐もないのである。ベーコンの言に、「美貌は夏の日の果實と同じく、腐敗し易くして、長持のしないものである。」とあり。諺に又、「人格を伴はざる美貌は、馨なき堇の如し。」というてある。アブサロムが美貌を有したことは、彼の祝福とはならず、反つて其の呪咀となつたのである。また憐むべき人物であつたといはねばならない。(二五二七)

◎アブサロムは、ヨアブの所有する田地に火を放つて、その大麥を焼き、之を脅迫し、強ひて彼と王との對面がかなふやう取計をなさしめた。斯してアブサロムは、今一度ダビデを見たのではあれど、それは彼が悔改めて赦を求むる爲の會見ではなかつた。彼はたゞ王子としての威嚴を調べ、人民の信用を獲ん爲に、強ひて父の顔を見んことを求めたものに過ぎない。それを思へば、耶蘇の譬話にある放蕩息子の悔改は、眞實なものであつた。「此のとき我に反りて言ふ『わが父の許には、食物あまれる雇人

いくばくぞや。然るに我は飢ゑてこの處に死なんとす。起ちて我が父にゆき、「父よ、われは天に對し、また汝の前に罪を犯したり。今より汝の子と稱へらるゝに相應しからず。雇人の一人のごとく爲し給へ」と言はん』乃ち起ちて其の父のもとに往く。(ルカ一五・一七―二〇)とあるのは、それである。私共は何を携へずとも、先づ悔改と信仰とを以て、父の御前に出で、その和平を求めねばならぬ。我聖なれば、汝らも聖なるべし。(レビ二一・四五)とは、神の嚴肅なる御命令だからである。(二八―三三)

### 一五 蒙 塵

#### (サムエル後書第十五章)

一 此後アサロム己のために、戰車と馬ならびに己の前に驅ける者五十人を備へたり。ニアアサロム夙興きて門の途の傍にたち、人の訴訟ありて王に裁判を求めんとて來る時は、アサロム其人を呼びていふ、爾は何の邑の者なるやと。其人、僕はイス

ラエルの某の支派の者なりといへば、ミアアサロム其人にいふ、見よ、爾の事は善くまた正し。然れど爾に聽くべき人は王未だ立てずと。ニアアサロム又、嗚呼我を此地の士師となす者もがな。然れば凡て訴訟と公事ある者は我に來りて我之に公義を爲しあた

へんといふ。五また人彼を拜せんとて近づく時は、彼手をのばして其人を扶け、之に接吻す。ニアアサロム凡て王に裁判を求めんとて來るイスラエル人は是の如くなせり。斯くアサロムはイスラエル人の人の心を取れり。七 斯て四年の後アサロム王にいひけるは、請ふ我をして往きてヘアロンにて、エホバに我嘗て立てし願を果さしめよ。八 其は僕スリヤのゲシユルに居りし時願を立てて、若しエホバ誠に我をエルサレムに携れ歸り給はば、我エホバに事へんと言ひたればなりと。九 王かれにいひけるは、安然に往けと。彼すなはち起ちてヘアロンに往けり。一〇 而してアサロム窺ふ者をイスラエルの支派の中に偏く遣はして言はせけるは、爾等喇叭の音を聞かばアサロム、ヘアロンにて王となれりと思ふべしと。一一 二百人の招かれたる者エルサレムよりアサロムとともにゆけり。彼らは何心なくゆきて、何事もしらせりき。一二 アサロム犠牲をささぐる時に、

ダビデの議官ギロム人アヒトマルを其邑ギロムより呼びよせたり。徒黨強くして民次第にアサロムに加はりぬ。一三 爰に使者ダビデに來りて、イスラエルの人の心アサロムにしたがふといふ。一四 ダビデおのれと共にエルサレムに居る凡ての僕にいひけるは、起てよ、我ら逃げん。然らずば我らアサロムより遁るゝあたはざるべし。急ぎ往け。恐らくは彼急ぎて我らに追ひつき、我等に害を蒙らせ、刃をもて邑を撃たん。一五 王の僕等王にいひけるは、視よ、僕等王が主の選むところを凡て爲さん。一六 王いでゆき、其全家これにしたがふ。七十人の妾なる婦人を遣して家をまもらしむ。一七 王いでゆき、民みな之にしたがふ。彼等遠くの家息めり。一八 かれの僕等みな其傍に進み、ケレデ人とベレテ人および彼にしたがひてガテよりきたれる六百人のガテ人、みな王のまへに進めり。一九 時に王ガテ人イツタイにいひけるは、何ゆゑに爾もまた我らとともにゆ

や。爾かへりて王とともになれ。爾は外國人にして  
 移住りて處をもとむる者なり。二〇爾は昨日來りり。  
 我は今日わが得るところに往くなれば、豈爾をし  
 て我らと共にさまよはしむべけんや。爾歸り爾の  
 兄弟をも携れ歸るべし。れがはくは恩と眞實爾と共  
 にあれ。二一イッタイ、王にこたへていひけるは、  
 エホバは活く、王が主は活く、誠に王が主いか  
 なる處に坐すとも、生死ともに僕もまた其處に居る  
 べし。二三ダビデ、イッタイにいひけるは、進みゆ  
 け、ガテ人イッタイ乃ち進み、かれのすべての從者  
 およびかれと共にある妻子皆進めり。二三國中皆大  
 聲をあげて哭き、民皆進む。王もまたギデロン川を  
 渡りて進み、民皆進みて野の道におもむけり。二四  
 視よ、ザドクおよび俱にあるレビ人もまた、皆神の  
 契約の櫃を昇きて至り、神の櫃をおろして民の悉  
 く邑よりいづるをまてり。アピヤタルもまたのぼれ  
 り。二五爰に王ザドクにいひけるは、神の櫃を邑に

昇きもどせ、若し我エホバのまへに恩をうるならば、  
 エホバ我を携きかへりて我にこれを見し、其住處を  
 見し給はん。二六されどエホバもし我汝を悦ばずと  
 斯くいひたまはば、視よ、我は此にあり。其目に善し  
 と見ゆるところを我になしたまへ。二七王また祭司  
 ザドクにいひけるは、汝先見者汝らの二人の子、  
 即ち汝の子アヒマズとアピヤタルの子ヨナタンを  
 伴ひて安然に城邑に歸れ。二八見よ、我は汝より言  
 の來りて我に告ぐるまで、野の渡場に留まらんと。  
 二九ザドクとアピヤタル即ち神の櫃をエルサレムに  
 昇きもどりて彼處に止まれり。〇こゝにダビデ橄  
 欖山の路を陟りしが、陟るときに哭き、其首を蒙み  
 て跛足にて行けり。彼と俱にある民皆各其首を蒙  
 みてのぼり、哭きつゝ陟れり。三二時にアヒトベル  
 がアサロムに與せる者の中にあることダビデに聞  
 えければ、ダビデいふ、エホバれがはくはアヒトベ  
 ルの計策を愚ならしめたまへと。三三ダビデ嶺に

ある神を拜する處に至れる時、視よ、アルキ人ホシ  
 ヤイ衣を裂き、土を頭にかむりてきたりてダビデを  
 迎ふ。三三ダビデかれにいひけるは、爾若し我と共に  
 進まば我の負となるべし。三四されど汝もし城邑  
 にかへりてアサロムにむかひ、王よ、我爾の僕と  
 なるべし。此まで爾の父の僕たりしことく今また汝  
 の僕となるべしといはば、爾はわがためにアヒトベ  
 ルの計策を敗るにいたらん。三五祭司ザドクとアピ

ヤタル、爾とともに彼處にあるにあらずや。是故に  
 爾が王の家より聞きたる事は、ことごとく祭司ザド  
 クとアピヤタルに告ぐべし。三六視よ、彼らと共に  
 彼處にはその二人の子、即ちザドクの子アヒマズ  
 とアピヤタルの子ヨナタンをるなり。爾ら其聞きた  
 る事をことごとく彼等の手によりて我に通ずべし。  
 三七ダビデの友ホシャイスなはち城邑にいたりぬ。  
 時にアサロムはエルサレムに入り居たり。

◎昔、北條早雲は、學者をして黄石公の三略を説かしめ、「主將の法は務めて英雄の心  
 を攬る」といふのを聞いて、「止めよ、そのことなら既に心得て居る」というた。今ア  
 プサロムが之と似て、自分が王とならん爲には、先づ人心を收攬する必要ありと感じ、  
 頻りに私恩をその人民に賣り、やがて自分が旗揚をする日の爲に準備をしたといふの  
 は、油斷のならない話である。彼の爲す所は、耶蘇の譬話にある不義なる支配人が、  
 主人の債務者を呼び寄せて、油百樽を負ふ者には五十樽、麥百石を負ふ者には八十石

と、證書を書直させ、その他日、彼等の家に迎へられん爲の用意をしたのと似て、極めて賢い仕方であつた。所謂「この世の子らは、己が時代のことに、光の子らよりも巧なり。」(ルカ一六・八)とは、斯の如きをいふのであらう。然しながら私共は、光の子供として、神の光の中を歩むものである。パウロが「汝らは舊聞なりしが、今は主に在りて光となれり。光の子供のごとく歩め。」(エペ五・八)というたのは、私共の日頃の心掛でなくてはならない。(二一六)

◎かくて四年の後、アブサロムは愈々時節到来せりと見て、その父に向ひ、「請ふ、我をして往きてヘブロンにて、エホバに我が嘗て立てし願を果さしめよ」といひ、宗教上の奉仕をするのに事寄せて、ヘブロンに赴き、其處で愈々その父に對抗し、自ら王位に即いた旨の宣言をした。彼は名を宗教に借りて、便宜の機會を捉へ、その父又王なるダビデに叛旗を翻したのである。ジエレミー・テールルの言に、「凡そその宗教に偽善を行ふ者は、神を侮蔑する者である。その外部を神に獻げ、内部を彼の敵(悪魔)に與ふるものだからである。」とあり。ハズリットは又「唯一つの赦さるべからざる罪

悪は偽善である。偽善者の悔改は、それ自身すでに偽善だからである。」というてある。私共は此の世に、偽善に勝つて憎むべき罪惡はないことを、知らねばならぬ。ダビデの議官アヒトペルは、其の當時の最も優れた智謀の人であつた。それがダビデを棄て、アブサロムに屬いたといふのは、思も寄らないことであつた。「我が恃みし所わが糧を食ひし所のわが親しき友さへも、我にそむきてその踵をあげたり。しかはあれどエホバよ、汝願くは我を憐み、我を助けて起し給へ。されば我彼等に報ゆることを得ん。」(詩四一・九、一〇)とは、その當時に於ける、ダビデの訴であつたものかと考へらるゝ。(七一・二)

◎ダビデはアブサロムの謀反のことを聞いて、その僕に向ひ、「起てよ、我ら逃げん。然らずば我らアブサロムより遁るゝあたはざるべし。急ぎ往け。恐らくは彼急ぎて我らに追ひつき、我等に害を蒙らせ、刃をもて邑を撃たん」というた。これは前年、勇敢にペリシテ人と戦うたダビデと、同行の行動とは受取れない程、臍甲斐なき、弱々しい態度であつた。併しながら、良心は人を臆病ならしめるものである。悪しき者は

逐ふ者なけれども逃げる(箴二八・一)といふのは、そのことである。ダビデは自分の家庭が修らず、子女の教育が届かずして、斯る間違を惹起し、人民に迷惑をかけるのを見て、自分で自分に愛想が付き、その子を相手に戦争せんよりは、寧ろ之を避けて逃げ出さんことを願ふに至つたものと見える。「それ監督は責むべき所なく、一人の妻の夫にして自ら制し、慎み、品行正しく、旅人を懇ろに待し、善く教へ、酒を嗜まず、人を打たず、寛容にし、争はず、金を貪らず、善く己が家を理め、謹厳にして子女を従順ならしむる者たるべし。(テモ前三・二一四)といふ如き教もあり。人の上に立つ者は、とりわけ善くその家庭を齊へ、子女に信仰的教育を施したきものである。(一三一)

一七)

◎肝心なイスラエル人が、少からず其の去就に迷うて居る最中、ガテ人イツタイが、何處までもダビデに忠義を勵む決心にて、「エホバは活く、王わが主は活く。誠に王わが主、いかなる處に坐すとも、生死ともに僕また其處に居るべし」というたのは、眞に立派な覺悟であつた。「いのちをば、輕きになして、ものゝふの、道よりおもき、道

あらめやも。」又「二つなき、いのちを君に、たてまつる、心のうちに、すめる月かな。」などと歌うた古武士の精神も、之と似た所があつたやうである。後に耶蘇は異邦人なる百卒長の、篤信を嘉して、「まことに汝らに告ぐ、斯る篤き信仰は、イスラエルの中の一人にだに見しことなし。又なんぢらに告ぐ、多くの人、東より西より來り、アブラハム、イサク、ヤコブとともに天國の宴につき、御國の子らは外の暗に逐ひ出され、そこに哀哭、切齒することあらん(マタ八・一〇—一二)と仰せられた。私共はダビデの子なる耶蘇に對し、かうした忠義の精神を有ちたきものである。(一八一—二二三)

◎斯る場合に、ザドク及び彼と偕にあるレビ人が、神の櫃を大事として、之を昇きてダビデに従ひ、彼から説得せられて、やがて又エルサレムに歸つたのは、甚だ善い。彼等が斯る突嗟の場合にもその處置を誤らず、あくまで神を第一に、事を行つたのは、見上げたものである。「さらば食ふにも、飲むにも、何事をなすにも、凡て神の榮光を顯すやうに爲よ(コリ前二〇・三一)との主義を、彼等は平生から履行して居つたことが偲ばれて、敬服に堪へざる所である。(二四—三〇)

◎ダビデはアヒトベルが、アブサロムに與したことを聞いて、「エホバ、ねがはくはアヒトベルの計策を愚ならしめたまへ」と祈つた。又その友人ホシヤイが衣を裂き、土を頭にかむり、來り迎へるのを見て、彼をしてアブサロムの所に往き、内部からアヒトベルの計策を破らんことを依託した。ホシヤイがその難しい役目を引受け、往いてアブサロムに屬したのは、ダビデにとつては頼もしいことの至であつた。朋友は何の時にも愛す。兄弟は危難の時のために生る。(箴一七・一七)とあり。ホシヤイはダビデにとりて、眞に危難の時の爲に生れた、朋友であつたといふことが出來よう。(三一三七)

### 一六 流 寓 漂 泊

#### (サムエル後書第十六章)

一ダビデ少しく巖を過ぎゆける時、視よ、メヒホセテの僕ヤバ鞍おける二頭の驢馬を引き、其上にバ

ン二百、乾葡萄一百、球乾棗の團塊一百、酒一囊を載せたりてダビデを迎ふ。ニ王ヤバにいひけるは、

是等は何なるか。ヤバいひけるは、驢馬は王の家族の乗るため、パンと乾棗は少者の食ふため、酒は野に困憊れたる者の飲むためなり。三王いひけるは、爾の主人の子は何處にあるや。ヤバ、王にいひけるは、彼はエルサレムに止まる。其は彼イスラエルの家今日我父の國を我にかへさんと云ひ居ればなり。四王ヤバにいひけるは、視よ、メヒホセテの所有は悉く爾の所有となるべし。ヤバいひけるは、我拜す。王が主よ、我をして爾のまへに恩を蒙らしめたまへ。五斯てダビデ王ヤバホルムにいたるに、視よ、彼處よりサウルの家の族の者一人出て來る。其名をシメイといふ。タラの子なり。彼出て來りて、來りつゝ詛へり。六又彼ダビデとダビデ王の諸の臣僕にむかひて石を投げたり。時に民と勇士皆王の左右にあり。セシメイ詛の中に斯いへり。汝血を流す人よ。爾邪なる人よ、出去れ、出去れ。ハ爾が代りて位に登りしサウルの家の血を、凡てエホバ爾に歸

したまへり。エホバ國を爾の子アアサロムの手に付したまへり。視よ、爾は血を流す人なるによりて禍患の中にあるなり。九ゼルヤの子アビシヤイ、王にいひけるは、此死たる犬なんぞ王が主を誣ふべけんや。請ふ我をして涉りゆきてかれの首を取らしめよ。一〇王いひけるは、ゼルヤの子等よ、爾らの與るところにあらざ。彼の誣ふはエホバ彼にダビデを誣へと言ひたまひたるによるなれば、誰か爾なんぞ然するやと言ふべけんや。二ダビデ又アビシヤイおよび己の諸の臣僕にいひけるは、視よ、わが身より出たるわが子わが生命を求む。況んや此ベニヤミン人をや。彼を聽して誣はしめよ。エホバ彼に命じたまへるなり。一三エホバわが艱難を俯視み給ふことあらん。又エホバ今日彼の誣のために、我に善を報い給ふことあらんと。一四斯てダビデと其從者途を行きけるに、シメイはダビデに對へる山の傍に行きて行きつゝ詛ひ、また彼にむかひて石を投げ、



塵を揚げたり。一四王及び俱にある民、皆アエヒムに來りて彼處に息をつげり。一五倍アサロムと總ての民イスラエルの人々エルサレムに至れり。アヒトベルもアサロムとともにいたる。一六ダビデの友なるアルキ人ホシヤイ、アサロムの許に來りし時、アサロムにいふ、願くは王壽かれ、願くは王壽かれ。一七アサロム、ホシヤイにいひけるは、此は爾が其友に示す厚意なるや。爾なんぞ爾の友と往かざるやと。一八ホシヤイ、アサロムにいひけるは、然らず。エホバと此民とイスラエルの總の人々の選む者に我は屬し、且其人とともに居るべし。一九且又我誰に事ふべきか、其子の前に事ふべきにあらずや。我は爾の父の前に事へしごとく爾の

◎メピボセテの僕デバは、二頭の驢馬に贈物を滿載して、ダビデを迎へた。人の贈物はその人のために道をひらき、かつ貴きもの、前にこれを導く。(箴一八・一六)とあり。デバが多分の贈物を携へ來つたわけは、斯してダビデに取入り、自らの爲に一段の便

前に事ふべし。二〇爰にアサロム、アヒトベルにいひけるは、我等如何に爲すべきか。爾等計を爲すべしと。二一アヒトベル、アサロムにいひけるは、爾の父が遺して家を守しむる妾等の處に入れ。然らばイスラエル皆爾が其父に惡まるゝを聞かん。而して爾とともになる總の者の手強くなるべしと。二三是において屋脊にアサロムのために天幕を張りければ、アサロム、イスラエルの目の前にて其父の妾等の處に入りぬ。三當時アヒトベルが謀れる謀計は神の言に問ひたる如くなりき。アヒトベルの謀計は皆ダビデとアサロムとに俱に是のごとく見えたりき。

宜を得たいからであつた。それ故彼は主人メピボセテが、アサロムに就かん心のあつるもの、如く誣ひ、ダビデから「視よ、メピボセテの所有は、悉く爾の所有となるべし」との言を聞き、彼が願の叶うたことを喜んだのであつた。デバは斯して、その主人の所有を盗む不忠なる僕であつた。それにつけても、召されて神の僕たる私共は、その主のものを盗む如き不正行爲があつてはならぬ。人、神の物をぬすむことをせんや。されど汝らはわがものを盗めり。汝らは又何において汝の物をぬすみしやといへり。十分の一および獻物に於てなり。汝らは呪詛をもて詛はる。また汝ら一切の國人はわが物をぬすめり。わが殿に食物あらしめんために、汝ら什一をすべて我が倉にたづさへきたれ。而して是をもて我を試み、わが天の窓をひらきて容るべきところなきまでに、恩澤を汝らにそぐや否やを見るべし。萬軍のエホバこれを言ふ。(マラ三・八 一〇)と、教へてあるではないか。(二一四)

◎サウルの家族の一人なる、シメイといふ者が出て來り、ダビデとその家來とに向ひて石を投げ、且ダビデを誣うていうた。「汝血を流す人よ、爾が代りて位に登りしサウ

ルの家の血を、凡てエホバ爾に歸したまへり。視よ、爾は血を流す人なるによりて、禍害の中にあるなり。」というた。ダビデがサウルの家を流したといふのは、誣言である。ダビデはサウルを流さなければかりか、二度までもサウルが彼の手に陥つたのを、助けたやうなこともあつた。(サム前二四・一〇、同二六・二二)然しながらそのウリヤを態と死地に置いて、陣歿せしめた責任は、たしかに彼が負ふべきものであつた。汝血を流す人よ」といはれて、彼が一言の申開もなし得なかつたのは、萬止むを得ないことであつた。今基督に救はれた私共は、また他人の救に對して、容易ならざる責任を負ふ者である。神は宣うて居る。「我惡人に向ひて、惡人よ、汝死なざるべからずと言はんに、汝その惡人を警めて、その途を離るゝやうに語らざば、惡人はその罪に死なん。なれど、其の血をば我汝の手に討問むべし。」(エセ三三・八)と。私共はこの意味に於て、よくパウロと共に、「われ今日なんぢらに證す。われは凡ての人の血につきて潔よし。」(使二〇・二六)といひ得るであらうか。大に反省する所がなくてはならぬ。(五・一八)

◎ダビデの家來の中、ゼルヤの子アビシヤイは、大きに腹を立て、「此の死にたる犬、

なんぞ王わが主を誣ふべけんや。請ふ我をして涉りゆきて、かれの首を取らしめよ」というたが、ダビデはそれに答へて、「彼の誣ふは、エホバ彼にダビデを誣へと言ひたまひたるによるなれば、誰か爾なんぞ然するやと言ふべけんや。」といひ、シメイの呪詛の言を甘受した。これはダビデがシメイの呪詛を、神からの懲治として受取つたからである。「アブラハムの信仰、ヨブの忍耐、モーセの愛、エリヤの熱心等は、いづれも皆、神の懲治を経て與へられた賜物である。」というた人がある。乃ちヨブが「彼、われを試みたまはば、我は金のごとくして出できたらん。」(ヨブ二三・一〇)というたのは、亦ダビデが此の場合に於ける覺悟であつたやうに見える。(九、一〇)

◎ダビデは又いうた。「視よ、わが身より出たるわが子、わが生命を求む。況んや此のベニヤミン人をや。彼を聽して誣はしめよ。エホバ彼に命じたまへるなり。エホバわが艱難を俯視み給ふことあらん。又エホバ、今日彼の誣のために、我に善を報い給ふことあらん」と。彼はシメイが石を投げ、塵を揚げるのを見ながら、おつとそれを忍耐した。彼は曾て純真なる一青年として、勇敢に進んでゴリアテに向ひ、石を投げて

之を殺したこともあつたが、今は老熟したる一聖徒として、敵から咒詛の石を投げられながら、じつと黙つて之を忍んだのである。前には進んで戦に勇んだ者が、今は退いてつゝまじやかに己を守り、前には大膽に神の旨を行つた者が、今は謹んで神の御旨に身を委ねるに至つたのである。彼は神の僕にあるまじき大罪を犯した。けれども、それを何處までも深刻に、徹底的に悔改めた所に、その眞實なる信仰的態度を見出さるのである。(二一―一四)

◎ダビデの友として知られたホシヤイが、アブサロムの許に来つたのは、さすがのアブサロムも不思議に覺えたやうである。斯してホシヤイはアブサロムの側に侍しつゝ、ダビデの爲に計るところがあつた。之をアブサロムの方からいへば、氣の許せない話であつたが、之をダビデの側から見れば、それでこそ不思議に、危険極まる中を通りぬけることも出来たのである。すなはちダビデが自ら其の間の體驗を歌うて、「エホバよ、我にあたする者のいかに蔓延れるや。我にさからひて起つたもの多し。わが靈魂をあげつらひて、かれは神にすくはるゝことなしといふ者を多し。されどエホ

バよ、なんぢは我をかこめる盾、わが榮、わが首をもたげ給ふものなり。われ聲をあげてエホバによばれば、その聖山より我にこたへ給ふ。」(詩三・一四)というたのは、如何にもと頷かれる節がある。(二五―一九)

◎アヒトベルはとんでもない忠告をして、アブサロムを全く見下げ果てた、不道德の行爲に陥らしめた。ダビデがウリヤから奪つたその妻バテシバは、エリアムの女で、(サム後二・三) エリアムはアヒトベルの子であつた(サム後二三・三四)といへば、つまりバテシバはアヒトベルの孫娘であつた。それ故彼は、ダビデがその孫娘を辱しめたに對する仇返のつもりで、かうした助言をアブサロムになし、聊か溜飯が下つたやうな、快感を覺えたものかも知れない。箴言に、「なんぢの力を女につひやすなかれ。王を滅すものに汝の途をまかす勿れ。」(箴三一・三)とあり。耶蘇は又、「なんぢら聽くことに心せよ。」(マル四・二四)と、仰せられて居る。私共は自分に忠告する者の、何人であるかを見分け、間違つた途に誘はれざるやう、その聽くところに注意すべき必要がある。

一七 策士の末路

(サムエル後書第十七章)

一時にアヒトベル、アアサロムにいひけるは、請ふ我に一萬二千の人を擇み出さしめよ。我起ちて今夜ダビデの後を追ひ、ニ彼が憊れて手弱くなりし所を襲ふて、彼をおびえしめん。而して彼と共に在る民の逃げん時に、我王一人を撃ちとり、ニ總て民を爾に歸せしむべし。夫衆の歸するは爾が求むる此人に依るなれば、民みな平穩になるべし。四 此言アアサロムの目とイスラエルの總の長老の目の當と見えたり。五アアサロムいひけるは、アルキ人ホシヤイをも召し來れ。我等かれが言ふ所をも聞かんと。六 ホシヤイ、乃ちアアサロムに至るに、アアサロムかれにかたりていひけるは、アヒトベル是のごとく言へり。我等其言を爲すべきか、若し可らずば爾言ふ

べし。セホシヤイ、アアサロムにいひけるは、此時にあたりてアヒトベルが授けし計略は善からず。八 ホシヤイまたいひけるは、爾の知る如く、爾の父と其従者は勇士なり。且彼等は野にて其子を奪はれたる熊の如く、其氣激怒ちをれり。又爾の父は戦士なれば、民と共に宿らざるべし。九 彼は今何の穴にか何の處にか匿れをる。若し數人の者手始に仆れば、其を聞く者は皆アアサロムに従ふ者の中に敗ありと言はん。一〇 しかば獅子の心のごとき心ある勇猛き夫といふとも、全く挫碎けん。其はイスラエル皆爾の父の勇士にして、彼と共にある者の勇猛き人なるをしなければなり。二 我は計議る、イスラエルをダンよりメルシバにいたるまで、海濱の沙の多

きが如くに悉く爾の處につどへ集めて、爾親ら戦陣に臨むべし。二 我等彼の見出さるゝ處にて彼を襲ひ、露の地に下るがごとく彼のうへに降らん。しかして彼おび彼とともにあるすべての人々を一人も遺さざるべし。一三 若し彼何れかの城邑に集らば、イスラエル皆繩を其城邑にかけ、我等これを河に曳きたふして其處に一の小石をも見えざらしむべしと。一四 アアサロムとイスラエルの人々、皆アルキ人ホシヤイの謀計はアヒトベルの謀計よりも善しといふ。其はエホバ、アアサロムに禍を降さんとて、エホバ、アヒトベルの善き謀計を破ることを定めたまひたればなり。一五 爰にホシヤイ、祭司ザドクとアビヤタルにいひけるは、アヒトベル、アアサロムとイスラエルの長老等のために斯々に謀れり。また我は斯々に謀れり。一六 されば爾ら速に人を遣してダビデに告げて、今夜野の渡場に宿ることなく、速かに渡りゆけといへ。恐らくは王おび俱にある

民皆吞つくされん。一七 時にヨナタンとアヒマアズはエンロゲルに候居たり。是は城邑にいるを見られざらんとてなり。爰に一人の仕女ゆきて彼等に告げければ、彼らダビデ王に告げんとて往く。一八 しかるに一人の少者かれらを見てアアサロムにつげたり。されど彼等二人は急ぎさりてバホルムの或人の家にいたる。其人の庭に井ありてかれら其處にくだりければ、一九 婦蓋をとりて井の口のうへに掩け、其上に擣きたる麥をひるげたり。故に事知れざりき。二〇 時にアアサロムの僕等其婦の家に來りていひけるは、アヒマアズとヨナタンは何處に在るや。婦かれらに彼人々は小川を濟れりといふ。かれら尋ねたれども見當されば、エルサレムに歸れり。二一 彼等が去りし時かの二人は井より上りて、往きてダビデ王に告げたり。即ちダビデに言ひけるは、起ちて速かに水を濟れ。其はアヒトベル斯爾等について謀計を爲したればなりと。二三 ダビデ起ちて己と共に

にある凡ての民と共にヨルダンを濟れり。曙には一人もヨルダンを濟らざる者はなかりき。二三アヒトベルは其謀計の行れざるを見て、其驢馬に鞭おき、起ちて其邑に往きて其家に至り、家の人に遺言して自ら縊れ死にて、其父の墓に葬らる。二四爰にダビデ、マハナイムに至る。又アブサロムは己と共にあるイスラエルの凡の人々と共にヨルダンを濟れり。二五アブサロム、アマサをヨアの代りに軍の長と爲せり。アマサは夫のナハシの女にてヨアの母、セルヤの妹なるアビガルに通じたるイシマエルの

一四  
人、名はエテルといふ人の子なり。二六かくてイスラエルとアブサロムはギレアデの地に陣どれり。二七ダビデ、マハナイムにいたれる時、アンモンの子孫の中なるラバのナハシの子シヨビと、ロデバルのアシミエルの子マキル、およびロゲリムのギレアデ人バルツライ、二八臥床と銅釜と陶器と小麦と大麦と粉と烘麥と豆と小豆の烘りたる者と、二九蜜と牛酪と羊と犢を、ダビデおよび俱にある民の食ふために持來れり。其は彼等民は野にて飢餓れ渴くならんと謂ひたればなり。

◎アヒトベルは一萬二千の兵を請ひうけて、起つてダビデの後を追ひ、その疲れたるに乗じて之を襲ひ撃たんとことを建築した。斯してダビデ一人を討取れば、凡ての人民は、自らアブサロムに歸するであらうといふが、彼の意見であつた。アブサロムが、イスラエルの總の長老たちと共に、一應其の建築を、的當と認めたとあるのを見れば、彼は自分の野心を遂ぐる爲には、その父を殺すのを厭はなかつたことが解る。どうい

ふ大それた悪虐に陥つたものであらう。眞に想像も及ばぬことである。然しながら又考へて見れば、天の父の至仁至愛を辨へながら、之を踏みつけにし、その獨子を賜ふ程の恩恵を無視して、罪に罪を重ねて居る人々は、又大きに、此のアブサロムの親不孝と、似た所があるのではないか。ヘブル書の記者は、「一たび照されて天よりの賜物を味ひ、聖靈に與る者となり、神の善き言と來世の能力とを味ひて後、墮落する者は、更にまた自ら神の子を十字架に釘けて肆し物とする故に、再びこれを悔改に立返らすること能はざるなり。」(ヘブ六・四一六)というて居る。戒心せねばならぬことである。

(一一四)

◎アヒトベルはどちらかといへば、所謂奇兵を用ひて、急にダビデを仆さんとするに對し、ホシヤイは大兵を驅り催し、露が地を覆ふ如く、野も山も残らず覆ふばかり多数の軍勢を用ひて、ダビデに迫り、その民等を一人残らず討滅さんことを提案した。このホシヤイの提案は、アヒトベルのものよりも、餘計にアブサロムの意に適うたといふわけは、それが前のアヒトベル一人、功名手柄をする案とは違ひ、アブサロム自

ら陣頭に立ち、さうした大兵を指揮すべき計畫であるだけに、彼の輕薄なる功名心を満足させる處が、多かつたからである。昔からかうした虚しき功名心のために、幾多の無意義な戦争は繰返され、國民の平和は攪亂せられたのである。「汝おのれの爲に大なる事を求むるか、之を求むる勿れ。視よ、われ災を凡ての民に降さん。然れど汝の生命は我汝のゆかん諸の處にて、汝の掠物とならしめんと、エホバいひたまふ。」(エレ四五・五) といふこともあり。私共は徒なる功名心の爲に自らを害ひ、又世に累を及ぼす如きことがあつてはならぬ。(五一・一三)

◎アブサロムがアヒトペルの謀計を退けて、ホシヤイの提案を受容るゝこととなつたのは、神の御旨によるのである。すなはち神が、アブサロムに禍を降さんとて、アヒトペルの善き謀計を破り給うたのであつた。「彼は智者をその惡功によりて捕へ給ふ。」又「主は智者の念の虚しきを知り給ふ。」(コリ前三・一九、二〇)とあり。神は智者の智を愚ならしめ給ふのである。ウエリントンには、ウオタルの大戦の後にいふた。「私はあふない生命を助かつた。攝理の指が觸れ給うたからである」と。私共は人間の區々

たる小刀細工以上に、神の大なる攝理の行はるゝことを知り、敬畏の念を以て世を過したきものである。(一四)

◎ホシヤイは軍議の次第を、祭司ザドクとアビヤタルとに告げ、彼等は又、その示された所を、ヨタナンとアヒマアズとに通じ、彼等をして、それをダビデに傳へしむることとなつた。ヨナタンとアヒマアズとは、追手につけ狙はれて危い所を、親切の人の計らひにて、暫らく井戸の中に身を隠し、難を免れてその使命を果すことが出来た。ノラのファイリップスは信仰上の迫害を蒙り、逃れて洞穴に隠れると、蜘蛛が来て洞穴の口に網をはつた爲、追手の者も、彼がその中にはゐないものと想像し、通り過ぎた爲に、危険を脱することが出来た。その時彼はいうた。「神僭に在さずば、鐵壁も蜘蛛の網の如く、神僭に在さば、蜘蛛の網も鐵壁の如くである」と。神と僭に在る位安全にして、又幸福なる生活はないのである。(二五・一二)

◎アヒトペルは謀計の行はれざるを見て失望し、驢馬に鞍おき、起つてその郷里に歸り、家人に遺言したる後、自ら縊れて死んだ。「殺す勿れ」といふ誠命は、その中に「自

殺する勿れ」といふ意味を含んで居る。神は自殺を禁ずると共に、又自殺せずともよい様に、私共を助け導き給ふお方である。「死を欲するの虚しさは、死を恐るゝの怯懦なるに譲らず。」又「自殺は救治にあらず」(カーフィールド)といふこともあり。私共はその肉の身を殺す代に、心の私を殺し、進んで基督による新しき生命に歩まねばならぬ。さうすることによつて私共は、「爲ん方つくれども希望を失はず」(コリ後四・八)能く行詰つた暗黒の世界にも、光明と希望とを見出すことが出来る。私共はどんな場合にも、自殺すべき必要を見出さないのである。(二二二—二二五)

◎ダビデがヨルダン河を濟つて、その東岸なるマハナイムに到れる時、アンモンの子孫の中なるシヨビと、ロデバルのマキル、ロゲリムのバルジライ等が出で来り、家具、什器、食物などをもち來つた。これはダビデとその民とが、野にて飢ゑ且疲れて居るのを、察したからである。野にて飢ゑたる者を憫むといへば、後に耶蘇は野にて飢ゑたる群衆を見、之を氣の毒に覺え、僅かのパンと魚とを以て、不思議に幾千人を養ひ給うたことも、思ひ合される。今日の私共も亦、野にて飢寒になやむ、所謂無宿、

ルンペンの類を記憶し、之を心身兩方面から救護することを忘れてはならない。(二二六—二二九)

### 一八 アブサロムの死

#### (サムエル後書第十八章)

一 爰にダビデ已とともにある民を核べて、其上に千夫の長、百夫の長を立てたり。ニ而してダビデ民を三に分ちて、其一をヨアブの手に託け、一をセルヤの子ヨアブの兄弟アビシヤイの手に託け、一をガテ人イツタイの手に託けたり。かくして王民にいひけるは、我もまた必ず汝らとともに出んと。三されど民いふ、汝は出づべからず。我等如何に逃ぐるとも、我等は我等に心をとめじ。又我等半死ぬとも我等に心をとめざるべし。されど汝は我等の一萬に等し。故に汝は城邑の中より我等を助けなば善し。四 王彼

らにいひけるは、汝等の目に善しと見ゆるところを爲すべしと。かくて王門の傍に立ち、民皆或は百人或は千人となりて出づ。五 王ヨアブ、アビシヤイ、およびイツタイに命じて、わがために少年アブサロムを寬に待へよといふ。王のアブサロムの事について諸の將官に命を下せる時、民皆聞けり。六 爰に民イスラエルに向ひて野に出て、エフライムの叢林に戦ひしが、セイスラエルの民其處にてダビデの臣僕のまへに敗る。其日彼處の戦死大にして二萬にいたれり。ハしかして戦徧く其地の表に廣がりぬ。

是日叢林の滅せる者は、刀劍の滅せる者よりも多かりき。九 爰にアサロム、ダビデの臣僕に行遣へり。時にアサロム驃馬に乗居たりしが、驃馬大なる橡樹の繁き枝の下を過ぎければ、アサロムの頭其橡に繋りて、彼天地のあひだにあがり。驃馬は彼の下より行過ぎたり。一〇 一個の人見てヨアブに告げていひけるは、我アサロムが橡樹に懸りをるを見たりと。一一 ヨアブ其告げたる人にいひけるは、さらば爾見て何故に彼を其處にて地に墜落さざりしや。我爾に銀十枚と一本の帯を與へんものを。一二 其人ヨアブにいひけるは、假令我わが手に銀十枚を受くべきも、我は手をいだして王の子に敵せじ。其は王我等の聞ける前にて、爾とアビシヤイとイツタイに命じて、爾ら各少年アサロムを害するなかれといひたまひたればなり。一三 我若し反いて彼の生命を胙賊は、何事も王に隠るゝ所なければ、爾自ら立ちて我を責めんと。一四 時にヨアブ我かく爾

とともに滞るべからずといひて、手に三本の槍を携へゆきて、彼の橡樹の中に尙生きたるアサロムの胸に之を衝通せり。一五 ヨアブの武器を執る十人の少者、續きてアサロムを撃ち、之を死なしめたり。一六 かくてヨアブ喇叭を吹きければ、民イスラエルの後を追ふことを息めてかへり。ヨアブ民を止めたればなり。一七 衆アサロムを將りて叢林の中なる大なる穴に投げいれ、其上に甚だ大きく石を疊みあげたり。是においてイスラエル皆おのゝ其天幕に逃げかへり。一八 アサロム、我わが名を傳ふべき子なしと言ひて、其生ける間に己のために一の表柱を建てたり。王の谷にあり。彼己の名を其表柱に與けたり。其表柱今日に至るまでアサロムの碑と稱へらる。一九 爰にサドクの子アヒマズといひけるは、請ふ我をして趨りて、王にエホバの王をまもりて其敵の手を免かれしめたまひし音信を傳へしめよと。二〇 ヨアブかれにいひけるは、汝は今日音

信を傳ふる者となるべからず。他日に音信を傳ふべし。今日は王の子死にたれば汝音信を傳ふべからず。二一 ヨアブ、クシ人にいひけるは、往きて爾が見たる所を王に告げよ。クシ人、ヨアブに禮をなしで走れり。二二 サドクの子アヒマズ再びヨアブにいひけるは、請ふ何れにもあれ、我をも亦クシ人の後より走せゆかしめよ。ヨアブいひけるは、我子よ、爾は充分の音信を持たざるに、何故に走りゆかんとするや。二三 かれいふ、何れにもあれ、我をして走りゆかしめよと。ヨアブかれにいふ、走るべし。是においてアヒマズ低地の路をはしりてクシ人を走越えたり。二四 時にダビデは二の門の間に座しぬたり。爰に守望者門の蓋上にのぼり、石壁にのぼりて其目を擧げて見るに、視よ、獨一人にて走せ來る者あり。二五 守望者呼ばはりて王に告げければ、王いふ、若し獨ならば口に音信を持つならんと。其人進み來りて近づけり。二六 守望者復一人の走りきたる

を見しかば、守望者守門者に呼ばはりて言ふ、獨一人にて走せきたる者あり。王いふ、其人もまた音信を持つ者なり。二七 守望者言ふ、我先者の走るを見るに、サドクの子アヒマズの走るが如しと。王いひけるは彼は善人なり。善き音信を持來るならん。二八 アヒマズ呼ばはりて王にいひけるは、れがはくは平安なれと。かくて王のまへに地に伏していふ、爾の神エホバは讃むべきかな。エホバかの手をあげて王わが主に敵したる人々を付したまへり。二九 王いひけるは、少年アサロムは平安なるや。アヒマズこたへけるは、王の僕ヨアブ僕を遣はせし時、我大なる噪を見たれども何をも知らざるなり。三〇 王いひけるは、側に至りて其處に立てよと。乃ち側にいたりて立つ。三一 時に視よ、クシ人來れり。クシ人いひけるは、れがはくは王音信を受け給へ。エホバ今日爾をまもりて、凡て爾にたち逆ぶ者の手を免かれしめたまへり。三二 王クシ人にいひけるは、



少年アサロムは平安なるや。クシ人いひけるは、  
れがはくは王が主の敵および凡て汝に起ち逆ひて  
害をなさんとする者は、彼少年の如くなれと。三三  
王大に感み、門の樓にのぼりて哭けり。彼行きなが

らかくいへり。わが子アサロムよ、わが子わが子  
アサロムよ、嗚呼われ汝に代りて死にたらん者を、  
アサロム、わが子よ、わが子よ。

◎ダビデはその兵を三隊に分けて、ヨアブと、その兄弟アビシャイト、ガテ人イツタ  
イトの三人に託け、彼自らも亦戦線に起たんとすると、その部下の者共は之を諫止し  
た。汝は出づべからず。我等如何に逃ぐるとも、彼等は我等に心とめじ。又我等半死  
ぬとも我等に心をとめざるべし。されど汝は我等の一萬に等し。故に汝は、城邑の中  
より我等を助けなば善し」と、彼等はいうたのである。此の如く神に選ばれたその僕  
は、往々一人にして他の一萬人に當る程、大事な立場に置かれ、又は大事な御業を勤  
むることがある。ジョン・ノックスが「我にスコットランドを興へよ、然らざれば死  
を興へよ。」と祈りつゝ、起上つた時には、其の反對者なるメリー女皇が戦慄して、「ノ  
ックスの祈は一師團の兵よりも恐しい」というたとあり。すなはちノックスはスコッ

トランド人の救に對し、一人にして能く一師團の兵にも比すべき、靈の力を授けられ  
て居つたことが知らるゝのである。(二一五)

◎エフライムの叢林は、岩山の上に樹木が生え繁つて居り、軍兵の隠家とするには極  
めて適當であつたが、戦争の爲には行動の自由を缺き、甚だしく不便利であつた。そ  
の爲、岩角から滑り落ちて死んだ者、立木の間にひつかつて敵の爲に仆された者等、  
至つて多く、この日叢林で死んだ者は、刀劍で滅された者よりも多かつたというてあ  
る。之を信仰生活の上からいへば、私共は身を避くべき安全なる隠家は唯一つあり。  
それはエフライムの叢林ではなくて、全能者の蔭に身を寄することである。即ち「至  
上者のもとなる、隠れたるところにすまふその人は、全能者の蔭にやどらん。われエ  
ホバのことを宣べて、エホバはわが避所、わが城、わがよりたのむ神なりといはん。  
千人はなんぢの左にたふれ、萬人はなんぢの右にたふる。されどその災害はなんぢに  
近づくことなからん。なんぢの眼はたゞこの事をみるのみ。」(詩九一・二、七、八)とある  
のは、それである。(六一八)

◎アブサロムは馬に乗つて、大なる橡樹の下を通る時、その得意の長い頭髪が木に懸つて、宙にぶら下り、馬は彼をのこして過ぎ去つた所へ、ヨアブがその手に屬する十人の若者と共に、來つて之を刺殺した。アブサロムの頭髪は非常に見事なもので、一年一回之を劈るに、その目方が三斤を超えて居つたといふことである。(サム後一四・二六) つまりアブサロムは、その自慢の頭髪の爲に捕へられて、生命を落すに至つたものである。此の如く人は兎角その得意とする所によつて、禍を招くものである。「善く泳ぐ者は溺れ、善く騎る者は墮つ」とは、之をいうたものであらう。「エホバかくいひ給ふ、智慧ある者はその智慧に誇る勿れ。力ある者は其の力に誇る勿れ。富る者はその富に誇る事勿れ。誇る者はこれをもて誇るべし。即ち明哲くして我を識る事と、わがエホバにして、地に仁恵と公道と公義とを行ふ者なるを知る事、是なり。我これらを悦ぶなりとエホバいひ給ふ。」(エレ九・二三、二四)と、預言者の書に記してあるのは、如何にも尤ものことといはねばならぬ。(九一・一五)

◎アブサロムには、三人の男子と一人の女子とがあつた筈である。(サム後一四・二七) 然

るにこゝには「アブサロム、我はわが名を傳ふべき子なしと言ひて、其の生ける間に、己のために一つの表柱を建てたり。」とあるのについて、これはその子供らが、生れぬ前にしたことであらうといふ説と、又其の三四人の子はいづれも皆幼くして死に、その後でしたことであらうといふのと、二つの説がある。いづれにもせよ、彼は後世に、その名の傳はらんことを願ふ餘、さうした表柱など建てたのであらう。然しながら彼のやうに、親不孝者の名のみ後迄残つた所で、それが何の役に立たう。名よりも大切なのは實である。私共は浮いた名譽を求むるよりも、實際に於て潔き人格を備へ、又有用の奉仕を行ふ者とならんことを、心掛けねばならぬ。即ち此の世に虚しき譽を求めんよりは、その名の天に録さるゝことを冀ふべきものである。(二六・一八)

◎如何にアブサロムの死を、ダビデに報すべきかは、困難なる問題であつたが、ヨアブは遂にクシ人と、又ザドクの子なるアヒマアズとの兩人をして、往いてその惡しき音信を、ダビデに傳へしむることとなつたのである。人の一生には、折々思もよらぬ惡しき音信の受取つて、その爲に、一方ならず心を痛むる場合があり。たゞ一切を神

の御手に委ね、その御力によつて立つ者のみ、さうした中にも、惑はず、落膽せず、正しき處置をなし得るものである。義しき者はなく忘れらるゝことなかるべし。彼はあしき音信によりて畏れず、その心エホバに依頼みてさだまれり。(詩一二・六、七)とあるのは、その事である。(一九一―二三)

◎ダビデは、アブサロムの殺されたことを知つて大に悼み、門の樓にのぼりて之を嘆き、歩みながら、「わが子アブサロムよ、わが子、わが子アブサロムよ、嗚呼われ汝に代りて死にたらん者を。アブサロム、わが子よ、わが子よ」と叫びつゞけた。此は如何にも深刻なる親心のあらはれではあれど、さるにても、彼が現在、イスラエルの王たる地位を忘れ、その人民、わけても彼の手に屬する軍人の手前をも憚らず、たゞ其の子の爲に泣いたのは、人情餘りあつて、義理に缺けた處があつたやうに見受けられる。私共は義理と人情との間に處して、若し必要ならその人情を抑へ、義理を立て得るやうでなくてはならぬ。ウイリアム・ブース大將は、その子の一人が軍の規律を遵奉しないのを見て、甚く心を痛め、百方その爲に盡したけれども及ばず、「今は、父たる愛情を犠牲にして、大將たる權威を行ふべき場合である」と告白し、斷乎たる處置を行はれたことがある。私共は人情のために、正義を枉ぐることを許されないのである。(二四―三三)

### 一九 悲慘なる勝利

(サムエル後書第十九章二―二三)

一時にヨアブに告ぐる者ありていふ、視よ、王はアサロムの爲に哭き悲しむと。ニ其日の勝利は凡の民の悲哀となれり。其は民其日王は其子の爲に憂ふと言ふを聞きたればなり。三其日民は戦争に逃げて差むたる民の竊びて去るが如く、竊びて城邑にいりぬ。四王は其面を掩へり。王大聲に叫びて、わが子アブサロムよ、アブサロムわが子よ、わが子よといふ。五こゝにヨアブ家にいり、王の許に至りていひけるは、汝今日汝の生命と、汝の男子、汝の女子

の生命、および汝の妻等の生命と、汝の妾等の生命を救ひたる、汝の凡の臣僕の顔を差むせたり。\*是は汝おのれを惡む者を愛し、己を愛する者を惡むなり。汝今日汝が諸侯伯をも諸僕をも顧みざるを示せり。今日我さとる。若しアブサロム生きをりて、我等皆死にたらば汝の目に適ひしならん。七されど今立ち出て、汝の諸僕を慰めてかたるべし。我エホバを指して誓ふ、汝若し出ずば、今夜一人も汝とともに止るものなかるべし。是は汝が若き時より今

に至るまでに蒙りたる諸の災禍よりも汝に悪しか  
るべし。八是に於て王たちて門に坐す。人々凡の民  
に告げて、視よ、王は門に坐し居るといひければ、  
民皆王の前に至る。然れどイスラエルはおの／＼其  
天幕に逃げかへり。九イスラエルの諸の支派の  
中に、民皆争ひていひけるは、王は我等を敵の手よ  
り救ひいだし、また我等をベリシテ人の手より助け  
いだせり。されど今はアブサロムの爲に國を逃げ  
てたり。一〇また我等が膏そゞぎて我等の上におき  
しアブサロムは戦争に死れり。されば爾ら何ぞ王を  
導きかへらんことを言はざるや。一一ダビデ王祭司  
ザドクとアピヤタルに言遣はしけるは、ユダの長老  
等に告げて言へ、イスラエルの全家の言語王の家に  
達せしに、爾ら何ぞ王を其家に導きかへる最後とな  
るや。一二爾等はわが兄弟、爾らはわが骨肉なり。  
然るになんぞ爾等王を導き歸る最後となるやと。一三  
又アマサに言ふべし、爾はわが骨肉にあらずや。爾

ヨアアにかはりて常にわがまへにて軍長たるべし。  
若しからずば神我に斯なし、又重れてかくなしたま  
へと。一四かくダビデ、ユダの凡人をして其心を  
傾けて一人の如くならしめければ、彼ら王に、れ  
がはくは爾および爾の諸の臣僕歸りたまへといひお  
くれり。一五是において王歸りてヨルダンにいたる  
に、ユダの人々王を迎へんとて、來りてギルガルに  
いたり、王を送りてヨルダンを濟らんとす。一六時  
にバホリムのベニヤミン人ゲラの子シメイ、急ぎて  
ユダの人々とともに下り、ダビデ王を逐ふ。一七一  
千のベニヤミン人彼とともにあり。亦サウルの家の  
僕サバも其十五人の男子と二十人の僕をしたがへて  
偕に居たりしが、皆王の前にむかひてヨルダンをこ  
ぎ渡れり。一八時に王の家族を濟し、また王の目に  
善しと見ゆるところを爲さんとて濟舟を濟せり。爰  
にゲラの子シメイ、ヨルダンを濟れる時、王のまへ  
に伏して、一九王にいひけるは、わが主よ、れがは

くは罪を我に歸するなかれ。また王わが主のエルサ  
レムより出て給へる日に、僕が爲したる悪しき事を  
記憶え給ふ勿れ。れがはくは王これを心に置き給ふ  
なかれ。二〇其は僕我罪を犯したるを知ればなり。  
故に視よ、我今日ヨセフの全家の最初に下り、來り  
て王わが主を逐ふと。二一然るにゼルヤの子アピシ  
ヤイ答へていひけるは、シメイはエホバの膏そゞぎ

し者を誣ひたるに因りて、其がために誅さるべきに  
あらずやと。二二ダビデいひけるは、爾らゼルヤの  
子よ、爾らのあづかるところにあらず。爾等今日我  
に敵となる。今日豈イスラエルの中にて人を誅すべ  
けんや。我豈わが今日イスラエルの王となりたるを  
知らざらんやと。二三是をもて王はシメイに爾は誅  
されじといひて、王かれに誓へり。

◎諺に「不具の子ほど尙可愛い」といふことがある。ダビデのアブサロムに對する愛  
情が、全くそれであつた。彼はその不肖なる叛逆兒を悼み悲しんで、自ら制する能は  
ざるに苦しんだ。彼は大聲に叫んで「わが子アブサロムよ、アブサロム、わが子よ、  
わが子よ」と、とめどもなく悲しむので、それを聞いた人民は、戰に勝利を得たにも  
拘らず、反つて敗軍して落ち行く者でもあるやうに、竊びやかに邑に入る他はなかつ  
た。それは此の日の勝利がダビデに愛子を失はしめ、その爲に彼を堪へ難き苦痛の中  
に突落したからであつた。然しながら又考へて見れば、凡そ戦争といふものは、その